

91-1□



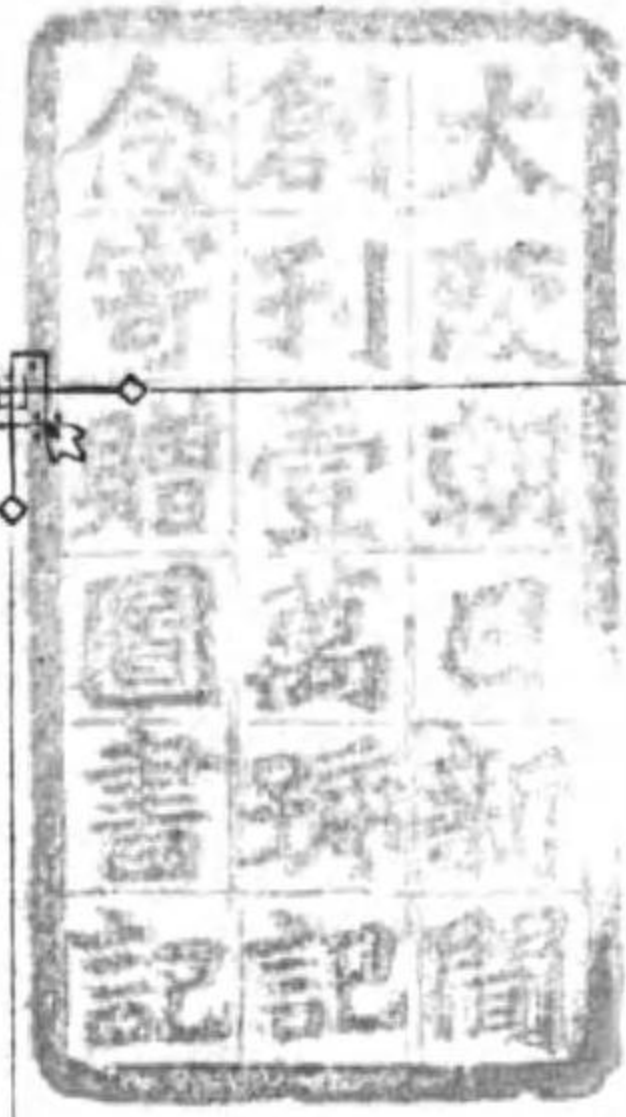
1200701744912



始



45



訂正再版

91-12

文學博士坪内雄蔵著 五卷

文學叢書

英文學史

早稻田大學出版部蔵版

44.3.14
寄贈

文學叢書發行之趣意

我學校像て歐米に所謂「大學普及事業」の聲に倣ひ或は盛に諸科の講義録を發行し或は講義を各地方に開き以て高等國民教育の擴充を圖ること茲に年あり然るに従來は政治法律經濟外交史學等の著譯を紹介するに忙うして未だ曾て純文學の鼓吹に従事するに及ばざりしが今回漸く幾分の餘力を得たるにより乞うて斯學専門の諸家を起たしめ新に活動の端を發き文壇刻下の沈睡を攪破し兼れて文學の新機運を招致せんと企圖す乃ち其の手段として一面は古きを東洋の古傑作に温れて斬新なる評論註釋に新智開發の道を開くと同時に一面は泰西最新の名著傑篇を翻譯若しくは評論して十九世紀末造の大思潮を紹介し髣髴新理想の投影を傳へ以て將に來らんとする人事相の豫測に便ならしめんと期す而して本校の素志は主として世の闕典を補ふにあるがゆゑに所謂東洋の古傑作の如きは既に屢々紹介せられたるもの乃至稍々陳腐に屬せるものを避けて我が未來の文學的活動に關係最も深かるべきものさなくば世間に珍とせらるべきたぐひのもののみを選び且つ最も斬新なる方法によりて其の紹介に着手したり但し追々に事業の歩武の進むにつれて餘力の前陳以外に及ふとあるべきは論を俟たず若し夫れ本叢書の第一篇として刊行する坪内博士講述の『英文學史』は便宜によりて泰西文學紹介の總序に代へたるもの所謂文學叢書の例外たるを了せられ既に着手せる著譯註釋類は左の如し

奧林子撰註	元祿七部集略集	俳諧七部集略解	有職故實	謠曲評釋	支那說書	小說學	元曲學	英文學	英文學	英文學	歐米短篇集	名家	イブセン作社會劇	トルストイ伯著	アンナカレニナ	フライタツ著	ゾル、ウインド、ハアベン	フロバ、ホゾリ	マダム、ホゾリ	ハーデー著	テ	ストツダ著	英國小説進化論	シエーグスピア	ドイケン著	オールド、キユリ、オシチー、シヨップ	聶庭薰村著	宮崎三味選	尾崎紅葉著	赤堀又次郎著	早稻田國文學會編述	宮崎三味譯	森槐南著	坪内雄藏著	坪内雄藏著	增田藤之助著	島村瀧太郎譯	高安三郎譯	尾崎紅葉瀨沼夏葉譯	登張信一郎譯	上田敏譯	梅澤精一譯	千葉鑽藏譯	中島茂一譯	内田貢譯
-------	---------	---------	------	------	------	-----	-----	-----	-----	-----	-------	----	----------	---------	---------	--------	--------------	---------	---------	-------	---	-------	---------	---------	-------	--------------------	-------	-------	-------	--------	-----------	-------	------	-------	-------	--------	--------	-------	-----------	--------	------	-------	-------	-------	------

英文學史

緒言

本書はもと東京専門學校文學科邦語講義録の爲に起稿せしものなるを、數改補して再三講義録に掲げ、こたび又修正して此の一卷とはなせるなり。此の間六七年を経たりしゆゑ講者の着眼も移りゆきて、初と中、後とは講述の鹽梅一様なる能はず、叙事の繁簡宜しきを得ざる箇所いと多し。此のたび一つに纏むるに當りて、及ぶべき限りは、かゝる失を除かんと力めたりしも、不調和の痕跡所々に残りて、また如何ともなしがたし。初學入門の當用ほどには、かくても尙足りぬべきかと思へど、或は誤りて博識者の眼にも觸るゝことあらんかとして、斷りおく也。

引用、参考の書類のうちにて、負ふ所尤も多きは、ブルック、ダウデン、ゴッス、セイニンツベリ、テューヌ等の諸家なり。就中、近代に關する分は、主としてセイニンツベリ氏の『十九世紀英國文學史』に據り、傍ら諸家の見を參酌せり。凡そ諸家の意見は、之れを援引する毎に、概ね其の姓を掲ぐるを例としたれど、特に標示すべきほどの必要もなしと認めたるは、其のまゝに義譯して本文中に攝取したり、かゝる例近代文學の篇中に多し。初め講義録の稿を作るに當りて、抄譯又編纂に、杉谷虎藏氏を勞せしと尠からず、こゝに記して感謝の意を表す。

明治三十四年五月

著者識

英文學史再版

はしがき

本書の再版は、事多く閑乏しき、頗る不便宜なる時機に成れり、されど心附きたる限の第一版の誤謬は、それ〴〵訂正を施したり。憾むらくは第一版を贈りて誨を乞ひたりし諸家の批評は、再版校了の間際までも、殆ど全く聽くことを得ざりき。僅に一二雜誌上に見えたる匿名氏の評言によりて多少啓發せらるゝ所ありしのみ。

十九世紀史に關する分の批判は、間接ながらほのきけり。或は曰はく疎に過ぐと、或は曰はく誤謬ありと。予は敢て分疏せんとはならず、然れども通篇九百餘頁のうちにて、上四期の史に

五百幾十頁を費し、下十九世紀だけに三百幾十頁を費せる、釣合上よりいへば、強ち疎畧ともいふべからざらんか。只其の材料に至りては、凡そ十中の八分まではセイントンツベリ氏の著を本躰とし、他力を借りて之れを抄譯し、其の辭句を添削し、尙諸家の説を摺撫し、自家の見を加へ、かくて綴り做せるものなるゆゑ、大かたは原書と引あはせて校訂したれど、尙時に思ひがけぬ誤譯、謬抄等無きとを保せず。こたび既に心づきて改め正したるも間々あれど、尙蒼梧洞主に打驚かされたる數箇條の如きあり、慚謝に堪へざるなり。若し諸家が好意の忠告を得て餘れる誤謬をも正すを得ば、著者が悦びは更にも言はず、廣く購讀者の幸也。發音は大抵ウ、ブ、スタ、ア、フ、ンクなどに據りて定めたれど、不注意若しくは獨學の積習に誤られて、正例に違へるもの尙或は有

りぬべし、謹んで博雅の是正を俟つ。

外國の地名、人名は稍々新しく聞えたるは、大概大陸讀みに従ひたれど、多年聞きなれたるは、英國讀み又は俗の稱呼に従ひたるもの多し。

表音法は科學的に定めたるにあらず。例へば、讀者をして綴字鹽梅を聯想するの便あらしめん爲に *ou, oi, oi* などに於ける曖昧なる母音に伴へる *o* を他の *oi* の場合と分ちて *o* 行を以て表したるが如き、純ら便宜上の沙汰なるのみ。シェークスピア、ヨオクシヤ、デーン、エーヤなどの *o* をヤ音を以て表したる、前の格を破るに似たれど、是れ將た發音上の便宜のみ、二つには、前後九百頁に涉りて漏れなく一定にステロの誤を正さんことの覺束なさにもだしつ。

Daniel をダンエル、William をウィルヤム、Junius をジュニアスなど表音する格によらば、Tennyson、Emerson はテニスン、エマアスンとあるべきならん、これも心附きたれど、同じ理由にて元のまゝに存したり。此のたぐひ他にもあり。

譯語のうち妥ならずと心附きながら、同じ心にて元の儘に据え置きたるものゝうち、特に讀者の注意を乞ひたきもの一二あり。一は「ローマン派」といふ稱謂なり、こは Romantic School の譯なれば寧ろ「ローマンチズム派」とあらんかた穩當なり、稱へ易からんを專として佛語を根とせしは杜撰に近かりき。又「ロマンス」を今の所謂「小説」と分たん爲に、すべて「傳奇」と譯したりしは「紅樓夢」「水滸傳」等に思ひ寄せてなりしが、或は誤解を醸さんか、寧ろ「物語」など譯すべきものなり。又本書の表題の「英文學史」も妙な

らず、こは講義録以來の畧稱呼なりしを、ふと其のまゝに襲用せしなり、「英國文學史」と題すべかりき。又「校友」といふ語處々にあり、こは總て Fellow の假譯なり、我が國に謂ふ「校友」と同じ資格のものとして誤ること勿れ。

『帝國文學』第十二なる蒼梧洞主の評は此のはしがきを草すると同時に讀めり、洞主が好意を謝するの意を表して其の評を悉く卷末に掲録せり。

尙斷るべきことありとおぼゆれど、歳晚多忙、只肝要なる一二事を記するにとゞめつ。

卅四年十二月中旬

著者識

英文學史上卷

目次

第一篇 与古期の文學

第一章 英國の原住民及びアングロ、サクソン族

英文學史と英國原住民——ブリトン族——アングロ、サクソン族
——其の故國及び特質——英國の地理——アングロ、サクソンの宗
教觀——『エツダ』の主旨——アングロ、サクソン族と英國人

第二章 ノオマン 征略以前の文學

アングロ、サクソンの詩歌——其の律格——『ビオウルフ物語』——古
代詩歌の特質——基督教の傳來——アングロ、サクソン族と基督
教——ケドモン——『聖書のメトリカル、パラフレーズ』——ケドモン
以後——同代の散文——ビード——アルフレッド大王——デーン族の

來寇——『サクソン、クロニクル』——アングロ、サクソン語と英吉利語

第三章 ノオマン征略以後の文學……………二六

ノオマン征略と國語及び國文學——外國語の跋扈——國文學再興の端緒——宗旨歌——『オオミユラム』——物語歌——『レヤモンス、ブラット』

第四章 新國文學……………三四

エドワード三世の功業——デボン、ウイクリッフ——宗教改革の端緒——新舊約全書の翻譯——國勢の進歩

第五章 デヱツフレ、チヨーサア……………三九

經歷——特質——律格——其の傑作——『カンタアペリ物語』——パラモン、アーサイト物語——其の他の梗概

第六章 チヨーサアと同代の詩文人……………五六

デボン、ガワア——ウイルヤム、ラングラランド——『ビヤアス、ゼ、プローマンス、ドリーム』——デボン、ア、トレ、サ——デボン、マ、ンド、サ

第七章 チヨーサアの死後一百年……………六〇

模倣時代——詩歌——デボン、リド、ゲート——蘇國詩人——散文——カクストン——印刷術の輸入——古文學研究熱——圖書館の設立

第八章 文運興隆の遠因……………六五

歐洲の暗黒時代——當代の社會——其の反動——宗教革新——ルチッサンス(學藝復興)——英國の狀態

第九章 ヘンリ八世の朝……………七一

ヘンリ八世と國文學——古文學研鑽——當代の散文——トマス、モリア——『ユートービヤ』——ウイルヤム、チンダル——聖書の翻譯——當代の詩歌——スケルトン——蘇國の詩歌——リンドセイ——トマス、ウアイヤットとサリー伯——新詩體——無韻律語

第二篇 エリザベス朝の文學……………八五

第一章 緒論……………八五

英文學史上卷 目次

女王エリザベスの治世—國力の膨脹—當代の國俗—大自由の時代—美醜の混淆—演劇的社會

第二章 第一期エリザベス文學……………九二

本篇の細分—詩歌—サククギル—ガスコイン—其の他の詩人—翻譯熱の時代—物語類、バラッドの流行—試験時代—修史家—フアビヤン—ホール—ホリンシェッド—海外の奇談—小冊子の出版

第三章 第二期エリザベス文學……………一〇五

デモン、リ、—『ユーヒューエズ物語』—フィリップ、シドニ—『アーカザヤ物語』—批評文の嚆矢—『詩辯』—シドニ以後の批評家

第四章 エドマンド、スベンサア……………一二一

其の出生前—『牧羊者十二月記』—其の生涯—其の著作—『神女王』の特質及び寓意—スベンサアの特長—『神女王』の梗概—其の律格

第五章 スベンサアと同代の詩人及び散文家……………一五一

エリザベス時代の詩歌—第一小期—戀愛の詩—ソネット體及びソング體—第二小期—愛國及び國史の詩—諷刺詩—第三小期—哲學的詩歌—散文家—フッカア及びローリー

第六章 フランシス、ベーコン……………一六二

當時の學界—學風の革新—ベーコンの經歷—著述—『學風刷新論』—其の學說—『短論文集』—其の文章

第七章 劇壇並びに脚本家……………一七四

英國劇—神秘劇—其の脚本—教訓劇—其の脚本—其の特質—正劇の端緒—ヘイワード—問劇—正劇—喜劇—悲劇—其の體式—散文劇—劇場及び俳優—古代劇

第八章 リ、及び大學才子……………一九四

デモン、リ、—大學才子派—ジョー、ルジ、ピール—ロバート、グリー

ン——キッド、ナッシ及びロッヂ——諸家の概評——マールロー——其の作 六

第九章 シェークスピア……………二〇五

經歷——第一フォリオ——其の著作期——第一期——第二期——第三期——第四期——劇詩——叙事詩及び抒情詩——四大悲劇

第十章 ベンジャミン、ジョンソン……………二二九

新文明の豫言者と謳歌者——ベン、ジョンソンの經歷——著作——假面劇——ベン、ジョンソンの聲價——テーマのジョンソン論

第十一章 シェークスピア、ジョンソン以後……………二二七

第三期の劇詩家——ボームント及びフレッチャア——トマス、ミッドルトン——ザロン、ウエブスター——第四期の劇詩家——劇壇の衰微

英文學史中卷

目次

第三編 内亂時代の文學……………二三九 頁

第一章 内亂時代の範圍……………二三九

文學上の内亂時代——内亂の真相——清淨教徒の勝利——其の結果——當代文學の概況——王黨詩人——其の特質——ザロン、ドーン——ヘリック——其の他の詩人

第二章 ザヨン、ミルトン……………二四九

生涯——第一期——『ヨーマス』——其の梗概——ミルトンの特質——第二期——當時の政治界及び宗教界——三大自由論——『アリオバシチカ』——第三期——『失樂園』——其の梗概——其の他の著作——諸家のミルトン論

第三章 論文壇……………二六九

論戰盛行の時代—テイロア—ブラウン—クラレンドン伯—
其の他の論文家—復位期の論文壇—文牋の變化—第二流以
下の文士

第四章 學術界……………二八三

學術の勃興—ホッパス—其の哲學と當時の社會—ウイルキンズ
—ロック—ニュートン—其他

第五章 新聞雜誌の發端……………二九三

新聞紙の起源—其の進歩—雜誌の起源—圖書館の設立

第六章 復位期の文學……………二九七

枯禪主義の弊—其の反動—道義頹廢の社會—當時の詩文人
—論文家—純文學壇の三傑作

第七章 ジョン、バンヤン……………三〇六

バンヤンと清淨教—其の生涯—其の著作—『天路歷程』の梗概

—『天路歷程』と『西遊記』—バンヤンとミルトン—諸家のバン
ヤン論

第八章 サミュエル、バトラア……………三二四

ミルトンとバトラア—バトラアの生涯—『ロューゲアラス』—
『ロューゲアラス』と『ドン、キホーテ』—バトラアの詞致

第九章 復位期の詩壇……………三三二

詩牋ノ變化—ヒロイック、カッパル體の流行—復立期の諸詩人—
ウォーラア—カウラー—デーヴナント—諷刺の詩及び談理の
詩

第十章 ドライデン……………三四〇

専門文學者—新舊詩人の差別—ドライデンの生涯—著作—
劇詩家としてのドライデン—叙事的抒情詩人として—彼れ
の多方面

第十一章 當時の劇壇文學(上)……………三四八

演劇禁止令の解除—新作の需要—デーウナント—ワイルソン
—エセレッダ—シヤドエル—古劇派—ベン—ウイツチェリー—オ
トエー—其の他の諸家

第十二章 當時の劇壇文學(下)……………三五九

オレンジ朝派の諸作家—喜劇の流行と進歩—コングリーヴ
其の特質—其の諸作—シッパア—ヴァンブール—フアイター

第四編 十八世紀の文學……………三六五

第一章 概論……………三六五

英國十八世紀文學の區域—其の前期—其の後期—英國のオ
ーガスマス時代—擬古文學時代—當代の諸作家—グラア街
の窮才子—社會の狀態—散文文學の興隆—散文詩—小説及
ひ歴史の興隆—劇詩界

第二章 アダソンとス井フト……………三七七

前期の二大文章家—其の異同—アダソン—其の生涯—其の

著作—其の特質—其の文致—ス井フト—其の生涯—其の著作
—『桶物語』—『カリプア巡島記』—其の特質

第三章 前半期の散文家……………三九六

ス井フト、アダソン以外の作家—スチール—『タトラア』—『ス
ペクテートア』—スチールの功績—シヤフツベリ伯—マンド并
ル—バアクレ—其の他の論文家

第四章 アレクサンダア、ポープ……………四〇六

詩歌の擬古時代—アレクサンダア、ポープ—生涯—著作—『批
評論』—『The Rape of the Lock』—『英譯イリヤッド』—『英譯オゲッセ
ー』—『人間論』—『愚人物語』—ポープの長技

第五章 ポープと同時代の諸詩人……………四二一

ポープと其の前後の詩人との關係—アラックモア—アライ
オア—ゲイ—バーチル—ウィンチエルシー伯夫人

第六章 ダンエル、デフォー……………四二六

十八世紀文學の價值——英國小説の濫觴——十八世紀以前の作物語——新小説の興起——其の特質——『ロビンソン、クルーソー』と上代の小説類——讀者の傾向——デフォーの傳——其の著作——『ロビンソン、クルーソー』——其の價值

第七章 サミュエル、リチャードソン……………四四〇

リチャードソンの生涯——書信録の小説——著作——『バメラ』——その批評——『クラリッサ、ハーロー』——その批評——『士爵チャールズ、グランサソン』——その批評——總評

第八章 ヘンリ、フィールディング……………四五二

リチャードソンとフィールディング——フィールディングの本領——生涯及び著作——『アモセフ、アンドリュース』——『アウナサン、ワイルド』——『トム、ヤコンス』——『アミリヤ』——總評

第九章 スモーレット及びスタアン……………四六二

スモーレット——生涯及び著作——『ロアリック、ランドム』——一代記

——其の作の特質——『ハムフレ、グリーンカア』——スモーレットの社會觀——人性研究——スタアン——生涯——爲人——著作の特質——文牒

第十章 其の他の小説家……………四七五

小説發達の第一期——四名家の特質——其の他の作家——フィールディング——博士ヤコンソン——ゴールドスミス——バアチー女史——其の他

第十一章 サミュエル、ジョンソン……………四八一

十八世紀の前半と後半——風尚の平等時代と差別時代——ジョンソンが一代に覇たりし所以——ジョンソンの傳——其の著作——『英國大辭典』——『ラセラス物語』——文學會——『詩人傳』——ジョンソンの特質

第十二章 史傳家及び論文家……………四九三

史傳の著者——ヒューム——其の略傳——『大ブリテン史』——『宗教の自然史』——ロバートソン——其の略傳——其の著述——ギッボン——其

の略傳——其の著述——『羅馬衰亡史』——『ボスエル』——其の『デモンソ
ン傳』——論文諸名家——『バアク』——其の他——書簡文

第十三章 ヤングよりグレイに至る諸詩人……………五二二

詩風の變移——ヤング——『夜思』——ヤングと同期の第二流詩人
——トムソン——『四季の歌』——『懶惰城』——コリンズ以下の小詩
人——グレイ——其の諸作——『墓吟』

第十四章 グレイ以後の諸作家……………五二五

十八世紀の末葉——詩壇の沈滞——文學上の二大欺騙——チャッタ
アトンのローリ詩集——マックファアソンのオッシュン 翻譯——オッシュ
ン然——其の他の小詩人——ゴールドスミス——其の傳——其の作
——劇の作家シエリダン——當代の劇詩界

第十五章 外國文學との關係……………三七五

英國文學と大陸との關係——主客師弟の關係の顛倒——十八世
紀の英國著述の佛國名士に於ける影響——獨逸文學に於ける

影響——十八世紀末葉の風潮——個人と社會との争闘——其の結
果——三大思潮——偽平等主義——十九世紀の思潮

英文學史下卷

目次

第五編 近代の文學

第一章 歐洲近代の革命思潮

精神上、物質上の變動——英國社會の進歩——佛國の大革命——獨逸の勃興——思想上の二大潮流——パアンズ——其の略傳——其の諸作——文致と好尚との革新——クーパー——其の特質

五五七

第二章 ローマン派

ローマン派の由來——新思想の二派——史詩派の特質——其の代表者——サウジの諸作——スコット——其の諸作——韻語——小説——コットの長短

五六七

第三章 哲學派

英文學史下卷 目次

五八一

哲學詩派の特質—英國の哲學詩人—ウオオヅチオスの傳—其の詩論—其の特質—諸家の批評—『エキスカアション』—シエリ—其の閱歷—其の特質—其の革新思想—其の諸作—十九世紀の二大勢力

第四章 バイロン……………六〇〇

バイロンの略傳—其の名編『チャイルド、ハロルド』—其の他の諸作—其の爲人—其の末略—主觀詩人の標本—シエリ—との比較—バイロンの感化影響

第五章 其の他の詩人……………六一二

變遷期の四作家—アレーク—クラップ—コーレルリッヂ—其の略傳—其の諸作—キーツ—其の價值—カムベル—モーア—ハント—ローヤアス—其の他

第六章 新代小説家……………六二三

バアチー女史の晩作—恐怖物語の流行—リュキスとマチューリ—其の傑作『メルモッス』—オースチン女史とエツゲチオス女

史—エツゲチオスが諸作—オースチンが諸作—オースチンが位置—歴史小説—スコット—其の他の歴史小説家

第七章 ザッケンス及びサツカレ……………六三八

ザッケンス—其の略傳—其の諸作—其の價值及び特質—サツカレ—其の略傳—其の諸作—其の價值及び特質

第八章 其の他の小説家……………六四九

マリヤット—リヴァ—サスレーリ—ビーコック—ボオロー—マーチノー女史—ミッドフォード女史—其の他

第九章 定期出版物の發達……………六五六

十八世紀の新聞紙、雜誌—十九世紀の諸雜誌—『コッベット』と『ウィクリ』、『レジスタア』—『ゲエフレー』と『エザンバラ』、『レジャー』、『シドニ』、『スミッス』—『クオールタリー』、『レジャー』の諸記者—其の他の雜誌—『ラム』—『ハズリット』—『ウィルソン』—『ロックハート』—『アクインシー』—『リ』、『ハント』—『コーレルリッヂ』—『マジン』—『スタハリメンク』—『フィッツ

第十章 歴史家

ゼラルド

六八九

史家と詩人—十九世紀の史家—ハラム—ロスコー—ミトフォ
オド—ターナーアとリンガード—バルクレーヴ—マグリ
アーノルド—其の他の諸家

第十一章 マコーレー

六九九

マコーレー—其の傳—其の著述—其の特質—韻語家として
—論文家として—歴史家として—彼れか史筆の特質—マコー
レーの人格

第十二章 カーライル

七一〇

其の血統—其の傳—其の諸著—カーライルの品性と功業
—文學者—歴史家—其の特質—其の人生觀—宗教觀—諸家
の批評

第十三章 カーライル以後の歴史家

七二五

キングレーキ及び其の同時諸史家—フォオスター—バックル
フリーマン—グリーン—フルード—其の傳—其の諸著—
其の文章

第十四章 テニソン

七三五

十九紀後半の詩壇—其の特質—其の代表者としてのテニソ
ン—其の傳—其の諸作—桂冠詩宗の由來及び傳統—キーツ
とテニソン—其の詩人としての特質、價值

第十五章 ブラウニング及びブラウニング女史

七五三

ブラウニングの傳—其の諸作—エリザベス、パレレットとの
結婚—『環と巻』—ブラウニングが作の是非—ブラウニング
研究會—其の作の特質—ブラウニング女史の傳—其の諸作
其の特質

第十六章 其の他の詩人

七六七

マッシュニー、アーノルド—ブリ、ラファエル派—其の作及び特質—

ロセッチ兄妹——其の作及び特質——オショーチシー及びトムソン——タッパア以下の諸詩人スバスマオナツケ派(癡癡派)——クラッフ——ロッカア——リットン——モオリス——ス井ンバアン

第十七章 最近小説家……………七九九

時勢と小説——シャールロット、ブロンテ女史——其の姉妹——カアラフ、ベル——其の傑作『ゲエーン、エーヤ』——チャールズ、キングスレー——其の小説及び韻語——アンソニー、トロロップ——チャールズ、リード——ヘンリ、キングスレー——ステヴンソン

第十八章 最近評論壇……………八二四

雜誌世界——『ハウスホルド、ウオオグ』——主筆ゲッケンヌ——ウィルキー、コリンズ——『サタアデー、レギュー』——『コオンホル、マガジ』——『イグミラン、マガジ』——『サカレ』及び『アーノルド』——キングスレー兄弟——雜誌と評論——『フォオトナイトリ』——『コンテムポラリー、レギュー』——『十九世紀』——評論家——文章家——バビオット——アーノルド——ラスキン

第十九章 哲學壇及び神學壇……………八四五

哲學界の文士——ゲエレミ、ベンサム——ステュアート、ミル——ミルの諸著——ミルの特質——ウィルヤム、ハミルトン——ヘンリ、マンセル——ホエトリとホイウエル——法理學、經濟學界の文士——オースチン——メリン——スチーブン——神學界の文士——ビュージ——キーアブル——ユニーマン——其の略歴——其の諸著——所謂オックスフォード派の運動——文章家としてのニューマン——オックスフォード派の諸文士——其の反對派の文士

第二十章 科學壇の文才……………八七一

博言學乃至古語學界の文士——ブライヤント——ウエークファイールド——ボオソン——コニングトン——マンロー——セラア——スミス——理化學界の文士——デボニー——フェアファックス——ダー井ン——チャムバラス——ヒュー、ミラア——ハックスレー

第二十一章 脚本……………八八一

十八世紀以前の脚本と十九世紀の脚本との相違——インチボ

イールド女史の作—ジョン、オキーフの作—ペーリー女史—技
巧悲劇—傳奇劇復興運動—學者劇—シェリダン、ノールズの諸
作—リットンの諸作—梨園外の作劇家

第二十二章 總收

八八九

十九世紀文學の價值—詩歌變遷の五期—自然主義—ローマ
ン派—詩人の輩出—テニソンとブラウニング—模倣と創
作—プリ、ラファエル派の運動—詩歌の全盛期—小説界の變遷
—文學と生活—定期出版物の發達—匿名の流行—歴史文
學—劇文學—神學—科學—美學家—其他—現未の疑問

英文學史

坪内雄藏著

第一篇 上古期の文學

第一章 英國の原住民及びアングロ、サクソン族

英文學史と英國原住民—アリントン族—アングロ、サクソン族—其
の故國及び特質—英國の地理—アングロ、サクソンの宗教觀—
「エング」の大意—アングロ、サクソン族と英國人

一國民の動靜を傳録するもの之れを國史といふ。動靜に内界的と外界的との別
あり。外界に現れたる一國民が動靜、即ち客觀の事變、行爲を傳録するものは、假に
之れを客觀史と名づくべし、政治史、實業史などは其の例なり。別に内界の動靜、即
ち、一國民が思想、感情、想像、好尚、信仰及び理想等の進化、變遷を叙するものあり、之れ
を假に主觀史と稱すべし、文學史、哲學史の如きは是れなり。

一個人を知らんとすれば其の所爲を視、其の所由を觀、其の所安を察せざるべから

ざるが如く、一國民を詳悉せんとすれば、先づ其の所爲の史(客觀史)を精讀し、次に其の所由と所安との史、即ち主觀史に通ぜざるべからず。就中國文學史は譬へば、一國民が肺肝の活動をさながら温きまゝに露呈せるが如きものにて、客觀史上の種々事變の眞因縁、種々行爲の眞動機は、特に國文學史上にのみ見いださるべきなり。之れを文學史の人間研究の一要件として重視せらるべき所以なりとす。文學史を上にいへる如き意義に解釋すれば、英國の原住民と英國の文學史との間には殆ど些の關係も無し、英國の原住民は何等の文學をも後の英國國民に遺さざりしが故なり。今の英語、英文及び今の英國人の感想は、殆ど聊かも原住民の言語、感想に負ふ所なし。左に少しく英國上古の史を語りて、此の理を明かにせん。今をさること一千四百餘年前には今日英國と通稱せる島をブリテン島と稱し、其の住民を**ブリトン族**と呼べりき。ブリトン族は、最も早く亞細亞より歐洲に西漸せしケルト蠻族の一派にして、ゴール、キムフリ等と其の血脈を同うせり。この種族が英國に移住せし年代は詳かならず。只若干の傳説あるによりて僅に當時の狀況の一斑を髣髴するに足るのみ。彼のリーヤ王の傳説の如きは其の最も

顯著なるもの一なり。

ブリテン島が南歐の文化に接觸せしは、紀元前五十五年以後の事とす。羅馬の將ヂリヤス、シーザア、北の方ゴール(今の佛國)を征せし後、兵を率ゐて渡來し、ブリトンを克服すること前後二回に及べり。是れ、英國が羅馬に隸屬せし發端なり。其の後まばく、背叛せしが、紀元後一世紀の頃に至りて、今の英倫土の地方は全く羅馬國の版圖となりぬ。爾後、羅馬政府は、此の地に戍兵を置き、内は歸順せる土民を治め、外はウェールス地方の蠻民、及び北方スコットランドに住めりしピクト族、スコット族の侵掠に備へたりき。此の間四五百年(我が朝崇神帝より允恭帝に至る年代)羅馬政府は力めて自國の言語、宗教、法制等を島内に布き、或は道路を修め、或は寺院、學校を建設し、ひたすら力を教化に用ひたり。かくて第五世紀に至り、歸順せるブリトン族、漸く南歐の文化に浴し、殊に宗教の如きは、次第に羅馬のを信ずるに至り、北方スコットランドの蕃民さへも其の化に浴せんと志たりし頃、羅馬本國はゴッス蠻族の來寇によりて大に亂れ、國家殆んど危きに及びしかば、此の地に在りし羅馬兵等は、其の急を救はん爲め、急ぎ本國に引返しき。ピクト、スコット等これを機として頻

りに劫掠を恣にする。島民大に苦めり。フリトン族が困苦の景况は當時の俗謡によりて想見するに足る。曰はく「蠻人我れを海に逐ふ。海に逃るれば、風濤更に我れを逐ひてまたも蠻手におもむかしむ」と。

其の頃今の日耳曼と丁抹との國界なるシユレスホッフ、ホルスタイン地方に**アングル族**といふ強蠻あり、其の同族なるサクソン族と共に海賊を業となして常に北海に横行せりき。始めフリトン族のピクト、スコットに苦められしや、後患を慮るに遑なく、援を此れら蠻族に乞へり。彼れ之れを奇貨として陸續渡來し、先づピクト、スコットを撃退し、やがて更にフリトン人と戦端を開き、鬭争二百年の後、竟に全國を克服し、殆ど原住民と其の文化とを全滅し了りぬ。所謂サクソンの七王國の樹立するに至りしは此の時なり。かくて紀元後八百二十七年には、エクバートといふ英主出で、此の七王國を一統し、始めて英吉利王國の基を開きたり。これより先き、アングル族の名に因みて、此の國をアングラランド(アングル人の邦土といふ義と呼びたりしが、やがて轉訛して英蘭土と稱するに至りたり。フリトン族の生存せりしものは、殆ど悉く國外に離散し、婦女若干のみは克服者の婢妾となりて

残りぬ。勢ひかくの如くなりしかば、政治上に於ても國語上に於ても、フリトンは全く跡を絶ち、僅かにその片影を今のウールス地方に留めたるのみ。彼等の後の英國人に於ける關係は、ほゞ我がアイヌ、コロボツル等の大和民族に於けるが如し。眞の英國史は政治上よりいふも、文學上よりいふも、アングロ、サクソン移住以後にはじまるなり。

アングロ、サクソンの故國は彼の風濤險惡なる北海に枕みたる、林深く、沼多き濕地なり。空曇り、霧深く、雨雪時を定めずして降れるがゆゑ、其の地の住民は多く室内に蟄伏するの必要を感じ、若しくは、平素蟄伏せる反動の爲にたま／＼天晴るゝや、野に、山に、河に、海に、縦横に奔馳して、荒々しき遊獵をなすを好む。アングロ、サクソンは其の境遇の結果として、自然を友とする能はざりしがゆゑに、之れを敵としてよく戦ひ、早くより勁敵たる海を克服し、海を家となし、海を活動場となし、竟には海賊を其の業となすに至りき。

彼等は争鬪と掠奪と冒険とを以て男兒の事となし、天少しく霽るれば劍斧を双帆船に積み、近海を潜行し、若しくは遠方の地の上陸して、強奪殺傷を繼にし、捕虜を

斬りて祖神を祭り、火を四隣に放ちて歸る、是れ彼等が常習なりき。凜烈たる寒氣と此の激烈なる職業とは、彼等をして強き飲料と多量の食物とを要せしめ、且つ其の娛樂を耳目に取らで、口舌に取るに至らしめき。牛飲馬食は、其が尤も嗜む所にして、沈鬱と嚴格とは、其が外貌の通具性なりき。彼等は筋骨逞しく、忍耐強く、最も冒険の勇に富みて、卑怯懦弱を卑めり。其の弊をいへば、殘忍苛酷なりしこと也。其の美德をいへば、嚴格にして勇敢なりしと、特行獨立の氣象に富めりしと、義務を重ざる念の厚かりしと也。蓋し、彼等は戸内に黙居する日多かりし故に、肉體の美よりも精神の美を重ざるの念、即ち、君に忠、夫に貞、朋友に信、親に孝、などいふ義務の念割合に早く發達したりしなり。殊に、其の婦女輩の貞烈なりしは、間々彼のスバルタの婦女をも凌ぎたりきといふ。

此の人種が移り住みしブリテンの島は、其の地勢も、其の氣候も、頗る本國のに類したれば、彼等が生活上の習慣は敢て改むる必要もなく、随つて其の固有の性癖は依然として移住後まで繼續せりしが、流石に新國土の地勢、氣候の、幾分か温和なりし爲めの故にや、其の惡徳は、年と共に幾分か其の甚しきを減じ、文化のやゝ進むにつ

れて、其の美德はやゝ發達せり。殘忍殺伐なる本具性は容易に滅するに至らざりきと雖も、其の粗暴なる習癖は、次第に善化し、同時に虛文に泥まらずして實行を重んずるの性を養成し、其の殘害を悦ぶ心も、往々にして勇敢の徳を生み、義烈廉恥の良風を、長じぬ。彼等は常に浮きたる情交を卑みし故に、サクソンの上代には、所謂戀の歌殆ど無し。

かゝる人種なれば、**宗教思想**の如きも、尋常の蕃族と同じからず。上代にこそ若干の軍神などもありしが、本來有形物に重きを置かざる性なれば、強ひて神像を作ることゝ爲さず、以爲へらく、命運を、主る無形の神靈は肉眼には入らざるも、暗に義人の魂に感應すと。彼等は義勇任侠などの行の神明を感ぜしむべきを信じ、之れを以て其の行爲の理想とせりき。要するに、肉體上の快樂は、彼等が究竟目的となさざりし所、彼等は義を盤石に比し、命を鴻毛に喩へ、人生を戦闘と解し、人間最上の美德は身を殺して仁を爲すにありと信じたり。所謂北蠻族の創世紀「エッダ」、及びサクソン族が最古の韻語「ヒオウルフ物語」の如きは、最もよく此の情想を代表せるものなり。こゝに「エッダ」の**大旨**を抄録して、其の特殊の想を示さん。「ヒオ

ウルフ物語』のことは後に説くべし。

天地のはじめ氷寒、焦熱の二界あり。その時不可思議と呼ぶ一靈、颯風を起して氷寒界よりあまたの雪片を飛ばしけるに、この雪片化して巨大の颯物となりぬ、名づけてイミルといふ。イミルの時、未だ天地なく、混沌として晝夜の別を知らず。既にして氷寒界の融雪又一巨牛を生じぬ、これをアンドハムブラといふ。乳河を以てイミルを養ひ、さて巖石を嘗めけるに、巖石の中に巨人あり、三日にして其の全形を現はしぬ。これ神人なり、プルといふ。プルの孫、オーテン、其の二弟、ギイル、ギンと共に、巨颯イミルを殺し、これを無底の空際に投じ、以て天地を定む。イミルの肉は平野となり、其の骨は山嶽となり、毛髪は森林となり、齒牙は岩石となり、血液は大海となり、頭蓋は穹窿となりぬ。穹窿の四極大地に接する處、四個の矮鬼これを支ふ。さて、イミルの頭腦は溶散して雲となり、中有に彷徨して永く怨憤の色を帶ぶ。萬里の北極に幽界あり、妖鳥これを主る。怒りて飛べば颯風坤輿を震ひ、大海の鯨波碎けて煙となる。神人乃ち南方焦熱界の火片を招き、祝して世界の光さなしぬ、日月是れなり。かくて乾坤定まりける時、神人の二子海邊を巡行しけるに、とある處に二本の樹あり、一は逞しく、一は優美なり。二子すなはち之れを以て男女を造り、名づけてアスク、エムブラといふ。オーテン之れに精神を與へ、神人これに心智と血液と體色とを與ふ。是れ人祖なり。而して巨颯イミルの體中より出でたる無數の矮鬼は、皆神人の命を俟ちて人間に化すべきものにして、今や遠近の山間に棲めり、人聲に答ふる谷間のこだまはこの矮鬼なり、云々。

かくて三才始めて定まりけるが、彼のイミルの遺孽にフロストといふものあり、山海の惡靈と旋風とをかたらひてオーテンに仇す。是に於て天地共に戦亂の巷となる。ホルドル(仁和の神なり)、トル(雷神なり、氣界を掃蕩して萬物を生育す)及び人間は神人を助け、オートンス、海狼、毒蛇、妖雲等の靈は颯軍を助け、激戦百回にして決せず。神人時に敗るゝときは、驪雲天日を封じ、風は叫び、樹は鳴り、河海の水は逆流し、幽界の眷屬は氷洋を渡りて南漸す。是の時に方り人間は神人の爲めに此の惡靈の衝に當らざるべからざるもの、乃ち、死地に突進して百折不撓の勇を現し、奮戦奮闘、滿身に血を塗りて仆るれば、則ちオーテンの朝に迎へらる。かくて、死後オーテンの朝に列すれば、更らに神通力と不朽の生命とを賦與せられて、再び惡靈と戦ふ、是れ人間の天職にして人間最大の名譽なり。若し夫れ敵者を恐れて逃避するの怯者は、忽ち彼の妖鳥の嘴に啄まれて永く幽界に呻吟せざるべからず。而して神人と颯界との戦は永劫を期して終るべきもの、其の最後の勝敗は人間の努力に俟つこと大なり云々。

按ふに、此の如き慘酷激越の世界觀と人生觀とは、彼の幽玄跌宕を以て誇る印度、若しくは波斯の古鬼神譚以外に於ては到底見る能はざる所なり。和風麗日の希臘乃至古羅馬の人生觀と何等の相違ぞ。而してこは正に今の英國國民の遠祖が抱きし思想、情念にして、彼等はこれを根柢の情念、思想として、進化し、發達し、竟にスペインを出だし、マローロ、シエクスピアを出だし、ミルトンを出だし、バイロン、カール

イルを出だしなり。

アングロ族とサクソン族とは、もと分れたる種族なれども、中ごろ合稱してアングロ、サクソンといひ、其の國語をもアングロ、サクソン語と呼べり。是れ實に今の英語の根源也。後年種々の外國語入り來りて之れと混淆したるゆゑ純粹のアングロ、サクソン語の後の英語と異なるは、我が今日の俗言の、奈良朝時代の俗言に異なるが如く、字形も、語も、語格も、同じからねど、アングロ、サクソンの語脈は、なほ依然として傳存し、今日に至りても渝はるとなし。但し、外國境遇及び時勢が、尠からず人種の性格に影響したれば、外部の變遷は頗る著きものあり、殊にノオマン征服前の英國民と今日の英國民とを對照すれば、全く別人種の觀あれども、尠仔細に檢すれば、今の英人の性格中にも古代アングロ、サクソンが性脈は隱然たり。文學に現れたる所も亦同様なり。今日の英文學も其の外形こそは異なりたれ、其の精隨に至りては古代のアングロ、サクソン文學の精神と相呼應する所尠からずとなす。純粹のアングロ、サクソン語の詩文をアングロ、サクソン文學とも、ノオマン征服前の文學とも稱す。此の間約六百五十年、我が朝にては允恭天皇御宇の

末より冷泉天皇の御宇の末(賴義在世)に至り、『記』『紀』『萬葉』『古今』『源語』等の文學を出だし、年代に當る。先づ當時の詩文につきて、其の如何ばかり後世の詩文と異なるかを略説すべし。

第二章 ノオマン征服以前の文學

アングロサクソンの詩歌—其の律格—『ビオウツツ物語』—古代
詩歌の特質—基督教の傳來—アングロ、サクソン族と基督教—ケ
ドモン—『聖書のメトリカル、バラフレーズ』—ケドモン以後—同
トク散文—ビード—アルフレッド大王—アーン族の來寇—『サク
ソン、クロニクル』—アングロサクソン語と英吉利語

アングロ、サクソンの詩歌は、希臘羅馬の詩歌の如く、音の長短によりて調を整へたるものにあらず、また近代の詩歌の如く、脚韻の法によりて律格を定めたるものにもあらず。其の詩形に普通せる特質の主なるものは、一定の規律によりて語の頭に韻を置くとなり、之れを頭韻と呼びぬ、即ち、毎句を二分して、其の前半(上の句)の主なる語二箇の頭文字を同一にし、且つ其の後半(下の句)の最初の強音(昂音)の頭字をも同じ文字とする法なり。尙此の外に一種の句拍子の法とも思はるゝは、

昂音二度と低音二度とを句毎に設けて、聲調に抑揚あるとなり。而して件の律格(句拍子の法)に二種あり、一は長く、一は短し、其の長き者は物語歌に用ひ、其の短きは稍々氣高く尊げに見えんと作者が期望せる場合に用ひたり、たいし、大概は二者を混用せること多し。其の頃の寫本を見るに、當時の詩歌は、行を分かつたて散文のやうに書流したるが例なれども、概して句讀點を施して句の別目を明にせり。

ストップホオド、ブルック氏曰はく今の詩歌は一定の格によりて音の数を限り、且つ句脚に韻を踏むを通例とすれども、サクソンの古詩歌は然らず、其の詩歌たる所以は主に音の昂低と頭韻とを用ふるにあり。總べて長き句は句讀によりて二分し、上句、下句、おの／＼昂音二個を具ふ。低音の教には定限無し、而して上の句と下の句とを維ぐに頭韻の法を以てす。上の句の昂音二個と下の句の昂音一個とは、概して母音(概して異母音)を以てはトまるか、否らざれば、同ト子音を以てはトまるを例せり。例へば左の如し。(ケドモンが夢想せし詩章の一句、括弧の中なるは其の譯)。

Heofon to hrofe, (Heaven for roof.)
Halig Scipend, (Holy Creator.)

然れども、時としては、上の句に頭韻僅に一個のみなるこゝもあり、又、時としては、四個以上の昂音あることもあり、但し、いと長き句にても五個以上には及ばず。さてまた、莊嚴若しくは激越の情感を表せんが爲には別に一種の律格を用ふ、かゝる場合には昂音の

数を増加し、且つ一定の規律によりて其の間に低音を挿入せり。又、稀には脚韻をも用ひたる例あり。案するに、當時の律格は一二にのみ止まらざりしなり、只常に四昂音、三頭韻の法を以て根本の定格となせるのみと。

之れを要するに、當時の詩歌には後世の詩歌に於けるが如き嚴密なる律格はなかりしなり、こゝに原作を掲げて之れを證明せんも煩しければ省きつ。さて、當時の詩歌には古風なる語と語格との多かるべきはいふまでも無きとながら、間々用ひられたる、隱喩も、熟語も、異やうなり、例へば、矢の^{ワキアゲ}とを、戦^{ホエリス}とを、鯨路といひ、國王の^{マンカイ}とを、人間の^{ゴールド}、金^{フレンド}、友といへるなど、是れなり。其の他古詩歌にありがちな^{バラレックス}聯句並びに同じことを語を換へて繰返していふことなど、屢々あり『萬葉』の例又はヒアルの古歌などの例に同じ。然れども詞句は皆簡潔にして素樸なり、蓋し、形よりも意を重んじ、風姿よりも風情を主とせるなり、當時は何事もいと簡短なる言葉をもて言ひあらはせり。總じて、直喩はいと稀にして、隱喩風に打いでたるも尠し、さるは英國人の特性の然らしめし所なるべし。

此の古代の詩形、律格は、ノオマン族來襲して此の國を略せし後、おひ／＼に廢れたり。ノオマン人は佛蘭西人なれば、人と共に佛蘭西風の韻法、律格の此の國に渡來

せしが故なり。後に叙説するチョーシアの作の如きは、此等新原素の和熟せる形によりて作られたるものなり。但し、無脚韻の頭韻法も、ジョン王の朝(土御門帝の御宇頼家の頃)まで遺存し、加之、エドワード三世及びリチャード二世の頃に再興せられ、十六世紀元龜(天正)までは兩様の韻法併用せられたりきといふ。近代の詩歌にも頭韻法間々利用せられたれど、そは古代のとは頗る趣を異にしたるものなり。いま尙ほ傳はれる最も古き詩歌の一作は、『ビオウルフ』と題したる物語、歌なり。こは三千百八十三行より成れる長篇にして、或は一人の作といひ、或は數代に亘りて成りしものといふ。上下二篇に分れたり。其の概要左の如し。

ビオウルフは彼の北蠻の神人オーデンの血統をひきたる皇族にして、日耳曼地方の未だ封建の形をなさざりし頃の英雄なり。其の頃、デン國にグレンデルといふ怪物あり、あやしき湖澤の中に棲み、夜毎に王宮に來りて眠れる武士をさり食らふこと十二年に及べり。これが爲に此の國の勇士大方盡き果てなん有様なりと聞きて、ビオウルフは、デン王(Hrothgar)とは同族の縁もありければ、赴き救はんとて、十五人の同志と共に、船を提げて北海に乗り出でけるに、時しも酷寒の極月にして、風浪こまに甚しく松はみるく、浪に卷かれて覆り、水中の妖怪變化は群り來りて、ビオウルフを海底に引き入れ、帆綱をもて固くこれを縛めけり。然れども、ビオウルフは勇を奮ひて、縛を断ち、水底の

陰鬼と闘うて九個までもうち僵し、遂に圍みを破りて、デン國に到着す。かくてビオウルフは王に面會して、直ちに妖怪退治の命を受け死を決して、單身にして、衛所の中にうち眠りぬ。さる程にいつもの時刻となりて、彼の沼澤の方角より、驟々たる狹霧一面に被ひ來りて、稀代の變化グレンデル、暗中より宮門を蹴破りて押し入ると見るまに、一人の衛士を捕へて、寸々に食ひ裂き、血を吸り、やがて其の手もて、ビオウルフの肩をつかみぬ。ビオウルフ少しもおそれず變化を捉へて、蹴倒す。グレンデル大にたけりて、躍りかゝる。此の奮闘王宮を撼かし、しばしばは勝敗なかりしが、妖怪竟に敵し得ず、腕と臂とを折られて湖澤の窟へにげゆく。この窟にはグレンデルが母なる怪物あり、次の夜王宮を襲うて王の近親をとり食らふ。ビオウルフ再びこれを退治せんきて、翌日窟に探り入る。こゝは沼底の洞穴にして、水流これに穿入するが故に、暗澹たる泥波一面に記溢して毒氣當るべからず、夜に入れば濁浪の上に妖光あり、惡龍、毒蛇のこの中に旁午たるを見る。ビオウルフは四人の従者と共に此の窟窟に突きて入り、考女怪を襲ひ、苦闘の後、竟にこれを斃し、グレンデルをも併せ屠りて首を王宮に携へ歸る。

これを第一卷となす。第二卷もまたほゞ同様の冒險譚なり。かくてビオウルフはこの國の王となりて政を執ること五十年に及びしが、こゝに北方の山中に不思議の火龍あり。性貪婪にして飽くことを知らず、時々、良民を襲ひ、金銀珠寶を奪ひ歸りてこれを洞穴に貯ふ。然るにビオウルフの近臣某、火龍の不在に乗じて其の金庫を奪ひ歸りしかば、火龍大に怒りて王の城下を襲ひ、人を焼き、人家を焼く、其の

禍洵るべからず。ビオウルフ乃ち七十歳の老牀ながら之れを退治せんを欲し、鋼鐵の楯を作らしめ一隊の兵を率ゐて荒野を巡狩す。然るに火龍は深く草中に埋伏し突然現はれて王を襲ひ、王主従を焼く。従卒皆王をすてゝのがれ、王は重傷を負ひて危かりしが、其の臣にウイグラーフ Wiglaf といふ者一人ふみ止まりて王に力を添へ、焔々たる火氣と毒煙を冒して遂に火龍を切斷す。されどもビオウルフの火傷は遂に癒えず、毒煙心を焼きて惡血湧くが如し。扶けられて石上に臥しながら、自ら萬人に代りて斯の如き死は遂ぐるは本懐なりと述べ、「我れはこれより古英雄の後を追ふてオーデンの朝廷に列すべし。汝ウイグラーフ我が志を嗣ぎて生民に竭せ。」と遺言して瞑目す、云々。

按ふに、この物語歌はサクソン族が英島を攻略せし以前、即ち第五世紀の間に成りしものならんか。或は第八世紀ごろの作ともいふ。其の筆に録せられて讀みものとなりしは彼等が英島に移りて後のことならめど、瑞典、丁抹などにては復かに其の前よりも唱傳せられたりきといふ。或は編中に謂ふグレンデルの窟は今の英國のヨオクシヤの海岸なりとなすものあり、いかにや。

『ビオウルフ』の作者は詳ならず。フルツ氏は其の叙事の文體の一致せること、結構の首尾照應して完結せることなどより推測して、必ずや一人の作ならんと斷じたり。要するに、件の歌の價値はサクソン族が太古の習俗を瞥見するに足るところ

にあり、例へば我が『古事記』の我が神代の風俗を窺ふの料となるが如し。叙事のうち詩的思想も乏しからず。就中、グレンデルが巢窟を叙せる筆は精妙の名あり、又其の結末、ビオウルフが最期の一節の如きは、サクサン思想の醇乎たるもの見えて悲涼なり。總じて、其の辭意の卒直と樸茂と明晰とは頗るホーマアにも似たりといふべし。もとより詩歌として『イヤッド』の雄大渾成なるには及ばざれど、當年のアングロサクソン族が林間篝火の周邊に強烈なる酒を暖めて一日の武功を語りあへりし時、蠻樂の聲と相俟ちて此の物語を聽きたらん感慨は、平家琵琶に數行の涙を催し、我が戰國時代の勇士のに過ぐるものありしならん。

『ビオウルフ物語』の他に『フィンスベルグの合戦』と題せる物語歌あり。丁抹人^{デンマール}が其の敵に圍まれて奮闘血戦せし時の物語を歌へるものなり。

總じてサクソンの古詩歌には尙武の氣むしろ慘憺たる殺伐の意氣みちくたり。羅馬人嘗て彼等を評して海狼といひけるが、彼等の詩歌を讀めば、げに海狼の氣稟の躍々たるを見る。さるは其の本來の業が攻掠戰闘にありし故なり。後年、基督敎の此の國に入るに及びて、サクソン族の性習の上に多少の變化を生じ、甚しき殘

忍刻薄の氣風は減じたりしが、凛々たる尙武の精神は尙聊かも衰へざりき。例へば、當代の名家ケドモン若しくはキチウルフの作を見るに、其の主題としたる事柄の基督教の主旨に基けるにも係らずして、尙武勇猛の氣脈歴々たり。

アングロサクソン族は、英島に入りて百五十年間、全く文字を用ひざりき。長篇の物語とても、例の暗誦して後代に傳へしものにて、『ヒオウルフ物語』の如きも紀元九百年代に至りて始めて筆録せられたり、文字を以てアングロサクソン文學のものとせられしは基督教と共に羅馬字の渡來せし後にあり。こゝに少しく**基督教**の傳來に就いて述べんに、

アングロサクソン民族の始めて基督教に接せしは第七世紀の始めにして、羅馬法王の使節の渡來せし時にあり。而してアングロサクソン族は久しからずして其の固有の宗教を棄て、基督教に歸依したり。これを基督教の諸史に見るに、傳教のかばかり容易にして迅速なりしは多く其の比を見ず。按ずるに、アングロサクソン人は、夙に目に見えぬ神靈に對して敬意を傾けたりし種族にして、其の宗教上の感想は稍々猶太人に類せる所あり、是れ其の容易く基督教の主旨を會得するを

得し所以ならんか。加ふるに、當時はアングロサクソンの社會組織の漸く成らんとせる時代に、もはや人生を舊時の如く戰闘視する能はざりし事情もあり、隨うて、未來の靜安を傳ふるを主とする基督教の福音は、恰も渴者に於ける水の如くに、時の民心に應合せしや疑ふべからず。由來彼等が信仰の動機は、専ら未來の圓滿快樂を目的とする彼の南歐民族の信仰とは同むからず、むしろ信仰に頼り絶りて現世の淺ましき火宅を逃れ出でんとせし趣あり。されば彼等の基督教に接せしや、雲漠々たる修羅の巷より天日昭々たる安養淨土を望む感ありしならん。彼等は昭々たる天日に對して只管に崇敬嘆美し、羅馬教の甚しく繁縟なる教儀をすらも尊奉し、朴訥なる歌調をもて專念基督教の徳を稱しき。彼等が讚美歌は、到底南歐諸國の讚美歌の如く典麗なるを得ず、而も宣教儘かに二三十年にしてグンテ、ミルトン等のと同様なる大題目を歌へる詩人出でしは、豈頗る驚くべきにあらずや。以下、當時の詩人ケドモンに因りて當時の詩歌を略説せん。

傳によれば、ケドモンは紀元六百年代(本朝藤原鎌足と同代)の人なり、始めは在家の僧なりしが、一夜夢に神人にあうて、眠りながら天帝及び世界の開闢に關する詩

題を感得し、加之夢の中に其の緒數句を作りて歌ひき。醒めて後も明に其の句を記憶したりければ、深く感じ、人の勸にしたがひて、出家し、夢中感得の歌を完成しき、是れ有名なる『聖書』の律語解スクリプチュア・メトリカル・バウフレズ即ち舊約全書と新約全書とを材料にして長篇の物語歌となせるものなり。

有名なる夢想の句は左の如し

「いでや、吾れ天國の主造化主造化の御力と、其の御心と、光榮ある父の御いさをを讃せん。とこしへに命ある御神が、此の靈嘆にたへたる世界を創めたまひし状はいかに。あやに長き造化の御神は、人の子等の屋根にとて先づ蒼天を造りたまひ、こしへに命ある神、上もなき大君にやびてまた人の子の爲めに大地を定め給ひき。」

ケドモンは、舊約書の『創世記』より、天地の開闢と人類の創造の事とを取り來りてこれを歌ひ、さて、イズラエル人の事蹟、聖靈出現の事、使徒の教誡の語、最終審判の事、地獄の苛責、大國の幸福と、つぎ／＼に且つ叙し、且つ詠じて其の長篇を畢へたり。辭章はすこぶる雄勁にして情思率直、想像富贖、兎も角も、古代文學の珍什たり。さればヂスレーリはケドモンを稱して、我が祖先時代のミルトンといへり。或は謂ふ、ヂモン、ミルトンが『失樂園』の詩は此の『律語解』に負ふ所ありきと、さはれそはたゞ臆

測の説たるのみ。この書謄寫のまゝにて大に一世にもてはやされしが始めて印刷に附せられしは、此の時よりも一千年の後なり。英國にて書籍印刷の始は

ケドモン以後となりては基督教いよく廣く行はるゝやうになりしかば、宗教の旨を歌ふもの大に増加し、前に擧げたるキチウルフ(一千八百八年歿)の如きも此の種の詩歌に盛名あり。但し、その頃に至りても、軍歌、俗歌、はた相并びて行はれたりき。

現にアルフレッド大王の御宇には、『マルドン役の歌』作者不詳を以てはじめとして二三の長篇の軍歌あり、其の以前にも尙あまたありしならんが、其の頃はすべて口傳へに歌ひ傳へしのみなれば、後世には傳はらざりしなり。學問の十分に開けざる世のならひとて、筆把りて物かき得る者は寺院の僧侶ばかりなるに、僧侶は其の職柄よりいふも、軍歌を好まざるは勿論のことなるべし。

古代英文の最も古きものを求むれば、エドモンド、バアクが英國の學問の祖と稱したるヒードの著作を推さざるべからず、固よりヒード以前にも幾多の散文のありしことは明なれど、苟も文章と稱するに足るべきものはヒードの作れるを嚆矢とすべし。

ビードは又ヒータとも稱す、紀元後六百七十三年メルハムといふ處に生まれ、七歳にてセント、ピータアの聖院に入り、十歳の時セント、ボールの聖院に移り、身を終るまで勤行怠ることなく、博識の高僧として一世に知られたるなり。六百七十三年は恰も我が天武帝御即位の年に當たれり。ビードの著作、およそ四十五部、當時行はれたりし諸學藝、音樂、修辭、醫學、數學、星學、物理學等は、一として其の材料とならざりしものなし。ビードは、其のはじめ、専ら羅甸文をもて著作したりしが、晩年チン尊者が經典、約翰傳を翻譯するに及びて始めて此の國の國文をもてものしき。最古の英文をいふものは、皆此の翻譯文を英國々文の基礎となす。文章、簡明素朴にして温藉の情思に富む。羅甸文にてものしたる彼れが傑作は「英國國民之宗教史」なり。同七百三十五年にみまかりき、我が舍人親王と同年。

ビードがみまかりし頃には、其の生國なるノオサムブリヤ州は、西歐文學の本地となりて、羅甸文をよくするもの輩出せりき。加ふるに、該地には寺院毎に書舎の設ありて、文庫なども處々にありき。ビードの門に遊びて學問を修めし彼のチャロー學林の學生ばかりにても、外國より來れる學生を除く、六百人に及び、中にもアル

キインの如きは、佛王シャレマンに聘せられて其の大なる帝國の教育を主幹し、ビードの著書は到る處の教科書となりて西歐學藝の光明と仰がるゝに至りき。然るに、紀元後第九世紀、我が仁明帝、文德帝の御宇のころに至りて、北方の強蠻デーン族來り寇し、屢々國內を侵掠す、こゝに於てか、學問の事一時全く地に墜ちしが、英主アルフレッド位に即くに及びて、數、デーン族と戦ひて竟に之れを外國に退け、又もや文藝學術の講習を再興す。ノオサムブリヤの文學は此の時ほは、や凋枯して舊日の榮觀無く、南方なるエッセックス州之れに代りて學問の本地となれりき。アルフレッド大王は紀元八百四十九年に生れ、同九百一年に崩す、我が菅原道真と同年代なり。文武兼備の君にて中興の明主として政事史の上に彰傳せられたるのみならず、文學の史上にも大功ありし人なり。王はデーン族の來寇を卻けて後、銳意、内國の教育に盡瘁し、みづから物せし良書も一二のみならず。歴史、修德等に關する譯述多き中に「Boethius on the Consolations of Philosophy」、"Gregory, on the Cure of Soul"、"Proverbs"等は其の重なるものにて、文章はいづれも森嚴にして質實なり。アルフレッドの文は、すべて當時の國文なりき、されば此の國に於ける散文學の發達

を促がし、功賞にヒードにも優りぬべし。王は處々に養舎を設立し、海外より博識の學者を招聘し、大に教育を奨励しき。史家、王を以て英國散文の祖とす、當を得たりといふべし。

アルフレット崩じて後、デーン族又襲來し、大に此の國を蹂躪す、これによりて學問藝術の花再び凋みて、第十世紀の中ごろ、村上天皇の御宇にエドガー平和王が國を治むるに至りしまでは、根幹共に、全く枯れ果てたるが如くなりき。王の御宇にウ、ンチエスタアの監督エサルワルドといふもの盛んに羅匈書の翻譯に従事し、學校擴張の策を講じければ、文學又蘇り、次いで名高きダンスタンといふ高位の僧が時の大臣となるに及びて、文學また漸く榮えたりき。されど當時の傑作といふは、エフリックが物せし聖書の翻譯なりしを見ても、學問の主まに、宗旨上しやうじじやうの翻譯の業に傾けりしを察するに足れり。されば後の史家、或は此の時代を翻譯の時代ともいへり。

以上畧説せるが如く、アングロ、サクソン時代に於ける著譯はくさくさなれど、其中最も重大なるものは『サクソン、クロニクル』なり。『サクソン、クロニクル』と

は『サクソン紀』の義なり。こはいと古き時代よりの事蹟を編年體の綴りかたにて紀元後一千五十四年まで、詳密に叙したるものなり。作者は一人にあらざ、年々歳々相繼ぎて記録しゆきて、竟に一大編となりしものなり。傳説によれば、紀元後八百九十一年までの記録はカンタアベリ院の大僧正、ブレクマンフといふが編輯に係るといふ、而してそれより後の分は、處々の寺院の僧が相承けてものせしなれば、文章といひ、記事の體裁といひ、いとさまざまなり。いは、今の新聞紙上の時評、時評等を合綴せるが如きものたるに近し。されど、其の記録の大方は、記者の目撃又は傳聞によれるなれば、歴史として、はまづ精確に近きものなり。サクソンの舊史を採るものは、必ず此の書を憑據とす、是れ其の世に名高く、且つ重視せらるゝ所以なり。全篇中、アルフレッドの自記に係る分は、最も卓越せりといふ。其の文章は、文脈、語格に於ては、近世の英文とさまでに大なる差ちがなければ、綴字の法、字形、發音等は、著く近代のと異なりたれば、到底、殊なる講習を経ざるものには、讀み得がたし。蓋し、今日の英吉利語は、純粹なるアングロ、サクソン語にケルト語、羅匈語、デンマルク語、佛蘭西語、希臘語等の加はりて成りたるものにして、近年、其の混合の量を調査

せるものに據るに、今日の標準語(學術語と地方語とを除く)中、アングロサクソン語は八分の五を占め、残る八分の三は他國語なりといふ。若し一國の言語に存する異分子の量は、やがて其の國民の血族の變化の量なりといふ説にして大過なからんか、アングロサクソンの血液は、今の英國國民の血液の、約八分の五を占むるものといふべし。

第三章 ノオマン征略以後の文學

ノオマン征略と國語及び國文學—外國語の跋扈—國文學再興の
端緒—宗旨歌—「オオミラム」—物語歌—「レヤモンス、ブラット」

紀元後一千〇六十六年(後冷泉帝の御宇、源賴義在世のころ)佛蘭西なるノルマンディーの公爵ウィルヤム大軍をひきゐて此の國に襲來し、サッセックス州なるヘスチンクスが原の一戦にて、時の國王ハロルドをほろぼし、やがて此の國の君となりぬ。之れを史にてはノオマン征略の變と稱す。當時ウィルヤムに従ひて渡來せし者の多數は、其の原名ノオスマン(Norman)といふ名稱にても知らるべきが如く、元は北方丁抹デノマン、諾威ノルウェー、瑞典スウェーデン等に居住したりし蠻民なりしが、紀元後九百五十年故あり

て佛蘭西に移り、ノルマンディーといふ地方に定住し、多年佛人と交はるうちにいつしか佛蘭西の風俗に化せられしものなり。されば當時のノオマン族の國語、文學、制度などは、殆ど佛蘭西の異なるところなく、尠くも、彼等の上流なるものは常に佛語、羅匈語を語り、加之、件の兩國語をもて、自在に文を作ることを得たりき。

夫のアングロサクソン族の、嘗て此の國(ブリテン)を攻畧せしや、元の文物は悉く彼等が爲に化せられて、殆ど原住民の印跡を留めざりき。アングロサクソンは實に英國をして豹變せしめきといひつべし。然るにデーン族とノオマン族とは其の此の國を攻畧せしことはサクソンに異なることなく、就中、ノオマン族の如きは、政治と文學との上に未曾有の變動を生ぜしに似たれど、其の感化の實際は、此れ彼れ大に異なるものあり。(デーン族の如きも一時はサクソン皇室を顛覆して全國に君臨せりき。有名なるカニート王はデーン朝の君なりき。)

案ずるに、後の二者は、其の皮相に於てこそ痛くサクソン族と相異なる所あるに似たれど、其の本來の性質に至りては、三者共にチュートン族の血統にて、其の祖を同じうし、大に相背く所無かりし也。すなはち、ノオマンとサクソンとは相化すべき

者といはんよりは、むしろ相和すべき質ありしなり。要するに、ノオマン征略の結果は、只外面に於て此の國を變化せしのみにとまり、内部を一變するには至らざりき。こは政事史の上にも著明なる事實なり。隨うて、文學の如きも、其の皮相のみを觀れば、第十一世紀、即ち、一千百五十年以後著大なる變遷を経しが如く見ゆれど、其の實は文脈、發音、綴字法等の變遷たるに過ぎず。此の期の末に出でしチーサアの作すらも、單に其の風調の外面に(即ち詞藻格調等の上)佛蘭西、伊太利の時尙を現じたりしのみ、其の根本の着想と觀念とはあくまでも依然たるアングロ、サクソンの特質なり。

固より、かくの如く鎮定したる結果に達せしまでには、サクソン風とノオマン風との間に、政治上にも、文學上にも、多年に亘る烈しき衝突あり、軋轢ありて、一時は外國の文學のかた勢力を逞うし、之れがために在來の國文は殆ど滅びんとせしとすらもありしが、政治上に於てサクソン原素の勝を制せしころほひ、文學上に於てもサクソンの原素凱歌を奏し、後の英文學の基礎固められき。

但し、こは二百年餘り後のことなり、ノオマン戰勝の當時に在りては、サクソンの文

學は一時悉く地に墮ちたり。サクソン語はもはや主治者の用ひざる語となりて到る處に、侮蔑せらるゝと、之れを用ふる庶民(サクソン人)の侮蔑せらるゝが如くにて、何人も之れを著作上の用に供せんとするものなく、すなはち、文章語としては、一時全く棄却せらるゝに至りき。第十一世紀の末より一千三百六十二年に至るまで(具にいへば、殆ど三百年間)は、ひとり佛蘭西語のみを教會、法廷、並びに政治上にては用ひたり。大學校の學生の如きは、日常の會話にさへ佛蘭西語若しくは羅甸語を用ひざるべからずと嚴命せられ、小學校の幼童すら、其の學ぶ所の羅甸語を譯するに佛蘭西語を用ひざるべからずと命ぜられて、從來の國語は全く變舎よりも退けられき。所詮一千〇六十六年^{征略の當年}より一千二百年に至るまでは、英人は或は其の自由を恢復せんと力むることに全力を傾け、或は默從して其の數奇を悲しむことに心を奪はれたりしかば、アングロ、サクソンの國文學は一時全く跡を絶てりき。

按ずるに、當時此の國に佛蘭西文物の跋扈せりし有様は、其の渡來の因縁こそ大に異なりたれど、我が朝に支那の文物の渡來せし當時の状態と稍く似たり。

ノオマン朝の公用文が、悉く羅甸語若しくはノオマン語によりてもせられしのみにあらず、公卿貴紳の用語と庶民(サクソン人)の用語とは其のはじめは外國語の如く異なり、稍々後に至りても、物の名の如きは、上下其の稱を異にせし程なれば、當時の所謂アングロ、ノオマン文學の如きは、質も形も純然たる佛蘭西の文學にして、第十三世紀のはじめまでは、史上に記すべき國文學の著譯殆ど無し。

ノオマン朝となりて、後新に盛になりたりし者は、宗旨の歌と物語の歌となり。兩者共に詩歌としての價值には乏しけれど、國文學再興の緒は蓋し此の時より開けしなり。

宗旨の歌は、ノオマン族が深く基督教を信奉せしに基きて起りたるなり。其のはじめ主治者たるノオマン族は、強ひてサクソンの文物を排斥し、佛蘭西の文學をして在來の國文學に代はらしめんと力めたりしにも係らず、被治者の大多數は依然としてサクソン人なりし爲に、教化上の自然の必要は、先づサクソン文學の蘇生を促し、更に翻譯文學の流行を招きぬ。一千二百十五年(大憲章の時代)に成りし僧オオム又の名オオミンが作「オオミラム」といふ宗旨の歌は、新式の聲律によりても、のしたるサクソン律語にて、こけ經文及び祈禱文を律語に翻

譯して作者の述懐を加へたるが如きものなり。オオムは、頭韻の法をも用ひずして、ひとり音の低昂のみを律格とせり。尙此の外にも翻譯せられたる書類夥多ありしが、サクソン國粹の復興煥發すると共に國文學の氣焰漸く盛になり、終には形式のみを外國に取ることもなりぬ。例へば、一千三百六十二年に成りし有名な「ビヤアス、ゼブローマンの夢」(ウィルヤム、ラングランドといふ僧の作)といふ物語歌の如きも、同じく宗旨上の寓意談なれど、其の精神と着眼とは、全くサクソンの特質より成れるものなり。サクソンの特質とは、庶人的文學主義なり、彼の佛蘭西、伊太利等の文學の主(若しくは専ら)朝廷及び摺紳のもてあそび艸にとてものせられたるとは、おなじからず。

物語の歌は、ノオマン摺紳の深く史談、小説を愛好せしに由來す。彼等は山獵、野獵の後に荒唐なる物語を聽くとを好みしなり。物語歌の泉源は、正史及び野乘にて、所謂物語歌の行はるゝに至りし前に、羅甸語をもてものせられたる夥多の史談ありき。志かれども、それは皆國文學に密接せざるものなれば、今爰に語るに及ばず。さるほどに、ヘンリ一世王の朝に至りて、此の史談のうちより所謂物語歌、生ま

れ出でたり例へばモン、マス、のチ、マ、フ、レ、と稱せられたる僧の戯に、正史、物語と題してものしたる英國古代史の如き是れなり。これは一千百四十七年のころにウールス地方の傳説を元として羅甸文もて綴りたるものなりしが、叙する所大かた荒唐無稽の甚しきものにて、殆ど小説にひとしかりしかば、當時の史家はいづれも史の名を濫用せられたりとて怒り罵りきといふ。然るに此の書痛く上流の人々にもてはやされ、ゲーマーといふもの、或貴婦人の爲に之れを佛蘭西の律語に翻譯せしが、其の翻譯いつしか佛蘭西に流行し、やがて彼處にて種々の修飾を被り、名題も變はり、外形も變はり、年經てノオマン詩人リチャルド、ワースといふもの、名作といふ名義にて、故國英吉利へ歸り來たりぬ。此の時、ウースタアシャヤ州に、レヤモンと別號せる僧ありしが、はじめて此の詩を英語に譯して「レヤモンのブラット」と命題しき。實に此の物語歌はノオマン征略以後はじめて世にいでし英詩とも稱すべし。蓋し、當時に謂ふ翻譯は最も自由放埒なる意譯なれば、翻譯といはば翻譯なれど、或は翻案といはんも差支なかるべし。現に此の「ブラット」の如きも、ワースのは、全篇一万五千行(句)より成れど、レヤモンのは三万二千五百行(句)より

成れり。レヤモンの律語は嚴格なる律格にしたがひたるものにはあらず、されど概して三昂音と六又は七音とを以て律とし、専ら頭韻を用ひたり、脚韻の如きは殆ど無し。且つ、此の長篇の律語中、佛蘭西語を挿用したる數、僅に五十に過ぎずといふ。

此の「ブラット」に叙したる事柄は、概して架空の談たる、勿論なり。按ふに、歐洲列國民の由來をトロイ國の滅亡に歸せんとするは、當時史家の間に行はれたる一種の流行なりしが、此の物語の如きもブリテン國の開祖ブラット(アルータス)をトロイの英傑イニヤスの曾孫なりと做し、其の本國トロイ城陷落の後、其の曾祖父イニヤスが落行きし處(伊太利)よりも一層西方へ船にて落ち行き、遂にブリテンの島に着し、こゝに新國を開きぬとなせり。譬へば、我が朝の戯作者が義經、爲朝の後談を作り設くると同じ趣なり。

件の翻譯の成りしは、一千二百五年なりと聞こえたれば、彼の政治上一大革命の緒となりし、大憲章准認の時代よりは、おほよそ十年ばかり以前の事なり、されば又、純粹の英語にてもものせられたるオルムが宗旨の歌に、先づとも十年あまり也。

此の二大篇の成りし時をもて英佛二文學調和の期とす。さすれば英の國文學は其の國憲と生誕の期を同じうせりともいふべく、又英佛兩素の融和せしは、政治上文學上、其の機會一なりきともいふべし。さりながら「英詩の曉星」と稱せらるゝデミフレイ、チロサアが出世以前には眞の國文學といふべきもの尙成立せざりきといふが、更に精確なる評也、何となれば當時の文學は總じて翻譯、翻譯案にあらざれば、佛、伊の諸作を摸倣したるものに外ならざればなり。

第四章 新國文學

エドワード三世の功業——ヤモン、ウィックリフ——宗教改革の端緒——新舊約全書の翻譯——國勢の進歩

以上叙説したるは英國新文學の端緒たるに過ぎず、此の國の二大要素たるサクソンとノオマンとが眞に融會混淆して相固着し、一團の英吉利民族となりしは、第十四世紀の間なり、隨うて眞に英國新文學の地盤を固め、十九世紀の今日に至るまでも英國文を修むるもの、爲に推重景仰せらるゝ價値を具へたる新國文學の開祖は、詩歌に於てはデミフレイ、チロサア、散文に於てはジョン、ウックリフなり。而し

て件の二名家は共に十四世紀以後にいでたり。

サクソン、ノオマン二要素を調和するに與りて力ありし事件、一二のみならざれども、其のやゝ近因とも見做すべきはエドワード二世の佛蘭西征討なるべし。此の役に於て、サクソン族とノオマン族とは、互に相敬重すべき所以を覺りき。例へば、サクソンの歩卒と射手とは、此の時初めて其のノオマン將校の老功と勇武とを知り、ノオマン將校もまた其のサクソン兵の不撓不屈なる勇氣を知りて、一致協同の重要を感じ、漸く互に相依らんとするの念を生じき。之れと同時に、社交、政治等の必要はノオマン族を驅りて自然にサクソンの情感、言語を用ひしむるに至りしかば、サクソン語次第に勢力を得、一千三百六十二年に至りては、政府新に令を發して、法廷、學校等の公なる場處に用ふる國語をすら、ノオマン語を廢してサクソン語たらしめき。加ふるに、一千三百八十年に及びては、下に語るジョン、ウックリフの翻譯せるサクソン語の聖書行はるゝに至り、ますくサクソン國文學興隆の運を促しぬ。其の以前、教會にて用ひられたりし聖書は、すべて羅甸文にて成れりしなり。

ジョン、ウィックリフは紀元一千三百二十四年(後醍醐の御宇)ヨークシャー州なる
チース河畔に生まれ、齡十六歳の時オックスフォードに入りて、修學多年の後、一千三百
七十二年同大學より神學博士の學位を得て、**英國宗教革新の曉星**たるの基
を立てき。當時宗教は、すべて羅馬法王の教會制度の下にありて、教法、教政、日を逐
うて繁縛に流れ、宗教の眞旨は求むるに由なき有様なりき。ウィックリフ憤慨措く
能はず、挺身して羅馬教會の積弊を指摘し、其の制度、教義を攻撃して、基督教革新の
必要を唱道し、信仰の自由を痛論せり。會、ランカスター公爵ガントのジョン、僧侶
の跋扈を怒るの餘り、之れを官より退けて官權と法權との別を立てんと欲す。公
爵の政界上の意見とウィックリフの宗教上の意見と期せずして相投ずる所あり、
よりてウィックリフは常にジョンの後援を得、ますます盛んに教政を攻撃しき。
され、當時は羅馬法王の威力の廣大無邊なりし時勢なれば、百事ウィックリフに
利あらずして、其の説容れられざるのみならず、其の命また屢、危かりき。彼れは事
の成るべからざるを悟りて退隱し、竟に**聖書の新譯**に着手しき。按ふに、**聖書**
の譯述は、前章にいへる『**律語解**』の他にも一二これなきにあらざりしかど、未だ翻譯

の跡をなさず、且ついづれも断片にして十分の用をなし難く、随つて普通國民は未
だ救世の眞福音に親炙せざりきといふも可なり。於是、ウィックリフは、先づ聖書の
全部を翻譯して普く國內に頒布し、以て自由信仰の實効を收めんと欲したりき。
蓋し、獨力にして新舊約の全部を譯了するが如きは、當時に在りては頗る艱難なる
一大事業なりき。されどウィックリフの熱誠と精勵とは、多くの助筆をだに借るこ
とももなく、一千三百八十三年(我が朝後龜山天皇の御宇、『**新葉集**』の選定後二年)遂
に其の業を完成しき。ウィックリフが永眠せしは齡六十一の時にして、其の在世時
は我が吉田兼好、源親房等と同年代に當る。
ウィックリフが企圖せし宗教改革の精神は、後年マルチン、ルッテルの獨逸に出づる
に至りしまでは其の成就の日を見ざりきと雖も、彼れが翻譯せし兩經は直ちに全
國に流通して、上下貴賤争ひ讀みき、是れ譯者が圖らずも其の國文學の興隆に裨益
貢獻せし所以なり。

彼れがものせし著述は、右の翻譯の外は概して皆羅甸文なり、就中、『**Triologus**』と題し
たる書、最も名あり。眞理、知慧、及び虚偽を人に擲して説を吐かしめたる問答録に

して、最もよく其の持説を表はせり。總じてウイクリフが文辭は遒勁を欲する餘り硬厲に流れたる嫌はあれど、概して明瞭にして遠意の文たるを失はず。聖書の譯文中には名文と稱すべきもの少からず、其のうち馬可傳第一章の譯文の如きは、永く後世に傳唱せられて後の改譯の模範となりき。

ウイクリフが國文學上の他の功勞は國語を加殖せし點にあり、即ち羅馬語、羅甸語等を取りて之れを英語に鑄造し、國語の不足を補ひしこと、是れなり。シェイクスピアの使用せし語のうちウイクリフが鑄造になりし語尠ならずといふ。ウイクリフが新國文學の再興と弘布とに與りて力ありしこと大なりと稱すべし。

さて此の時に當りて、英國の威武西歐に冠たり、時の國王エドワード三世は、方に佛蘭西と戦ひ勝ちて、其の國王ヂモンを虜にし、又北のかた蘇格蘭を征して、其の王デビット、ブルースをも生擒し、之れを國都ロンドンに拘致し、加之、勢威日輪の如き羅馬法皇に抗論して貢を拒み、嚴然として四海を睥睨せり。こゝに於てや、上の行ふところ下之れに倣ひ、國內到る處に、**新しき英氣、新しき思想、鬱勃として磅礴し**、恰も之れを表白するをつかさどるべき新詩人の世に出でんことを待てるもの

ゝ如くなりき。此の機運に乗じて現れしものを、英國の詩祖、**デニフレイ、チーサー**となす。

第五章 **デニフレイ、チーサー**

經歷—特質—律格—其の傑作—「カンタベリー物語」—「マフモン、

アーサイト物語」—其の他の譯の梗概

デニフレイ、チーサーは、英軍が佛蘭西なるクレシの平原にて佛軍と戦ひて名高き大勝利を得たりし前六年、即ち一千三百四十年にロンドンに生まれき、といひ傳ふ。其の精確周密なる經歷は、之れを知るに由なけれど、按ずるに、其の父はロンドンなる葡萄酒製造商**ヂモン、チーサー**といふものなりしならん。史家の推定によれば、**チーサー**はケムブリッジ、オックスフォード等の諸大學に歴遊せしものゝ如し、又はじめは狀師たらんの念ありて法學中院の一員たりしともありしが如し。一千三百五十九年、齡十九歳のとき、エドワード三世の外征の役に從ひて佛蘭西に赴き、レチエーの攻圍の際、敵の爲に虜とせられしが、一千三百六十年、兩國の和議成るに及びて、本國に歸るを得たり。さて、二十七歳の時所謂**グレート、扈從**に擧げられ

Petrarch
Pacient grumble

終身二十マートの扶持を賜はり、又時の權家ランカスター公ガントのチンに優遇せられ、其の後、皇后の宮に仕へたりし官女フィリップといふを娶りき。此の女の同胞カサリンといふはランカスター公が後妻なりしかば、チーサーは此の内縁によりていよく、公が扶助を得たり。さて齡三十歳のとき外交官に任ぜられ、其れより十年間は七たび以上こゝかしこへ公使として派遣せられき。此の官遊の間に、伊太利の諸市を遍歴し、有名なるベトラルクの伊太利に會ひて、そが作中の傑作と稱せらるゝ『ベーショント、グリゼルダ』カンタアペリ物語中の一編の原話を聴きぬ、といふ傳説あり、まかれども其の實はホカチオの『十日物語』若しくはベトラルクのホカチオを羅旬文に翻譯したるものがチーサーの種本なるべしといふ。さて又、一千三百七十四年にはロンドンの港に於ける羊毛、獸皮、柔革及び葡萄酒の關稅調査の官に任ぜられ、自ら帳簿に記入するをつかさどれりしが、エドワード三世王崩じてリチャード二世位に即くに及びて王の侍士の一員となりぬ。後再び、小關稅の調査官に任ぜられて、前の羊毛葡萄酒の調査官をも兼ねたりしが、此たびは代役を使ふことを許されければ、十分の餘暇を得て、此の時其の傑作『カンタアペリ物語』の粗稿(?)

を作りきといふ。一千三百八十六年、選ばれてケント州の代議士となりて國會に出づ、其のころは代議士といはで某州の士爵と呼びにき。此の歳は實にチーサーが其の青雲の頂點に達して盛えたりし時なり。當時は、ガントのチン公爵より給せられたる一年十磅終身の扶持の外に、尙種々の扶持及び俸給あり、加ふるに、特に皇室より賜はれる諸種の恩給ありしかば、其の家頗る富み榮えたりき。一千三百八十七年或は此の謂ふは一千三百九十年と此のあたりに異説ありに彼れはウッドストックの里に退き、こゝにて『カンタアペリ物語』の著作に着手し、閑日月を樂しまんとせし間もなく、不慮の變動チーサーが身上に起こり來たりぬ。其のころ國王リチャードは尙いとけなく、チーサーが無二の保護者、ガントのチン公爵は權力衰へて國外にありしかば、政權は悉く時の攝政クロースター公爵の掌裡にありき、しかるに、此のクロースター公爵はチーサーと不和なりしかば、從來チーサーがつかさどれりし官は突然に免ぜられて、收入俄に減少せしに、其の同じ年にチーサーが妻みまかりぬ。或は謂ふ、此の際國事犯の嫌疑を受けてロンドンの獄に投ぜられきと。いづれにもせよ、是れ彼れが最不幸の期なりき。さりながら、後幾ばくもなくてリチャード王が政を親らするに至

りてチーサー又殊遇を蒙り、一千三百九十四年には一年二十磅の終身扶持を賜ひ、同じ九十九年には嗣王ヘンリ四世より之れを倍にすといふ恩命を得たりき。一千四百年十月廿五日ウェストミンスターアの家にて死す、齡六十歳(後小松帝御宇、金閣寺落成後三年)。

チーサーは英國文學の紫式部とも稱すべし。彼れが傑作『カンターベリー物語』の長篇は、其の古文の軌範たると同時に、萬古不易の價值を有して、後人に推重せらるゝところ、其の質の甚しく我が『源語』と異なるにも拘らず、又彼れは律語に成り、此れは散文に成れるにも係らず、將作者の性の相同じからざるにも關らず、其の國文に於ける地位は、二者頗る相似たり。按ふに、世に謂ふ四大英詩人のうち、所謂客觀詩の作家としてシェイクスピアに次ぐものはチーサーなるべし。

チーサーは十四世紀中の何人よりも、最も廣く、又最も雜駁に、人世を経験せし者なるべし。彼れは狀師たり、武人たり、廷臣たり、外交官たり、國會議員たり、實務家たり、又詩人たりき。此等の諸點に於ては、其の境遇、或はスペインサーに比すべく、或はミルトンに比すべく、或はシェイクスピアに比すべし。かゝる豊富なる經見と事業と

は彼れをして上は王侯の尊きより、下は最下等の勞力者の賤しきに至るまでの、諸階級の諸種の人々に親接することを得しめ、監督長、監督等の風采、性癖をも、法廷の吏員若しくは市井の賤民が諸の特質にも通ぜしめき。而して、此等泰平、戰亂、教會、武事、政事、社交、國內、國外、富貴、貧賤、榮達、落魄の諸種の境遇に於ける其が實驗は、凡て溶解せる黄金白金の流と化して、其の傑作『カンターベリー物語』に注入せられたり。彼れは人生の快活、晴朗なる方面も、幽鬱、暗澹たる方面も、双つながら備さに觀破して公平周到に描きたり。其の觀察の跛險ならずして、普遍圓滿なるところ、頗るシェイクスピアの無私公平なるに似たり。就中、その從容、優美、溫厚、端雅なるところ、古今能く及ぶもの鮮し。只彼のシェイクスピアは、且つ廣く、且つ遠きに、チーサーはひとり其の前者を繼にして後者を自在にする能はざりしのみ。此の略史に於て、此の大なる詩人の明細なる月旦を試むべき餘地なければ、爰には一二の批評家の言を引抄して讀者の參照に供し、且つ其の文致の大要を評し、やがて彼れが諸著の談に移るべし。

ハズリットはチーサーを評して曰はく、チーサーは諸大詩人中、最も實際の事に長じ

たる者なりき。最も實務に老い、世故に通じたる者なりき。そが詩を讀めば正史を讀む心地すと。米國の詩人ローエルもまた曰はく

「チーサーは猶陽春のごとし、新鮮しき氣と背々としたる句とが其の全篇に漲れり。彼れの觸るゝや物皆忽焉として満開の花さなる。彼れの悅樂と飄諧と悲哀とは、譬へば一の噴水泉の如く、抑へとむべからざるの概あり。チーサーが作を讀むは、旭のまだ上らざるに、露深き千艸を分けて行くらん如し、物皆新しく、艶々しく、かぐはし。彼れが第一の長所は、美術の最も重なる誠實なり、彼れは強ちに旨意の深からんをば寫し、ださんと力めされど、本來明瞭なる旨意、其の心にあるがゆゑに、寫しださるゝ所の物皆おのづから明瞭なる象を具ふ。彼れは最も虛式を脱したる公明質直の詩人なり。

と。按ふに、チーサーの文致は善く其の想念と符合せるなり。其の文致は質樸平易なり、すなはち其の特質は誠實なり。チーサーは一事一物を寫さん爲に強ひて詞句を作らんと力めたる跡なし。否、さながらに直ちに狀寫す。其の辭は皆最も單純なるものなり、而して其の狀寫の精緻にして其の細微の眞實をすら誤らざる、殆ど寫眞術其物にも似たり。其の文藻諛諧に宜しく、又感慨によろしく、其の律調もまたいと妙なり。加ふるに、彼れは當代に於ける最も廣大なる語林を領したり、思ふに、其の豊富なる詞藻は、一は内外の書籍に起源し、一は其の現生活の經驗に由來

せるなり。さて、チーサーが最も多く用ひたる律格は五歩の有脚韻、低昂格にして、作詩法に謂ふ、アイヤムビツ、ペンタメーター昂起五步格なり。

昂起五步格又五歩の低昂格といへるは、低音と昂音との一聯を以て一組となすこと、猶ほ平聲と仄聲とを以て一組となすごとくして、之れを五組作りて一句とする格なり。されば一句のうち、昂音五つと低音五つとあるを定格とすれど、低音は増加するも妨なきものとす。我が國歌にア行の聲の字餘を許すと同理なり。其の詳細は作詩法の大要を説かざれば解しがたかるべければ、今説明するに由なれど、大體をいへば

低昂一低昂一低昂一低昂

とやうに十音相連りて一句をなすを低昂五步格といふ。支那の詩の平平仄仄仄平平を以て平起格の正式の起句とするがごとし。英語にては此の格を句毎に用ふるを通例とす。さて、脚韻ある時は之れを英雄律格ヒロイック、メトリックともいへるは、勇ましき物語歌に屢々用ひられたるに由る、二つにはさるたぐひの詩に用ひて宜しきが故なり。又脚韻無き時は、アン、メトリック没韻律格といふ。

此の律格はほゞ我が五七又は七五調に相當し、最も多く彼の國の詩人に用ひられたる格なれど、古來チーサーは此の格を自在に用ひたるはなかるべし。同く五七又は七五の調にても、用ふる人の技倆次第にて、千句一律の單調さもあり、波瀾多き句拍子ともなる如く、所詮は用ひたの巧拙にて調の妙を現するなり。

チーサーが壯年の諸作は主に羅甸并次に佛蘭西の諸名作の翻譯たるに過ぎず。こはチーサー又は英國の詩人に限りたることにあらず、總て此のころには創作といふといと稀にて、佛、伊、英等の作家等は常に互に其の思想と文章とを相貸借したりき。チーサーの如きもはじめは佛蘭西の物語を祖として著譯し、中頃、伊太利に官遊して、多く彼の地の名著(就中、ボカチオの作)を讀むに及びて深く其の旨の微妙なるに感じ、驟然伊太利風の詩人となりしが、千三百八十四年以後に至りては、また大に悟る所ありてにや、斷然伊太利風の詩歌をも抛擲して、純粹の英國詩人となりぬ。これ即ち其の傑作『カンタアベリ物語』の成りし時なり。此の作の梗概は下に説くべきが、まづ第二等以下の作のあらましをいへば、長篇のものうち、八篇は純粹なる外國の傳奇歌を翻譯又は翻譯案せるものにて、三篇は伊太利風の物語歌を模範として作りたるものなり。所謂八篇とは『薔薇花物語』、『戀の廳』、『禽の議會』、『呼子鳥』、『ナイチンゲール』、『花と葉』、『チーサーの夢』、『公爵夫人の書』、『譽の館』をいひ、三篇とは『善女物語』、『トロイラスとクレシイド』、『アチライダとアーサイト』をいふ。皆物語歌なり。但し、最近の精査は、此の八篇のうち『戀の廳』、『呼子鳥』、『花と葉』、『チー

サーの夢』等は後人の作に係り、之れをチーサーの作とせるは謬傳に外ならぬことを發見せり。總じて、このころは、**寓意の物語**いたく行はれたり。全體を作者又は人物の夢に取做したる、曲亭前後の作にありがちなる夢物語の趣向と同一なり。憎怨、貪吝、悲哀、貧窮、懶惰などいふ特質も、各々或表章を得て篇中に活動せり。例へば、『薔薇花物語』の如きはもと佛蘭西に行はれたりし比喩の物語歌なるが其の主人公が夢のうちを得んと力むる魔力をもてる薔薇花は、正しく情人に比したるにて、花園は即ち世間なり。『禽の議會』、『花と葉』、『譽の館』なども、多少相似たる筋立なり。例へば、『花と葉』にては、花は色々のものに擬せられたれど、概していへば、假美、又は浮きたる快樂を代表し、葉は眞實の美、即ち淑徳及び精勵になぞらへたり、とおぼし。爰には、此等物語歌のあらましの筋をだに擧ぐる能はず。

チーサーの最大傑作は『カンタアベリ物語』なり。此の作は十四世紀に於ける英吉利の國民的敘事詩とも稱すべき者にて、其の意匠の根柢は伊太利の詩人ボカチオが『十日物語』に胚胎したると明なれど、其の精神は大に異なれり。『十日物語』は伊太利のフロレンスに悪疫の流行しける時、それを市外に避けたる七人の宮女と

三人の紳士とが徒然を慰めんとて、かたみ代りに物したるを集めたるやうに取做したる趣向なれど、チヨースアののは、英京ロンドンよりカンタアベリの聖院に賽詣せんとする都合三十五人の香客が、旅途の無聊を慰めんとて馬上にて物語りたる面白き小話を集めたるやうに作り做せり。さて此等の物語は一つ／＼に引離して見るも、江島屋、八文字屋、又は西鶴、又は『宇治拾遺』などの最も面白き小話を讀むが如き興趣あるのみにあらず、其の物語る人物の人品と物語の筋とがいとよく調和して、さながら個々の特質ある人々の直話を聞くらんやうの趣あれば、旨味ひとしほに深し。加ふるに、旅行の途次に種々の出来事あり、且つまた香客が種々の物語に就きての種々の批評さへ巧に綴りあはせられたれば、一種の複雑なる旅行記としても見どころあり。

此の作の發端の巻を『プロ、ック』といふ。プロ、ックとは序の巻の義なり。巻のはじめに春景色の簡淨靈活なる叙狀あり、さて、作者が其のころの習慣にしたがひてカンタアベリなるトマス、ア、ベケット尊者の廟に賽詣せんとて英京ロンドンの一區サウスワークなるタバードといふ旅館に投宿したるに、其の夜そこに同じ目的

にて投宿したるもの殆ど二十九人あるよしを叙し、微細に其の身分、風采、特質、服装等を狀說せり。其の中には士爵の武士あり、侍士あり、從卒あり、僧あり、尼あり、商賈、學者、法官、豪農、小農、水夫、諸種の職工、醫師等あり、彼等相會して晚餐を喫しけるとき、人々道路の物騒なる由を語りあひ、そを安全ならしめんには、皆一團となりて旅行するに如かじと相談一決したる折、此の家の主人のベリーといふが、出で來たりて拙者も客人達の道案内かた／＼同伴すべし、といひ、且つ長途の徒然をまぎらさん爲に、人々をの／＼馬上ながらおのが見聞したる奇話、珍説を二種づゝ語らんはよからずやと發案す。人々此の議に賛同し圖を以て話説者の先後を定む。

Anon to drawen every wight bigan,

And shortly for to tellen, as it was,

Were it by aventure, or sort or cas,

The sothe is this, the cut hi to the knight,

Of which full blythe and gled was every wight.

* * * * *

The myde! 'sin I shall bigone the game,
 What, welcome be th' cut, a Goddess name,
 Now let us ryde, and herkeneth what I seye,
 And with that word we riden forth our weye;
 And ha bigon with right a mery chere,
 His tale anon and seyed in this manere.

やがておのがト、鬮を引きはしめけるが、奇運か偶中か知らず、鬮はつひに士爵にあたりぬ、わたりければ人々皆浮きたちてよるこびぬ……彼れ(士爵)いへらく「あはれ神明も照覽あれ、我れは此の當たり鬮を甘んじて受けて、いでやまづ遊戯の緒を發くべければ、人々は馬を進めながら我がいふ所を聽きたまへ」。

その言葉の下より一同馬を進むれば、彼れはやがていとたのしげに物語をはしめ、下の如くにぞ語りける。

後の方の句は實に序の、卷第八百六十行目の句にて、本編の緒なり。(文字の綴りかたの如何ばかり近世の英語のと異なるかは、こゝに擧げたる一節によりても察せらるべし)。士爵の語れる『バラモン、アーサイト物語』の梗概は左の如し。

程經し昔、希臘シニアスの都にバラモン、アーサイトと呼ぶ二人の勇士ありしが、アセンスの英主シシニス大王が希臘の諸邦を討ち靡けし時、件の二勇士は手痛く防戦して遂

に大王の虜となり雅典の王宮に送られて、幽囚の身となりぬ。此のシシニス大王の後にヒッポリタといふあり、又其の妹にエミリスといふありしが、此の媛の姿の美はしきこと、譬へば五月の朝に咲きいでたる白百合の如くにて、清く優しく麗はしきことまた世にあるべうも思はれず。或朝、媛は後園の露を踏みて五月の神に祈念を行ひ、やがて讃歌を唱へけるに、其の聲ながら天上の鳥の如く、木々の樹枝を渡りて、つひに彼方の囚獄の中にきこえき。二人の勇士、そのるにも立ち上りて、鐵窓より透し見るに、頭には華蔓を戴きて、新装の姿雅かに、蓮歩を邁す媛が風情、春花秋月を望むが如き心地して、猛き武士が心も、媛を戀ふる爲、物狂ほしくなりて「我れこそは媛を得ぬ」、「否、我れこそ」と多年の交りをも忘れて、直ちに一場の争を起しぬ。つひに決闘せんとして、腰間に手をかくれれば、素より身には寸鐵もなし、心づきて淺ましき幽囚の身をかこち、争ひは止めしが、及ばぬ戀の念はなかくにきえやらず。さる程にシシニス大王の親交の友某といふはアーサイトとも親しき間なりき、されば、王にとりなしてアーサイトが幽囚は免されてけり。かくてアーサイトは再び雅典の地を履まると誓うて、縦たれば、バラモンは痛くアーサイトが自由の身を羨みけるが、アーサイトはなかくに再び媛にあはん由なしとて、殘されしバラモンを羨みけり。

さて、アーサイトはアセンスを去り、快々として二年を経けるが、或る夜の夢に、年來信仰のマーズ尊神、アーサイトが枕上に現はれて「媛戀しくば姿を變へ、ひそかに王宮に仕へて時を待て」とありければ、アーサイト大に悦び、やがて扮装を改め方便を求めてシシニス

スの延に宮奴みやつことなりて入込みしが、器量あれば次第に果進して、やがて至が第一の龍臣
 ともなりのぼりぬ。
 かくて、五年を経るまゝに、折々媛を仄ほ見るのみにて尙如何ともせんすべなし。思ひは
 同どうくきバラモンは、長き苦しみに堪へかれてや、遂に獄舎を破りて出奔し、ある林の中に
 身を潜めつゝ、夜に入るを待ちて、一たびシーアスに歸らんと企てたり。其の日恰もア
 ーサイトは節會に用ふべき花魁の料を得んとて、件の林にわけ入り、忍冬、山楂子などを
 折取りながらに五月ごごの讃歌高らかにうちすせしが、憶ひ起すは七年前のなつ朝、媛が
 後園の清容、清歌、それを憶ひこれを思ひて感慨に堪へず、天を仰いで長歌せり。バラモ
 ン其の聲をきゝつけて樹間より跳り出で、おのれ不實の腰拔武士と劔を舞はして斬り
 かゝりければ、止むを得ず、抜き合はせて斬り結びしが、勝負つかざりければ、次の日の同
 時刻を約して立ち別れ、さて翌日再び會うて決戦酣なりし時、大王シシニスシシニスは后ヒツボ
 リタ、及びエミリ媛、其の他近侍あまたを率ゐて遊獵の途次こゝに來かゝり、これを見る
 や、馬を馳せて割りて入り、しばしと留めて仔細を訊す。バラモンは思慮の遠なく、一伍
 一什を語り、后妹エミリ媛を争ひての決闘と告ぐるや、大王大に怒り、即坐に二人を誅せ
 んとす。媛を始め、近侍の面々詞を盡して之れを宥む。大王曰ふ、さらばアーサイト、バ
 ラモン二人共こゝを去り、明年五月各々一百の武士を率ゐて來るべし、その時仕合の勝
 負によりて媛をとらずべし、と固く約束して各々三方に別れけり。
 シシニス大王は、それより命を下して、宏大なる比武場を作らしむ。周圍凡そ一哩、石を

壘みて周壁となし、諸門は悉く大理石を以て作り、オナス、マーズ、ダイヤナ等の諸尊神の
 神龕を處々に安置し、周壁の内面には古英雄の功業を畫き、又は彫刻したるなど、其の莊
 麗古今に比ひなし。さる程に仕合の當日近ければ傳へ聞きたる遠近諸國の王侯、武將、我
 れもくゞ雲の如くに集りたるが、中にもバラモンを後見して來りたるシーアス王は、
 金冠を戴き、金車に乗り、四頭の白牛にこれを牽かせ、二十頭の白狗を隨へて場内にれり
 入れば、車に垂れし海珠、山玉の珊々たる聲は、あたりの鳴りをも靜むるばかりなり。ア
 ーサイトの後見はリテヤ王にして、金鎖つけたる肥馬に跨り、頭には桂冠を戴き、馴れた
 る純白の巨鷲を押し立て、獅、豹等の猛獸を前後左右に従へたる威儀シーアス王にも譲
 らざりき。さてシシニス大王は盛宴を張りて一々貴賓を接待し、應禮朝夕を徹したり。
 かくていよいよその日となりければ、バラモンは黎明オナスの神殿に參拜し、祈念をこ
 らして勝利を願ひけるに、神像の不思議にも震動しければ、正しく感應の靈たま微こ雀こ躍とし
 て場内に馳せゆきぬ。さてまたアーサイトも、早朝彼のマーズ神に參りて勝利を祈り
 けるに、神像の靈たま爾として鳴り響きければ、これも勇みて場内にかかけつたり。やが
 て時刻となれば、喇叭、角笛、笛、太鼓さまぐの軍樂の響を合圖あはとして、双方各々百名の勇士、
 并ナスの白旗とマーズの赤旗をふりかざして、劔戟の光り白日にまばゆく、耻を知り
 義を重んじて、奮撃亂戰の壯觀たとへんに物なく、少刻勝負は見えざりしが、やゝありて
 マーズ神の御影、アーサイトが頭上に現るゝと見るや否や、味方の勇氣百倍して支ふる
 間あらせず、雪崩なだれの如く押し進めば、バラモンが隊はことごとく敗北し、勝利はアーサイ

トと定まりて滿場の喊聲は天地を動かさんばかりなりき。
 さるほどに并ナスの女神は神力マーズに及ばずして、空しくパラモンを敗れしめたる
 をかこち歎き、其の聲オリムバスの靈山を動かし、且つ其の涙は時ならぬ洪水と大地に
 溢れければ、サタルン神見そなほし、女神の悲歎を止めんと、即ちフーリーズを下す。恰
 も真しアースイトがエミリ媛の手より桂冠を受けて歸る途上フーリーズ烈風となり
 て俄然陣馬の足もとに落ち、狂塵風と舞ひ立てば、馬は驚き人立してアースイトは落馬
 しけり。乃ち扶けて宮中に歸り醫療に手を盡しけれど、神意なれば其の効なくて、遂に
 眠せんとするに臨み、エミリ媛に遺言してパラモンと婚を結ばしむ。かくてアースイ
 ト最後を遂げければ、大王はいと鄭重なる國葬を行ひ、エミリ媛は妻の禮を以て葬事に
 關り、墓頭には更らに桂樹を植えてこれが標となし、さて忌服はて、後ち、媛は遺言によ
 りてパラモンとめでたく婚し、雅典の武威はこれより益々宣揚せり、云々。

序、の卷にいへる所によれば、往く路にておの／＼二種、歸り路にても、おの／＼二種
 の物語りする約束なりしかば、都合三十二人の香客(宿)を出て、後更に三人の賽詣
 者(加はりたり)が、悉く物語せば、百二十八種の物語となるべき筋なるが、本篇は、諸香
 客が未ださして行くカンタアペリの聖院に着せざるうちに中絶したれば、その物
 語は合せて二十四種だけにて終りたり。されども一種の物語毎に序の卷添はり

て、前後の聯絡を整へたれば、當代には珍しき長篇の歌となれり。さて、寺領僧のと
 チーサーの第二の物語とを除くの外は、こと／＼律語にて物せられたるが、この
 律語には一つ／＼に調べの變化あるが故に、絶えて一律單調の弊に流れたるとこ
 ろはなし、こは其の道の學者の定評なり。按ふに、幸ひにかくの如くなるを得たる
 は、一つは其の物語の旨趣の千變萬化なるにも由れるならんか。

チーサーは優美なる詞藻に富みたるのみにあらず、談諧の才にも、悲哀を寫す筆力
 にも長じたり。二十四種の物語のうち、パラモン、アースイト物語の他に、カスタン
 ス物語「カナセ物語」グリゼルダ堪忍物語の如きは、それのみを引き離して見るも
 尙ほ十二分の興味ある作なり。

「カスタンズ物語」は、法律家の語れるいと美しく且つ哀れなる物語にして、カナセ物
 語は、侍士の語れる怪しく勇ましく又美しき物語なり。又、有名なる「グリゼルダ堪
 忍物語」は、オックスフォードの一學人が語れるものにて、其の源はボッカチオより出
 でたれども、チーサーの想像添はりて一段の光彩を増し、貞女の神貌躍如たり。評
 者或は此の篇を以て「カンタアペリ物語」中の壓巻と稱す。總じて此等の物語の作

チーサーアと同時に名を著はし、詩文人少からず。散文にてはウィックリフの他に
 チン、トレギサと士爵ジョン、マンドギル(一三〇〇—一三七三)とあり。詩歌には
 ゴン、ガワア(一三二〇?—一四〇二)とジョン、バーボリア(一三一六?—一三九五)とウィル
 ヤム、ラングランドとあり。ガワアは其の傑作『コンフマシヨ、アマンチス』をもて
 名を知られ、ラングランドは其の作『ピヤアス、ゼ、ブローマンの夢』物語にて、バーボ
 リアは一二の史詩によりて其の名を傳へたれど、ラングランドを除くの他は別に
 創才の認むべきものなく其の詩文上の位置はチーサーアに比して負かに下れり。
 ガワアが作『コンフマシヨ、アマンチス』の趣向は懺悔をつかさどる僧が、一情郎を
 訓誨せんが爲にくさくの物語をす、といふにありて、大體は『カンタアベリ物語』に
 ひとしき物語集たるに外ならねど、作者の手腕も、想像も、いたくチーサーアに劣りた
 れば、物語しばく平板に流れ、剩へ、純然たる箇々別々の小話となりたり。
 ラングランドの傑作『ピヤアス、ゼ、ブローマン』は、例の夢
 物語の趣向なり。『ピヤアス』とは近世語に謂ふピータアの義にて、人名なり。『ブ
 ロマン』とは農夫の義なり、作者の理想が此の名を戴きて此の篇の主人公となれる

風は前に誤れる、バラモン、アサイト物語によりて其の大概を想像するを得べし。
 所詮、チーサーアが作の美妙なる所以はもとより物語の筋立にあるにあらず、されば
 その梗概を叙すればとて甲斐なかるべし。且つや、此等物語の筋は、概してチーサ
 アが創案にはあらず。例へば、士爵の物語の如きも、明にボカチオのシセイダ物語
 に基き、法律家の物語の如きも、作者の友たりし同代の詩人チン、ガワアの作を元と
 なせり。かゝるたぐひ數ふるに追あらず。後世の詩人しばく、チーサーアの此の
 物語の或部分を、近世律語に翻譯せんと試みつれど、ドライデンの堪能を以てすら
 も失敗し、大才ウオズオスの如きすらも、原作の妙に及ぶこと能はざりき。以て
 この物語の美妙の、専らチーサーアが特殊の天才に因せることを知るべし
 チーサーアの物せる散文の作も若干あれど、取りいでいふべきほどにあらねば茲
 には省きつ。

第六章 チーサーアと同代の詩文人

ジョン、ガワア—ウィルヤム、ラングランド—『ピヤアス、ゼ、ブローマン』
 ス、ドリーム—ジョン、デ、トレギサ—ジョン、マンドギル

なり。此の作の筋立は、ほとゞ『夢想兵衛蝴蝶物語』などに似たり。作者が五月のあるあした、マルブアーンが岡にてうたゝねしたる間に、二十種の夢を見る、といふが發端なり。其の着想はパンヤンの『天路歷程』^{ピエトリヌス・コラネ}に似たり、即ち本牀は宗旨上の隱喩物語にして、其の裏面には作者が貧富の不平均、教會の陋習等に對する憤懣の念を漏せるものにして、作者の意はウイックリフにひとしく宗教制度の改善にありしと明かなり。其の詩としての價值は兎も角も、其の人心に於ける影響は頗る大なるものありき。件の詩篇は、未だ脱稿せざるうちに、各處に傳唱せられ、且つ十六世紀の始まって棄てられずして讀まれたれば、其の實際に世間に向ひて宗教改革を鼓吹せし力は、或はウイックリフにも劣らざりしならんか。

この物語は全篇に通じて句數七千餘あり。サクソンぶりの二昂音と頭韻とを用ひて作れるは、此の作を以て名殘とす、而も其の最も整頓せるものと稱すべし。尤も頭韻の法は十六世紀頃までも傳はり、尙それより後の代にも、上流婦人の言語には、一種の修辭上の遊戲のやうになりて行はれき。

ラングランドの傳は詳かならず。紀元後一千三百三十二年にシェロップシャー

ヤ州に生れて、同一千四百年に歿したりといふ説、やゝ確實なるが如し。(我が頼阿法師、二條良基などよりも二三十年の後なり)。かの夢物語の、初めて世に出でしは、一千三百六十二年頃にして、未完のままにて處々に傳寫せられしを、ラングランド後に追加して同九十年に至りて完結しきといふ。總じて詩的想像の妙味は、チーサアが作に比ぶべくもあらねど、當代の暗黒面を髣髴せしむるに足る其の内容は、彼のチーサアが作の樂天的、光明的なると相對照して倫理史、風俗史上の價值あり。加ふるに、其の頗る複雑なる隱喩牀は、後のスペンサアが『神女王』の先驅とも見えて興味あり。

さて、この歌の體に倣ひて『ピヤアス、ゼ、ブローマンズ、クリード』『ピヤアス、ゼ、ブローマンズ、テール』など同様の名を冠したるもの、二三種續き出でしかど、いづれも庸筆凡想取りいで、いふに足らず。

ジョン、デ、トレ井サは、チェスタアの僧にして、ラルフ、ヒグデンが著せる羅甸文の『列國史』^{ボラニニア}を翻譯して譽を一世に得、またジョン、マンド井ルは、三十四年間海外に漫遊し、歸國の後、羅甸文をもて一大紀行を綴り、更にそを佛文と英文とに翻譯して世

に示しき。

此の書は主に基督が靈跡ヂエルサレムに到る道路の案内を明にしたるものなれど、作者が漫遊中に見聞せる事物をも悉く併せ録したれば、極東は支那地方のことにまで及び、信ずべからざる荒唐なる怪談奇話をも錯綜して叙説せり。接ふに、當時にありては極めて珍しき著述なりしなるべし。マンドバルは、往々、英國散文家の祖としてウイックリフと併稱せらる。彼れが英文の特質は多く佛語ボヤナの素を交へたる所にあり、概して一百語につきて十二箇の佛語を用ひたり。學者の説によれば佛蘭西語の英國に入りたるは第十四世紀を以て最とし、千四百個の佛語は此の作者のみによりて英文の通用語となりきとぞ。これによりてもマンドバルが紀行の當代に勢力ありしことを見るべし。

第七章 チョーサアの死後一百年

模倣時代—詩歌—ゲモン、リドグレート—蘇國詩人—散文—カウグスト
—印刷術の輸入—古文學研究熱—圖書館の設立

チョーサアの物語歌、ラングランドの宗旨歌いでのち、凡そ一百五十一年間は英國文學の最も振はざりし時代なり、語を換へていへば、一千四百年に斯道の曉星チョーサアが消滅してより、一千五百五十二年に第二の大詞宗、エドマンド、スペインサアが生まれ出づるに至るまでは、此の國の詞壇寂寥として一人の創才をも生ぜざりき。就中、チョーサアの死後一百年間、我が朝後花園、後土御門、兩帝の間、一條兼良の生誕より宗祇法師の入寂に至るは、大詞宗出世の後にありがちなる專念模倣の時代なりき。

チョーサアが嚮に倣ひて物語歌を作りしものは夥多ありしが、能く彼れに及べるものは絶無なりき。其のうちや、名を録するに足るは、チョーサアが友たりしトマス、オックリーヴとチェン、リドグレートとの二人ならん、二人ともに一千三百七十一年に生まれき。リドグレートは『カンタアベリ物語』の補遺として『Story of Thebes』と云ふ物語歌をもつて、多少其の詩才を顯はしたれど、もとより續貂に過ぎず。此のころ蘇國スコットランドには、却りて二三の名家ありき、蘇王ジェームス一世の如き、ウィルヤム、ダンパーの如きは、多少創才ありし詩人なり。中にもジェームス一世（一三九四—一四

三七)は十五世紀中第一に位する詩才の人にして、其の傑作 “King's Quhair” (King's Book) に用ひたる七行體の詩格の如きは、王家調フイムロイヤルと稱せられて永く後世に傳はりぬ。さて散文界にて肥臆すべきは、國文にて『專制君主政治と有限君主政治との別』といふ書を著し、士爵デモン、フォンテスキュー(一四三一—七一)、テニンソンが “Idylls of the King” といふ歌の種本となりし “The Morted Arthur” (『アーサーの死』)といふ物語集を綴りし士爵トマス、マロリ並次にウイリヤム、カックストンなどなり。

此の三人のうちカックストンカックストンは、はじめて此の國に活字印刷活字印刷の術を輸入し、文運復興の端を發きしものにて、一千四百二十二年に生まれき、ロンドンの商買なり。カックストン、中年屢々海外に遊び日耳曼國にて、はじめて印刷術を學び、深く其の利便なるに感じ、大に此の術を應用せんと企て、最初はベルシャムなるアルプツの地に、後には、コローンの地に印刷所を設けて、漸次に出版の業に着手せり。されど此の業の英國に行はるゝに至りしは、一千四百七十四年をはじめとす、即ち日耳曼人が活字を用ふることを發明せし後凡そ三十一年なり。(我が應仁亂平定の後一年、即ち文明六年に當たる)。

Caxton.

英國にての最初の印刷所は、今のウエストミンスター院の近傍にありき。はじめて印刷せられしは、我が象棋に類したる遊戲の指南書なりしが、おひくひくに有用なる書類をも刊行するにいたりき。されど、一方に於ては、宗旨上の議論かしましく、一方に於ては荒唐なる傳奇、小説を喜ぶの念いまだ衰へざりしかば、當時印刷せられしは、概して宗旨の書と傳記類となり。チーサー、ガワア、リドグート等の傑作も此の際多く印刷せられて後世に傳はりたり。一千四百七十一年より同九十一年までに印刷せられし書は、六十三種以上なりきといふ。而して此等の書の多數は佛蘭西又は羅甸の書の翻譯にて、カックストンがみづから物せしものと多かり。一千四百八十二年に彼れが再譯して出版せし『列國史』は、例のヒクデンの『ポリクロニコン』にて、嘗てトレボサが翻譯せしものゝ再譯なり。トレボサが彼の書を譯せしは一千三百五十年にて、此の時をさること僅に百三十年ほどに過ぎざりけれど、國語の變遷の頻りなりしが爲に此の舉ありき。言文二途の國にてはかゝる必要をおぼゆること稀なれど、他の國の文章は、言文一致なるだけに、百餘年を経れば、殆ど解すべからずなること間々あるなり。

要するに、印刷術の輸入は、後のエリザベス文學を誘致すべき一大遠因なりしと疑ひなし。チーサー死後の百餘年は、實に名高き薔薇亂の起こりし時代にて、さらぬだに民心一日も安ぜざりしに、一方にては、宗教改革の氣焰漸く盛になりて、物情騷然たりしかば、皮相より觀れば學問の道は地を拂ふべかりし筈なれど、實際はさもなくして却りて古文學の研究盛に行はれき。是れ、一は印刷術の便宜に由り、一は當代の大勢の然らしめし所なり。もとより第十五世紀の末三分の二の間には創作と稱すべき詩文の寥々として晨星の微なるにも似たりしとは事實なれど、文學研究の熱度はなかく、に舊に倍し、ヨオク家とランカスター家との間に起こりし系統の争は、前にいへる薔薇亂の慘劇を醸し、我が南北朝の争亂にひとしく、此の國の全局を騷擾せしことも事實なれど、書を讀み文をもてあそぶの心は、毫もこれが爲に減せざりき。現にヘンリ六世王、エドワード四世王をはじめとして、當代の諸侯のうちに深く書を好み文を愛せしもの夥多あり、例へば、グロースタアの公爵ハムフレイのごときは、領内處々に圖書館を設立し、わざと伊太利より博學の士を招聘し、盛に希臘の古書を譯せしめき。又ウースター伯ジョン、リンコンの

僧ロバート、フレミングなどは、頗る傑出せる宏學の士にて、みづから希臘羅馬の古書を翻譯し、若しくは世に稀なる謄寫本を蒐集して、英國の圖書を増加せしこと尠少ならず。而して、此の古學熱の漸く此の國に盛ならんとせし時に當たりて、所謂學藝復興の大勢、伊太利地方に發源して、不學蒙昧の堤防を破り、英國の文壇に傾瀉し來り、浸潤すること五十年にして、遂にエリザベス朝の盛大なる文學を生むに至りぬ。

第八章 文運興隆の遠因

歐洲の暗黒時代——當代の社會——其の反動——宗教革新——ルネッサンス(學藝復興)——英國の狀態

按ふに、英國文運の興起せし近縁は、主として内國の狀態に存じきと雖も、其の遠因は歐洲大陸の大勢にありきといはざるべからず。所謂大陸の大勢とは何ぞ。絶望厭世の色を帯べりし中世的、想念の反動と宗教革新と學藝復興と、此の三大勢の結合是れなり。

文運復興前の一千年間、即ち古羅馬帝國瓦解して列邦競起し、骨肉相嚼み、君臣相殘

ひ、虎視狼貪ひとへに武力のみをもて最大の真理としたりし中古時代は、基督教が其の間に希望の教を説きて人間の墮落を救はんと力めたりしにも拘らず、尠くも、現世間、即ち現在の生活に關する限りの世界は、漠々濛々たる絶望の雲霧に掩はれたりし時なり。「人間は日を逐うて墮落し、社會は年と共に澆季となりゆく」といふ感想は、この一千年間の諸國民の脱せん^と欲して脱する能はざりし所なりき。當時の哲學者は論ずらく、人寰は穢土、苦海、到底救ふべからざる魔國なり、之れに處するの方は、冷然として無頓着なるか、幽玄なる神秘説に安立するか、しからざれば未見の天上生活を頼みとして現在の穢界を脱離せん日を俟つにあるのみと。かゝる淺ましき社會の有様なりしかば、彼の希望をもて生命とせる基督教會の識者すらも、現在の世間には希望の影を求めかねて、只管に他界の生活を推薦せしかば、現に紀元後第一千年の近づくや、當世の俗衆妄信すらく、全世界悉く壞滅して、宇内の組織は根柢より革新せらるべしと。我が源平盛衰後乃至戰國時代の闇黒の度に百倍せり。詢に中古時代の大半は、恐怖悲愁の時代なり、現世の悦樂は皆あだなりとして抛擲し、未來の靈界に入らん日を、惴々として懊惱惆悵の中に俟ちし時代なり。

り。然らざる者は徒らに懷疑し、妄に天人を嘲侮し、或は肉體の樂欲に是れ耽りて空しく醉生夢死したりし時代なり。其の先覺と稱すべきものだに、人生をもて假の宿となし、人類をもて穢土の旅客となし、人間の悲喜哀歡に對して何等の温き同感をも抱かざりしものゝ如し。其の最も重んぜしは、ひとへに未來の靈界なりき。彼等のしかすがに人生を棄つる能はざりしは、靈界に到るべき唯一の通路の、ひとりこゝにのみ存したるを信ぜざるを得ざりしに因るのみ。

思想界の紛亂既に是の如し。第十四世紀の末に及びては、基督教の如きも生命なき信仰となり、其の弊風年を逐うて増長し、徳教の柱石たるべき教會は、虚儀空文の叢窟となりて、法權の壟斷、聖書の禁讀、宗教裁判、贖罪書など、あらゆる腐敗の行はるゝ世となりければ、人心こゝに萎縮し、神氣こゝに昏睡し、煩瑣なる註疏の外に哲學といふものなく、拙劣なる摸倣の外に詩文といふものなく、人類の多數は殆んど自動器械たるに他ならざらんとせり。

しかるに十五世紀の末に至りて、天下の大勢俄然として一變し、基督教會の腐敗は其の反動を呼び起こし、コンスタンチノール^の滅亡は古學の伏魔洞を裂開し、亞

米利加新大陸の發見は全歐の視聽を震駭し、印刷術の發明は思想の弘通を速にし、見聞を擴張し、希望を増加し、世間の愛すべきを感じしめ、生活の悦ばしきを覺えしめ、肉體の樂みの限りなきを示し、人生の必しも穢土にあらざるを證し、地獄、極樂のひとり他界にのみ存せざるを暗示せしかば、數百年來の絶望の反動は未曾有の勢力をもて全歐洲を震蕩しき。

蓋し、マルチン、ルッテルが九十五ヶ條の告文をキッテンベルヒの門頭に貼付して**宗教革新**の端を發きしは紀元一千五百十七年にして、英のウイクリフがロンドンにて宗教上の裁判をうけし時よりは百四十年の後なり。ルッテルが反抗の強大なるを得しは、畢竟社會の同感の強大なりし證據にして、時機はこゝに成熟し、革新の素願はこゝに達せられき。さて、其の影響の多様なりしや、實に驚くべきものあり。例へば(一)法王の直轄ならぬ限りは、各國ともに政治と宗教との分離を生じたる(二)靈界、俗界の分界生じ、隨うて人々幾分の自由を心身上に感ずるに至りたる(三)神學が繁擧なる儀典を離れて世道人心の本義に直接するに至りたる(四)教祖の福音が下級細民にまでも傳へらるゝに至りたる(五)新舊兩教徒が幾度か實際問題

に觸れて論争し、こゝに頭冥の頭腦を一洗するの機を得たる(六)就中舊教派を刺激して大に其の内部を改善せしめたる等、一々枚擧すべからず。而して此等の事情が更に社會萬般の發達の上に影響せし度合は實に量り知るべからず。要するに人心こゝに生氣を得、社會はこゝに流動の氣運に入り、天下を舉りて自覺の境に向はしめき。たゞそれ自覺せり、故に先づ人間行爲の歸趨を討究し、個人對上帝の依信を定め、こゝに安立の地と善行の標準とを得たりしなり。然り、意界の満足は既に得たり、彼等は更らに知界、情界の満足をも得んと欲し、冷く外界に向ひて研究の歩武を進めんとせり。

恰も好し、曩に伊太利に發源せし學藝復興の潮流は益々西北に進入せり。佛蘭西、西班牙、英吉利等の諸國は印刷術の便を借りて悉く是を收容し、かくて豊かなる新知識と豊かなる好新尙とを全歐洲に瀰漫せしむるに至りぬ。所謂**學藝復興**とは佛語「ルネサンス」(new birth)の謂にして、其の主因は、土耳其蠻族が屢々東羅馬帝國を侵し、其の領域を蠶食し、竟に其の首都コンスタンチノープルを陥れたるに基く。東羅馬帝國又の名希臘帝國とも稱す、當時學問藝術の淵藪たりき。さるから

にコンスタンチノールのおちいりしや、希臘帝國の治下にありし多數の學者、詞客等は、皆急に亂を避けて、伊太利に走り、さて其の生計を維持せん爲に競うてフロレンスの諸叢にて専ら古文學を講じたりき、而して此の事ゆくりなくも、蒙昧不學の雲霧を拂ふ學問の曙光となりしなり。帝都陷落は、千四百五十三年、足利義政治世、應仁の亂より十四年前のことなり。

是に於て、プレトール、アリストートル等の哲學、科學、能辯の諸書よりホーマア、ゾアラ等の詩歌に至るまで、いづれも温古知新の材料とならざるはなかりき。恰も是れ長夜の困夢俄かに破れて、眼こゝに豁然たるが如く、或者は新學によりて萬象の晶々然たるを觀、或者は新教によりて天地の長へに安きを察し、或者は古詩歌によりて宇宙の限りなく美なるを觀じき。

而して英國に於ては前にも述べし如く、薇蓄亂正に終りて、國內漸く昌平、人心治に安んじて業に力め、漸く文藝に近づきし時なりしかば、學者は争ひて**古學の研鑽**に従事し、或は遠く伊太利に學遊して、親しく古文學を學習し得て歸るなど、其の結果年を経て次第に現はれ、希臘、羅馬の名著は陸續として英文に翻譯せられ、後の諸

創作の好標本を作りき。皆是れ新思想、新好尙の開發となりたるものなれば、エリザベス盛朝の文學の如きも、畢竟は此の標本製作時代に胚胎せしものなりといふべきなり。

第九章 ヘンリ八世の朝

ヘンリ八世は國文學—古文學研鑽—當代の散文—トマス、モリアー—「ユートーピヤ」—ウィルヤム、シェンダール—聖書の翻譯—當代の詩歌—スケルトン—蘇國の詩歌—リンドセイ—トマス、ウアイヤットとサリ伯—新詩體—無韻律語

ヘンリ八世王はスチュワート系統第二の君にて、エリザベス女王の父なり、一千五百〇九年位に即きぬ。我が後拍原天皇の御宇、足利義植復任の第二年に當たれり。王は學を好み文を善くせり。ルッテルが宗教改革論の強盛なりしや、王一篇の辯難文を作りて大に新教を破す、羅馬法皇其の功德を稱美して王に贈るに、教會の干城といふ榮號をもてしき。王の朝は獨逸なる宗教改革の潮流の、漸く英國に侵入せんとしたりし時期なるが、此の際、文學もまた一百年間の懶眠を破りて、大に興起せんとせる姿ありき。現に一千五百年より次第に宗教革新の機運の盛にな

りし、一千五百七十八年の頃までに、高等學校の新設せられしもの、二十個所に及びしをもても、教育、講學の盛大なりしを見るべし。此のころ、有名なる和蘭の碩學、デシデリヤス、エラスマス、佛のバリーより、此の國に來遊して學問を奨勵するあり、且つ宰相ウルラーの、大に公財を擲ちて、講學の便利を補くるなどのことありて、**古文學研鑽**の道次第に弘通し、ケムブリッジの大學の如きも、チーク並びにスミスといふ兩學者の盡力によりて、此のころ大に發達し、尠なくも希臘文學の講習に於ては、オックスフォード大學をすら凌ぐに至りき。さて、此の新學問の太氣のうち、最初に發育せしものは**散文の文學**にして、其の最も卓越せる代表者を士爵トマス、モリアとす。

士爵トマス、モリアは、チーサーアの生誕後一百四十一年に、英京ロンドンにて生まれたり。十五歳の時、カンタアベリの監督たりしデモン、モオトンの侍童となり、其の庇によりて、オックスフォードの大學に入り、此の國にて始めて希臘語を教へし學者、クローションといふに従ひて古文學を修め、彼の碩學、エラスマスとも屢々交遊し、其の後大學を去るに及びては、在家僧となり、法律家となり、狀師となり、法學講師と

なり、ロンドンの判事代となり、衆議院議員となり、竟には衆議院の議長となりき。かくて、ヘンリ八世の御宇に至りては、次第に登用せられ、終に最高法官チャンセラーの榮職にまでも經登りけるが、史に有名なるアイン、ブリーニン女に關する結婚上の紛議起るに及びて、ヘンリ王の忌諱に觸れて辭職し、後更に王の爲に憎まれて咎を得、罪なうして斬に處せられき。時に千五百三十五年六月なりき。(我が後奈良帝の天文四年、西三條實隆の薨去の前二年に當る。)モリア爲人、廉正高潔、學博く、才秀で、而して胸懷頗る洒落、頓才に名ありき。傳へていふ、彼れの將に斬首せられんとするや、莞爾として刑吏を顧みて曰はく、此の髻何等の罪もなきに、主と共に斬られんと憫れむべし、まばらく猶豫を興へよとて、徐に長髻を搔きのけて、やがて從容として斷頭臺に其の頭を横へきと。以て其の死に臨めるまでも洒々落落たりしを見るべし。

モリアが著作の中最も重立ちたるは、千五百十三年に物しきと傳へたる、『エドワード五世紀』と『リチャード三世紀』となり。件の二紀の材料は、監督長モオトンが供せしにて、原史とも稱するに足るものなれば、にや、多少の甚しき政治上の偏見の爲め

に事實の謬寫せられたるにも係らず、學者大抵此の二紀を稱美して、眞の英語もて綴られたる最初の正史なりとせり。ハラムの如きも、此の二紀の文章を評して、善良なる英語の最初の模範なりとし、純正明晰、精選せる文字、卑野の嫌なく、術學の弊無しとたゞへたり。蓋し、當代は古學流行の初期なりし故に、世に出づる著述動もすれば羅甸文學の要なき引抄を以て充塞せられ、さなきだに幼稚なりし國文、國語は、爲めに其の發達を遲滞せられんとせし時なりしに、ひとりモリアの作のみはこれら浮誇術學の醜をまぬがれて、純粹の國文を發揮したるが故なるべし。シェイクスピアの史劇『リチャード三世』は、全くモリアの『リチャード三世紀』を基礎とせるなり。千五百十六年に至り、モリア更に一書を著し、『ユートーピア』と題しき、モリアの最も善く後世に知られたるは、此の『ユートーピア』によりてなり。此の書はもと羅甸文にて物したりしが、千五百五十一年に至りてラルフ、ロビンソンといふ者之れを英文に譯して流布せしめき、今廣くもてはやさるゝは、件の譯書なり。そもユートーピアとは希臘語にて、あらぬ處といふ義なり、蓋し、作者は此の無何有郷をもて一種の理想的共和國を代表せしめ、やゝ小説めく筆法をもて、仔細に理想

的制度、文物、風俗、人情を狀寫せるなり。

ニートーピアといへるは、半月形をなせる孤島にて、長さは二百英里、市の數は五十有四、家はいづれも大きさを同うし、いづれの家にも廣き庭園あり、往むこと十年にして總更替を行ふ。島中いづれにゆくも酒樓といふものなく、狀師といふもの無し。又流行の變易といふこと無く、虚飾の行はるゝこと無し。粧飾用の珠玉又は浮靡華麗なる綺羅を着するとは、ひとり幼少の間にのみ行はれたり。又人々皆寡欲にて、敢て奢侈贅澤を願はざれば、島民が一日の労働時間六時に超ゆるの必要なし。富豪は狼をみづからせて之れを屠丁に一任す。戦争は流石に絶えたるにあらねど、將軍は人を殺すことの勤くて勝利を得るをば最も大なる譽とせり。金銀珠玉に心を牽かるゝもの絶えて無し。罪人も死刑に處せらるゝこと曾て無し、彼等は皆奴とせられて備役に従事す。彼等は或特殊なる衣服を着す、其の耳の端を切り取られたるが罪人の證なり。されど、縱に逃走すれば刑せらるゝとあり。宗教は總べて自由なり、云々

以上は大略の大略たるに過ぎざれど、ほのかに、作者が理想をば察するに足るべし。要するに、此の作は、ブレントーが『國家論』に思想の骨子を得來りたるものにて、兼ねて十六世紀の時勢を消極、積極、兩面に反映せるものといふべし。按ふに、當代の著書尠からずと雖も、モリアが『ユートーピア』ほどに當代社會の弊習を諷示せるものは

なく、モリアが『ユートーピア』ほどに當時の新學問が喚起せりし生活、社交、政治、宗教等に關する諸種の新問題と新想念とを著く、反射し得たるものは殆ど無し。又理想國を想像して狀寫せるものは、東西古今に其の例あまたあれど英國にてはモリアのを最も古しとす。されば、この作は文學者以外、社會學者などの頗る注意する所となれり。所詮『ユートーピア』は英國に於ける政治的傳奇の濫觴にして、後年スオフトは其の諷刺體の作に於て多くモリアが故智を學びたり。モリアが作は、以上の外に小品文數篇あり、多くはルーテルが新神學を批難せるものなれど、こゝには擧げず。

モリアが散文に於ける功業は以上の如し。併しながら英國散文のかく俄かに進歩せしは、一は國王ヘンリ八世の保護獎勵の餘澤なりといふべし。佛の史家フルツザールの有名なる封建期の歴史をバーナード卿をして譯せしめしも王なり、又教育制度の改善に就きて士爵トマス、エリオットを扶助し、且つ不學蒙昧なる國俗を樂しません爲めにとて、専ら俗語をもて著述することを同じ人に勸めしも王なり。或は古學家リランドを獎勵し、或はロージャア、アスカムを外國に遣はして新

知識を英國に輸入せしめしも、また王の意より出でたり。アスカムは當代屈指の古文學者にて、後に有名なる『學師』といふ書を著し、者なり。

ヘンリ八世の朝に至りて、新學問の氣焰、上にいへる如く盛なりしが、新舊兩教の軋轢の漸く酷しきに至りしや、學問の進歩又まばらしく停滯せり。されど、又一方より見れば、彼のウイリヤム、チンダルが『新約全書』を翻譯して(千五百二十五年)英語の確然たる基礎と標準とを定むるに至りしは、其の實此の軋轢の結果なれば、件の宗教上の鬭争も強ち文學の發暢を妨害せしものとのみはいふべからず。

チンダル(一四八四—一五三六)は當時の散文家中に錚々の譽ありしものなり。嘗て日耳曼に遊びてルーテルと會見せし時、話次聖書のこと及びて聖書は教會の專有すべきものにあらざる由を感じ、やがてかなたにて筆を執りて『新約全書』の翻譯に着手し、さて十餘年にして成功し、はじめはフッテンベルヒにて上梓せしが、ヘンリ八世王が羅馬法王と隙を生ずるに及びて、始めて英國にて出版しき。マインは彼れが著を評して曰はく、チンダルが『新約全書』の翻譯は第十六世紀の初半に於ける最も重要な言語學上の紀念碑なり、否、或ひはチーサーアとシエークスピアと

の間に現はれたる最も大切なる記念碑なりといふを得べし。第一に、歴史的遺物として大切なり、第二には英語もて神聖なる『バイブル』を翻譯するの格式を定めたるが故に大切なり。一千六百十一年に成りし『聖書』の翻譯の最良なる形質は總じてチンダルの翻譯に由來したり。云々と。チンダルの用語はいづれも皆通俗平易なる英國語なり、羅甸語をも、佛蘭語をも力めて避けたり。彼れの文章と近世の英文とを對照するに、其の相異なる所は殆ど綴字法にのみ限られたりといふを得べし。左に其の例一二章を掲ぐ。

A certayne man descended from Jerusahme into Jericho and fell into the hondes of theves
 whych robbed him off his reyment, wonded hym and departed leynge him halfe deed.
 And yt chanced that there cam a certayne preste that same waye and hym passet by.

按ふに、綴字の相違は、猶我が假名遣の相違のごとし、外面のみを見ればチンダルの文と近文との間にはいと著き相違あるが如くなれど、文脈、語格の上より見れば、二者殆ど相異なる所なからんとす。而して件の翻譯は廣く當世に行はれたりしものなれば、其の直接并びに間接に、英語、英文の上に及ぼし、影響の尠少なざりしこと想見するに堪へたり。

さて、此の時に當たりて、**詩歌**世界の模様はいかなりしかといふに、韻語は尙依然として不振の姿なりき。已に前にもいへる如く、大詩人チーサー去りて後はまた彼れに及ぶべき俊豪のいづると無く、偶々英才のあらはるゝとありしも、彼等は皆徒に舊套を襲ひて只管にチーサーの驥尾を追へりき。ヘンリ七世王の朝に名聲ありしスチーファン、ホーズ、并びにヂン、スケルトンの如きも總じてチーサーの摸倣者なり。

ヂン、スケルトン（一四六〇—一五二九）は、中ごろ宗教改革の風潮に鼓吹せられ、驟然覺悟する所ありて、更らに一家の機軸を出だし、専ら宗旨上の自由を歌ひしが、其の作漸く諷刺に傾きて、詩歌の本領に遠ざかりしかば、竟に眞詩人たる能はずして止みき。其の作のやゝ見るべきは“Colin Clout”一篇のみなり。

此の際**蘇國の詩歌**は日々發達の運に向へり。蘇國はもと、英國に同じくケルト蠻族の棲める國なりしが、サクソン族の英に入りし後は、英蘇の差別やうやく著くなりゆき、隨うて彼等の作る所の詩歌と英國のとは頗る相異なる質を具ふるに至りき。其の一因は人情習俗の相同じからぬに在ること勿論ならめど、一は彼の

國民の愛國心のいちじるく強かりしゆゑなるべし。按ふに蘇國も、英國も、元は共に獨立の王國なりしが、蘇は動もすれば英の爲に凌虐せられて自由を失ひしことも間々ありしかば、彼れが自由獨立を重ざるの念はあつから一層深かりしなり。是れ或は幾多有爲なる詞傑を此の國よりいだし、所以ならんか。其のはじめは蘇の詩人も、大抵はチーサアの摸倣者たるに過ぎざりしが、有名なる士爵デブッド、リンドセイのいづるに及びて、詩歌の新天地にはかに開かれ、それよりこのかたますます進歩の運に向かひき。

リンドセイ(一四九〇—一五五七)には種々の作あり。リンドセイは、英のステルトンと同じく、宗教上の自由の爲めに唱歌せしものなり。其の作にて優れたるは“The Dream”、“Three Estates”、“Monarchy”等なり。リンドセイとステルトンとは、只管宗教上の事に熱心なりしあまり、兎角に詩歌を教化の機關の如くになし、それが爲に詩歌の本領をそこなひし趣あり、これ蓋し此の二人が秀でたる詩才ありながら、竟に大名を成し得ざりし所以なるべし。二人共に、生活を質素にして思念を高上にすべしといふ旨を歌ひしなり。

さるほどにヘンリ八世の御宇の末に至りて、時機漸く熟して二人の新詞傑世にいでたり。士爵トマスウ、 Wyatt と、伯爵サリと、是れなり。

ウ、 Wyatt とサリ伯とは、二人ながら當代の摺紳にて、共に久しく伊太利に遊びてかしこの新詩風に薫染し、其の本國に歸り來しや、大に新體の詩の興さるべきを唱へ、詞壇の革新に従事し、みづから其の率先者となりしものなり。近世に行はるゝ律格は、概して此の二人の創始せし所なりとも言ふを得べし。二人共に抒情詩風の作に秀でたり、ウ、 Wyatt の作は深沈にして嚴格、サリのは、懐活にして優婉なり。

彼等の創唱せし**詩歌の新體**は所謂 Amourist Poetry(戀の歌)なり、即ち、其の主題は男女の相思、其の中に含まれたる觀念は、プレトールの哲理、其の師表は伊太利の詞宗ペトラルクなり。彼等が一たび此の戀歌の緒を發きしや、此の體一般に流行し、其の響に倣ふもの輩出せり。ウ、 Wyatt、 シドニ、 シェイクスピア、 スペンサー等の十四行體は總じてサリ等のと同旨同格のものなり。さて、ウ、 Wyatt とサリとの功績はたゞ上にいへるのみにはあらず、就中、サリの如きは伊のグアッラの『イニヤス物語』を翻譯するに當たりて、其の第二篇と第四篇とに於て十音の**無韻律語**を創用

して律語の自由を擴張するの緒を發きぬ。たゞしサリの用ひたる無韻律語は甚だ亂雜なる者なりしと勿論なり、されど其の後、彼のガスコインが之れを其の諷刺詩に應用し、マローが其の傑作『タムバレーン』の劇に利用し、又シェークスピア、ボームント并びにマッシュアが之れを其の脚本に於て如意自在に使用するに及びて、驚くべく便宜なる一種の格式となりぬ。さりながら、其の正當の叙事詩、抒情詩に於て巧妙自在に利用せらるゝに至りしは、ジョン・ミルトン以後のとなり。之れを要するに、サリとワイヤットとは創才の詩人としては大に重ざるに足らざるべけれども、其の殆ど一定の詩律の無かりし時に生れて、ほゞ調律の格式を整頓し、且つ詩人の着想を一變せし功は没すべからざるなり。蓋し、此の二人以前の詞壇に於ては寓意、比喩の詩歌のみ盛に行はれ、偶々男女の戀愛を歌へる者なきにあらねど、彼等は皆中古時代に行はれたりし通有の人情をほめかしたるものにて、活きたる感慨といはんよりはむしろ抽象的、人情、抽象的戀愛に種々の彩色を施して表現せる者ともいふべし。換言すれば、活ける個性ペソナリティなどいふもの殆ど感興の詞句の中に見えざりしなり。酷評すれば、彼等が作の多數は我が衷心の誠を表白せず

してむしろ在り來りの人情を歌ひたる趣あり。サリとワイヤットとの相思歌は然らず、直に我が衷心の苦惱を吐き、思はぬを思ふ哀れを歌ひ、聽く者をして、句々言々悉く血肉かと思はしむるの概あり。すなはち、サリ、ワイヤット以後の英國の詩歌はやゝ寫實の傾向を帯び來れり、尠くとも個性を表示するを旨とするに至れり。ワイヤットは紀元一千五百三年に生れて同四十二年に没し、サリ伯(姓名 Henry Howard)は一千五百十六年に生れて同四十六年に没しき。我が室町時代の末葉、守武、宗鑑等と同年代に當る。

サリ、ワイヤット以後、チーサーを摸倣する弊やうやく滅びて、こゝに詩歌の氣運一變するに至りしが、エドワード六世の朝とメリ女王の朝とは、宗教上の紛擾甚しく、且つ之れに對する政府の處置殘酷を極めしかば、詞壇の進歩は之れが爲に障礙せられ、再び停滯の姿ありき。さはれ、そは只一時の妨害たるにとゞまりたり、一千五百五十九年にエリザベス女王の位に即くや、恰も陽氣の來復を待てりし春林の百花の如く、詩歌文章一時に煥發し、こゝに古今無比の偉觀を現じき。次々に説く所を見よ。

第二篇 エリザベス朝の文學

第一章 緒論

女王エリザベスの治世——國力の膨脹——當代の國俗——大自由の時
代——美醜の混淆——演劇的社會

エリザベス朝新文學興隆の大因の、遠く全歐の社會的大變動にありしことは、既に前篇に述べたるが如し。而も此の歐洲的大變動の影響は、國々の状態によりて其の量と質とを異にせしが故に、伊太利にてはアリオストロ、タッソーを出だし、佛蘭西にてはマローとラプレーを出だし、葡萄牙にてはカモエンスを出だし、西班牙にてはエルシラを出だしき。さて、英國にては、これら諸名家に後るゝこと數十年にして、スペインサア、シェイクスピアをはじめシドニ、ローリ、マロー、ベーコン等の大文豪を出だし、一躍して世界文學の頂點に立つに至りき。この文學上の偉なる現象は明かに英國に於ける當代の大勢に淵源せりといひて可なり。案ずるに、女王エリザベスの治世の間は、英吉利の國運が暴かに興隆せし時なり。

エドワード三世、ヘンリ八世の御宇の頃より漸次に膨脹し來りし國力、今や大亂後の昌平に遭うて更に一段の充實を加へたり。大海嘯の勢を以て奔瀉し來りたる古學復興の潮勢は、貴族の保護推奨と國民の苛求熱需とに助けられて益々學者の研鑽を促し、刻々時々新思念、新想像を注入し、以て國民の精神を富ましめ、加ふるに大陸にて成就せられし宗教革新の結果は、彼等が安立の所依を定むると共に大に彼等が勇猛精進の志氣を鼓吹したり。これと同時に、政治上に於ては、國皇エリザベス陛下に對する三回の逆謀は、大事に至らずして挫敗し、國皇の敵、蘇國のメーリーは脆くも刑場の露と消えにき。英國々教の大敵たりし西班牙王フィリッパが無敵必勝の大艦隊は、神風の不可思議なる助によりて、英國の灣頭に粉碎となりにき。英國の威武は、さながら大陽の天に沖するが如くなりき。加ふるに、幾多の冒險家者流は、千萬里の海外に航遊して、異を探り、奇を齎らし、遂には西班牙人に代りて、亞細亞に亞米利加に、海上の覇權を握るに至りぬ。こゝに於いてや、貿易交商の道大に開けて、國富み、個人榮え、知識暢達し、意氣昂揚し、幾万頃の森林沼池は、着々開墾せられて、良田となり、農夫は半世紀間に二倍の收穫を得て、鼓腹擊壤し、下院議員の資産

Armada

はやがて上院の三倍するの奇なる現象を呈するに至りぬ。諸侯伯、指紳は、封建の餘夢の尙残りて、確執軋轢の未だ熄止せざりしにも係らず、國君エリザベス陛下を愛敬するの念は、家族の家長に於けるが如き者ありて、常に女皇を國家の中心として崇尊し、一致團結の實を維持せり。

英國十六世紀の後半は、**進歩擴張の時代**なりき。文明の利器の未だ具はらざりし大不便の十五世紀より一躍して、大便利、大自由の社會に立出でし時代なり。下民の家々にまでも、煖爐ストーブを裝置せしはこの半世紀なり。市街の大通りに敷石を布設せしも此の半世紀なり。公卿貴族の別墅の多く設けられしも此の半世紀なり。大小數十の劇場の倫敦に興りしも此の半世紀なり。人々はかくして現世間の頼もしきを感じ、此の國の威力の強大なるを意識し、人生の快樂の日々に長ずるを見聞し、又之れを獲るの道の必しも得がたからざるを知覺し、人間の行爲想欲の驚くべく重ずべく、且つ旨味深きを覺りたりき。彼等は、中古時代の知者の如くに、偏に靈界のみを景慕して現世の生活を厭離せんとせず、又彼の後の十八世紀の士人の如くに、偏に中央の市府にのみ重きを置きて、其の他を遺却せんと欲するに

も至らず。エリザベス朝の國俗は、おしなべて人間の行爲と想欲とに深き旨味あるを感じ、其の美しきをも、其の醜きをも、其の高きをも、其の卑しきをも、其の悲しきをも、其のを加しきをも、悉く之れを歓迎せりき。さればまた、一方より觀れば當時は、醜徳にも、弊風にも、富みたり、或意味より言へば、紛亂を極め、甚しき不秩序に陥りたりし時なり。是れ大革新時代の哀しむべき、まかしながら、止む能はざりし件弊なり。

此の時に當たりて、從來成立てりし各種の格式の、苟も世道人心を律すべきものは、殆ど皆其の効力を失ひ、基督教の如きも、其の舊教は已に虚儀の如く、新教はいまだ確立するに至らざりき。要するに、教界も、俗界も、共に確定せる制規を失ひ果たる、なほ我が明治維新後の情勢に髣髴たりき。一言もて蔽へば、**隨意放埒の時代**にして、何事を行ふにも一定の摸範なく、人は皆摸倣せんとせずして創作せんと欲せしがゆゑに、尠くとも其の當初は、風俗も、好尚も、人の行も、人の説も、其の面の如く多様なりき。宮廷の公人すらも、其の服装をば、或時は佛蘭西にし、或時は西班牙にし、又伊太利、希臘にして異ならず。當時流行の亂雜と激變とは、婦人よりも却りて男

子に甚しかりきといへり。按ふに、かくの如き不秩序と放埒とは、絶対に稱美すべからざる勿論なれども、エリザベス王朝の民衆をして未曾有の發達を成就せしめしものは、畢竟ずるに、此の大自由の力に由る、所謂一利一弊也。

凡そ人間の想欲は外より來る刺戟の強弱に依りて増減す、而してエリザベス朝の英國は、前に叙説せる大變動によりて、其の局面俄然として變せしかば、聞く物、觀る物として新奇ならざるはなく、官感に於ける刺戟も、情緒に於ける刺戟も、知力に於ける刺戟も、到る處に具はりたり。例へば、諸工藝の勃興と有無交易の繁昌とは、般富なる大英國の市場に宇内の實用と奢侈とを網羅し、印度、亞米利加の珍寶、奇品、皆こゝもとに輻湊したりしかば、上下之れが爲に眼眩み、雅俗之れが爲に動顛せりき。加ふるに、古學藝復興の餘波は、雜然として外國美術を此の國に打寄せ、雲に冲る臺榭樓閣の輪奐、諸名工が畫きたる繪畫の美、奢侈を極めたる時様裝の絢爛、内外人の心目を駭かし、果はロンドン全街を擧げて活きたる、劇壇の光景と化せしめ、其の織るが如き、往來の雅俗、上下、男女、老弱をしてさながらに無數の優人たらしめき。風流の心なき徒たりとて、常に此の間に棲息してまばく、想像を鼓吹せられなば

竟には雅化して詩人たらざるを得ざりしなるべし。况や、別に古希臘、古羅馬の哲學、詩歌、雄辯のたぐひが、或は譯せられ、或は釋せられて、冷く思想界に流布せしをや。知力、想像力はた大に活動せざるを得ざりし也。此に於てや、人間が身心の機能は八面に發暢し、其の結果は竟に古今空絶の駭くべきエリザベス朝の文學となりて現はれたり。

然れども、人の身心のかく縦に發暢せしや、其の結果の毎に善且つ美ならざりしこととは勿論なり。蓋し、美と善との大に暢びしや、醜と惡とまた大に暢び、高と雅との大に發達せしや、俗と卑と亦大に發達し、或部分は甚だ愛すべく、敬すべく、慕ふべく、貴むべきが如く、或部分は甚だ嫌ふべく、厭ふべく、惡むべく、卑しむべきが如くに見えたり。失儀、猥陋、慘酷、殘忍等の諸惡徳は、優美、嫺雅、慈仁、任俠等の諸淑徳と共に紛錯混交して雜然たりき。而して此の奇怪なる特質は、當代社會の全分の上にも、又一個人の上にも貫透し、ヘンリ八世の如き、エリザベス女皇の如き、エッセックスの如き、ローリーののごとき、正史的人物の上にも顯れ、フォールスタッフ、クレオパトラ、アントニ

↑ 以上皆シェイクスピア劇中の人物の如き假設的人物の上にも見えたり。

要するに、エリザベス朝の社會は演劇的社會なり、祭日、祝日に於ける當時の英國は、さながら絶大の畫圖の如く、若しくは絶大の演劇壇の如くなりき。其の貴賤の晴衣裳の如何に我が元祿、享保期の扮装のはてやかなりしよりもはやかにして、其の看覽を好み、盛觀を好み、歌舞を好み、摸寫を好むの念、詮ずるに、演劇的顯象を愛好するの念の如何に偏狂的程度に達したりしかを知らば、此の時に當たりて詩客、吟人の輩出し、劇の大に勃興せしと、また異しむに足らざるべし。エリザベス朝の機運と大勢とは、ほゞ我が明治維新後の機運と大勢とに比すべく、其の繪畫的社會の狀況はむしろ我が享保前後の社會に比すべし。享保前後徳川全盛期の扮装の如何に演劇的なりしかを想へ、男達のモサことばの如何に詩歌的なりしかを想へ、我が時代物の劇に用ふる錦繡羅綾の如何に一たびは現實の盛服なりしかを憶へ、頼兼の駒下駄、色奴の絹襟、岩永左衛門の杜杯の嘗て現實に見られたりしを憶へ、此の比較の中らずといふとも遠からざるを察るに足るべし。

以上をエリザベス文學の勃興に關する簡單なる解説とす、尙劇壇の詩人并びに其の作に關して叙説せん折にこゝに説き洩らしたるを補ふことあるべし。今は假

にかばかりをもて足れりとして、直に當代文學の叙説に移らん。

第二章 第一期エリザベス文學

本篇の細分——詩歌——サックギル——ガスコイン——其の他の詩人——翻譯熱の時代——物語類、バラッドの流行——試験時代——修史家——フアビヤ——ホール——ホリンシエッド——海外の奇談——小冊子の出版

サリ、ウアヤットの二人は、エリザベス女王即位の年に少しく先ちて其の諸作を公になせりしかど、所謂エリザベス文學の先導は彼等二人なると明なれば、史家或は彼等をもエリザベス朝の詞傑中に列せんとす。されど、叙事の順序を明瞭にせんには、エリザベス女王即位の年をもて、エリザベス文學の第一年とせんかた穩なるべし、さて此の區分に據る時は、即位の當年、即ち一千五百五十九年より同七十九年まで（我が正親町天皇の永祿二年より天正七年まで、細川幽齋、小野通女在世）はエリザベス文學の第一期にて、七十九年より一千六百二十五年まで（天正七年より後水尾天皇の寛永二年に至る藤原惺窩、松永貞徳等在世）は其の第二期なり、第二期はスベンスア、シエークスピア、ジョンソン等の盛えし時代なり。通例、世人がエリザベス文

學と特稱してもてはやせる諸傑作は、總じて此の第二期中の作物なり。

さて、第二期の文運の興隆は、一は英國の政治上、社會上の情勢、二には天下の大勢、即ち全歐に於ける學藝復興に原因すると明かなれど、尙子細に考察すれば、其の興隆に至れる國文學上の次第因縁もまた鑿々として指示するを得べし。されば、第二期エリザベス文學の情勢を知悉せんと欲するものは、先づ豫め第一期の騷壇に注意すべきものとす。第一期、即ち第二期に先てる二十年間の諸著作は、スベンスア、シエークスピア、ジョンソン等を生ずるに至りし最近の因縁なること明なればなり。さて此の旨意にて叙説するに當たりては、此の朝の文學を第一期と第二期とに分かつの外に、梨園及び劇の詩（脚本）に關する事を別にして叙説するを便宜とす。蓋し、當朝の文學は其の品類いと豊富にて、律語も、散文も、こちたきたぐひの文學も、洒落なるたぐひの文學も、殆ど皆備はりたれど、秀て、豊なりしは劇壇の諸作なり、現に劇の詩の作家は十をもて數へ、其の傑作のみを擧ぐるも四十餘篇に越えたれば、他の詩文と混じて叙説せんは徒に紛雜を醸さんの恐あり。此の故に此の朝の叙説を分かちて三段とすること左の如し。

第一期 エリザベス文學

一千五百五十九年より
同七十九年まで

第二期 エリザベス文學

一千五百七十九年より
同一千六百廿五年まで

劇壇並びに脚本家

英國劇の起原より一旦劇場
の閉ざるに至りしまで

上に説ける如く、第一期の諸作物は第二期の業因なり、第二期の傑作は偶然に生ぜしにあらざり。第一期に於ける文學は、總て當代の新想念を種子とし、上古期の末に注入せられし諸種の豊かな肥料に育成せられしものなり、而して第二期の文學は、エリザベス時代の文學を一箇の有機體として見るときは、この種子の次第に發生暢達して花を着け、實を結びしに外ならず。まづ第一期中にあらはれし主なる著譯を列擧して、文學の如何に進歩しつゝありしかを示すべし。

第一期の詩人即ち韻語家中の録々たるものは、バックハラスト卿トマス、サックギルとジョール、ガスコインとなり。

サックギルは『治者の鏡』と題したる長篇の物語歌を著して名あり。一千五百三十六年サッセックス州バックハラストにて生まれたり名族の出なり。はじめオックスフォ

ードに修學し、後にケムブリッジに移り、又法學内院に入り、壯うして結婚し、外國に歴遊し、文壇に名を知られ、三十一歳の時にバックハラスト卿となり、多年の間エリザベス女王の重立ちたる顧問となりて政治の樞要に當たり、女王崩じ、ジェームス王即位するに及びては、ドオセットの伯爵に叙せられ、一千六百〇八年に逝りき。其の傑作『治者の鏡』は専ら榮華名譽の浮雲の如く頼み難き由を、英國の史に見えたる多數の悲しむべき實例によりて、證明し、君長の淑徳を奨誘せんとしたる作にて、明かに教誨を旨としたる物語歌の一種なり。この書の價值は文學上よりは寧ろ古記録といふとにあり。はじめボカチオの“Fall of Princes”(リチャード譯)の増補となさん積りにて千五百五十五年の頃より著作に着手し、ウィルヤム、ボルドフィンといふものゝ手にて編輯出版せしが、其の後五十年間に蛇足の作を添ふるものあまたいで來て、近世に傳はれるは甚しき玉石の混淆にて、ふと見ればいづれをサックギルの作とも分きかねれど、學者の定説によれば Induction(緒言)と題したる篇と、ベッキンガムの述懐とは、たしかにサックギルの筆なるべしとぞ。最近の出版に係る『エリザベス文學史』の著者セイントンツペリ氏の如きは『治者の鏡』に載せたるサックギルの物語歌を

評してサリ、ウイヤット等の新詩體の影響を蒙らざる舊格の物語歌とし、且つ、チコーサアとスベンサアとの間に於て英語にて物せられたる最良の詩なり、と稱し、スベンサアの最傑作の幾分は尠くとも此のうちより摸範を得たるならん、と斷言せり。げにヤサックギルの作はスベンサアの作の如くをさく、寓意を旨としたるものなり。サックギルは、右の寓意歌の外に、“Gorboduc”といふ劇をも作りき。

ガスコインの生誕年月は明かならず。假定せられたるによれば、一千五百三十六年に生まれて一千五百七十七年に四十歳餘りにて逝りしものゝ如し。彼れは士爵たりし素封家の子にて、ケムブリッジにて修學し、二たびまでも衆議院の議員となり、外國にも歴遊し、戰場にも臨み、頗る世故人情に通曉せりきと傳へたり。其の作あまたあり、彼れははじめて外國の作を翻案して喜劇を作し、また悲劇をも作しき、と傳へたれど、いかにや。但し、一千五百七十六年に出版せられし「スチールグラス」と題せる諷刺詩は、學者の説によれば、疑ひもなくガスコインの作なるが如し。「スチールグラス」とは鋼鐵鏡の義にて、この作は前代無比の長篇の諷刺詩なり、其の主旨は當代の弊風を諷刺懲戒するにありて、通篇、無韻の律語より成れり。

さて件の二人の外に二位に位すべき詩人尙あまたあり、中にもトマス、チャアチヤード(二五二〇—一六〇四)、ジョール、タアバアギル(一五三〇—一五九四)などは、多少特質ある詩人にして、彼等が作りし寓意歌、短篇の歌、讃歌、戀歌などに見るべきもの尠からず、これらを一纏にしたるもの一千五百七十六年に至りて世にいて、近世までも傳はりてもてはやされたり。“Paradise of Dainty Devices”と題したるもの、是れなり。

當時は諸名家の作を編纂して出版すること流行したりしなり、上文にいへる『治者の鏡』の如きも、其の實は同類の歌を雜纂したる一種の詩集なるが、之れより先き一千五百五十七年にも、リチャード、トッテルといふもの“Tottel's Miscellany”と題する當代名家の詩集を世にいだしき。サリ等の小品は件のトッテルの雜纂によりて後世に傳はれり。按ふに、此等の諸集は、いづれも第二期なる大詩人等に多少の材料を供せしものたるや疑ふべからざるなり。

かく希臘、羅馬の古文學が盛に研究せられしと共に、古書の翻譯もまた頻に行はれしかば、或はこのころを目して翻譯熱の時代と稱す。そも、古代の名著を

翻譯することは、己にヘンリ八世の朝并びにエドワード六世の治世にも行はれたりしが、此の期におよびては殆ど流行のやうになり、詩人にて翻譯に手を染めざりしものは一もなく、此の業に専従せし名家のみにては十二人以上を數ふるに足れり。其のうちやゝぬきいてたるは、フェール、タアバアボル、ゴールチンクなどなり。さればゴアヨル、オボット、ジセロ、デモスセニ、ズなどいふ傑出せる諸家の名作はいふも更なり、院本の如きも、希臘、羅馬の名作として知られたるは、一千五百七十九年以前に、已に幾篇となく翻譯せられき。トマス、フェールのゴアヨルの譯、アーサー、ゴールチンクがオボットの譯などは其の尤なるものにして、二人ともに例の十四行體の詩格を用ひたり。

此の翻譯熱の時代は亦彼の翻譯、狂、古學、狂など稱せられたる時代にして、これに従事せし文人の大半はたゞ流行を追うて漫然と筆を驅りしものなるが故に、希臘語、伊太利語の特質と英國語の特質とを精比することもなく、語法、句法より綴字に至るまで、一に希臘、伊太利の様式を移し、徹頭徹尾、不合理なる直譯の杜撰に陥りしものあまたありき。

さて、これと同時に物語類を愛翫するの念舊日に倍し、此の國の古事譚、傳説等の喜びて讀誦せられしは更にもいはず、當代に起これる政事、社交、宗旨上の種々の珍らしき出來事だに、直に短篇の歌に綴られて、毎週のやうに公にせられ、世人が玩讀の料となりしこと、猶近世の新聞紙、雜誌類のもてはやさるゝが如くなりき。さてかゝる珍事、奇説等を綴りたる歌を總稱して「バラッド」といへりき、按ふに、其の多數は我が近古の「讀賣」の巷説、即ち情死の顛末を綴りたる俗謠などにや似たりし。時俗の物語を嗜好する、かくばかり酷しかりしかば、外國の奇話を翻譯することも次第に盛に行はれ、一千五百六十六年にはウイラム、ベインターといふ者「快樂殿」(The Palace of Pleasure)と表題したる伊太利小話の翻譯集を出版し、次いで翻譯家ターパー、ブルも「哀話集」といふ律語の翻譯を出したり。其の他、同類の翻譯物枚擧するに遑あらず。而して其のころ最も多く入り來たりしは西班牙及び伊太利の物語にて、彼の有名なる「Amadis de Goul」の如き、サンナザロの「アルカデヤ物語」の如き、又は「エシオピヤ物語」の如きも、皆此の砌に輸入せられき。第二期の名作の一に數へられたる士爵フィリップ、シドニの「アーカデヤ物語」の如きは明に、此等物語

を種本として綴られしものなり。

畢竟翻譯のかく熾なりしは、一は俄に注入せられたりし外國思潮の餘波たりしに外ならねど、一は創才ある作家の未だ世に出でずして何事も皆試験の境界にありし故なり。換言すれば、當期の諸翻譯は第二期の諸創作の粗材となり、又は素組となりしものにて、暗に當期の詞人等が、如何なる文體をもて、如何なる思想を、如何さまに表白すべきかを試験しつゝありしとを證するもの也。時人が咀嚼、研究に熱衷したりし證據は、上にいへる古文學の翻譯せられしと同時に、過去の英詩人の傑作も治くもてはやされ、就中、チーサー、リドゲート、ラングランド等の名著の、其の最早摸倣せられざりしにも係らず、苟も詩眼あるもの、争ひて研鑽する所となれりしにも見えたり。第二期の大詩宗 スペンサー の如きも、此等前代詩人の作に負ふ所鮮少なりきとはいふべからざるなり。

之れより先き、ヘンリ八世の治世の頃より **國史編纂** に従事するもの次第に出でたり、一千五百十二年に卒せし ロンドン 市の知事 ロバート・フレイヤン の如き、一千五百四十七年に高齡に達して逝りし ロンドン 市の判事 エドワード・ホール の如きは

はじめて 英吉利國 の **史紀** に着手せし者と稱して當然なるべし。サクソン紀絶えてこのかた正史と稱すべき者無かりしを、彼等つとめて此の缺を補ふべき業に従へり。(爰に英國といふはサクソン、ノーマン、和合後の英國を指す)。素より彼等の主なる目的は仔細綿密に見聞の事蹟を叙記するに在りしかば、措辭行文の上には何等の美妙なる所あるにあらず、且つは事實の眞偽を甄別するに必要なる史學上の炯眼ありしにもあらねば、彼等の叙事中には、謬妄なる叙説と無稽の記事とが間々眞實事の中に混雜したれど、尠くも當期の珍しき出來事と風紀、習俗の明瞭なる説明とは、單へに彼等に據りてのみ知ることを得べし。フレイヤン の著は "The Concordance of Stories" と云ふ、こは『英國全史』とも稱すべきものにて、治く歴代の事蹟を詳叙したり。さて ホール のは ランカスター、ヨーク 兩統の紀と ヘンリ七世 及び ヘンリ八世 の紀と也。ホール は流行習俗を記するに最も力めたり、又總じて フレイヤン に優る所あり、こは、其の學識の彼れよりも一層高かりしに因るなるべし。此の二人につぎて出でたりしは前にいへる トマス・モア なり、其の著 「エドワード五世 並びに其の弟及び リチャード三世 の紀」は當時の史傳中の最なるものなり。

かくて、修史嗜好の漸く盛なるに及びては、舊事蹟の探尋に従ふもの大に増加し、エリザベス朝の第一期にはクラフトン、ストーリー、ホリンシッドなどいふ専門の史家輩出せり。其中尤も名高きはホリンシッドなれど、其の傳は殆ど知るに由なく、其の著として後世に傳はれるは所謂『ホリンシッドの史紀』あるのみ。傳によれば、ホリンシッドと共に『史紀』の編纂に従事せしもの數人あり、其中主なるものは僧ウイリヤム、ハリソンとヂェン、フッカーとフランスス、ボイド、ギルとなり。又前に擧げたるストーリー(ヂェン)の如きも其の幾分を參助しきといふ。さて此の『史紀』の重要な部分は、ホリンシッドが筆に成れるノオマン政略以前の英國史、リチャード、スタニハアストが物せし愛蘭の由來、そを補ひてフッカー、ホリンシッド、スタニハアストの三人が別に物せし該國の紀、ヘクトア、ボイスが著し、蘇國の史をホリンシッド(或はハリソンか)が譯したるもの、及びホリンシッドが綴りたるノオマン政略以降一千五百七十七年までの英國の歴史等なり。此の書は其の同じ年即ち七十七年に世に出でしが、偶々女皇エリザベスの忌諱に觸るゝ所ありしかば、後に其のうちの幾分かを刪りて同八十七年に再版を出だしき。さて此等記傳家の諸著は、概して

眞偽のたしかならぬ事蹟をいと冗繁に記叙したるなれば、考證疊古の念無くて之れを讀めば、平板蕪雜にして頗る心のためまるゝ讀みものなれど、其の當時の國俗の心に多少史的知識の好尚を喚び起こし、且つ間接に愛國の想念を誘致するに與りて効用ありしことは想像するに堪へたり。尠くも此等諸種の傳記が第二期の脚本家マロー、シェイクスピア等の好材料となりしことは事實なり、現にシェイクスピアの傑作の隨一なる『マクベス』の史劇の如きはホリンシッドが譯したるボイスが『蘇國史』に據れること瞭然たり。

かくてまた、翻りて他の方面を觀察すれば、學藝復興して希臘羅馬の古代に關する豊富なる知識の注入せられしと同時に、亞米利加新大陸の發見以來、月に年に頻々たりし洋中の諸發見が媒介となりて、航海通商の道大に開け、隨うて冒險探奇の旅行を千萬里の海外に試ること當時一般の風習となれり。東洋印度會社が政府より特典を得て商權を專にせしも此の頃なり、ホーキンスがブラザル及びギニーに航せしも此のころなり。而して此等冒險者の異郷より歸りしや、前代未聞の奇事怪説を齎し來り、物語を愛玩する時好に投じて、頻に驚くべき紀行を綴り、荒唐無

聳なる傳奇に見えたる神仙妖魔巨魔の外に幾多現實なる怪物を紹介して一世の視聽を駭かしき。例へば北西洋の奇談を詳録したる旅日記は千五百七十九年以前に出で、又千五百八十年にはフロロシア、プレークの徒、多年の驚くべき航海をなし果てゝ恙なく歸り來たり、或は世界周遊の奇談を傳へ、或は西班牙海上の怪異を語りき。而して此等の談の大かたが浮虚謬妄にして信憑すべからざりしにも係らず、大に當代の見聞を啓發し、將に暢發せんとしたりし國俗の精神をますく奮起するに至らしめき。北海、南洋の驚くべき物語を聽きたる當時の國俗が、競うて新聞を渴望せし形跡は第二期の諸著の上に散見せり。シェイクスピアの作中にも當時の感情を反射したりと思はるゝ所しばしばあり、『オセロ』及び『テムベスト』の劇中に見えたるなど、其の例なり。

第一期エリザベス文學の概況は以上の如し。新著作の誘縁となるべきもの斯く豊富なりし時に方り、他方には新舊兩敵の軋轉ますく甚しく、新代の人士は争うて舊教攻撃の著述に従事せり、こゝに於てや、舊教の徒はた之れに答ふるの必要を感ぜしかば、筆を操りて論辯をもつること、此の時より更に一層の昌盛を致し

小冊子の出版の頻繁なること舊日に倍したり。按ふに、當期以前には、總て上流に位せる者は其の作を出版して世に示すことを恥辱とする習なりき、此の故に身分高き徒は、たとへ傑れたる述著をもつし得たるも、概して稿本のまゝに匣底に藏めおきて、只二三の知交にのみ示し、世間に公にせざるをもて見識とする風ありしが、著作熱のかく甚しく成れるにつれて、此の風いつしかに衰へゆき、第二期のはじめに、リ、いでゝ有名なる『ユー・ヒュー・エズ』物語を著はし、滿朝の上臈をめでくつがへらせ、次いで當代の理想の紳士フィリップ、シドニが其の作『アカデヤ』物語を出版して聲譽を一世に擅にせしが、刺撃となり、人々皆競うて其の作を公にせんとし、俄に案を構ふるもあれば、急に舊稿を訂正して世に示さんとするもありき。所詮著作を譽と思ふやうになりしとは、明に第二期に於ける文運隆盛の一縁なり。さかく著述の頻なるに隨うて、互に勝らんと願ふ心も鋭くなりて、競争いと盛なりければ、著書の批評といふこともはじめて起こりき。第二期の章にて説かんとするシドニが『詩辯』の如きは、實に英國に於ける詩文批評の嚆矢なり。

第三章 第二期エリザベス文學

ジョン・リ、——『ユー・ヒー・エズ物語』——フィリップ、シドニ——『アーカデヤ
物語』——批評文の嚆矢——『詩辯』——シドニ以後の批評家

第二期のエリザベス文學はジョン・リ、の『ユー・ヒー・エズ物語』とエドマンド、スペインサ
アの『牧者十二月記』とをもて始まるといふも可なり。此の二書は一千五百七十九
年の出版なり。而して其の翌年と翌々年との間には、フィリップ、シドニが『アーカデヤ
物語』と『詩辯』といふ詩論と出でたり。此等四著のうち、スペインサアのを除けば、餘は
皆散文の作なれど、今俗に謂ふ散文にはあらで、寧ろ謂ふ所の華文に屬すべきもの
なり。まづリ、より説き始めてシドニに及び、さてスペインサア以下を叙すべし。

ジョン・リ、は脚本の作家としても當代の名家の一人なれど、其の後の世に知られ
たるは主に其の奇異なる物語『ユー・ヒー・エズ』の殊なる文致に由りてなり。其の
詳かなる傳は知り難し。一千五百五十四年我が後奈良帝の朝、小野通女の生誕に
先つと五年に生れて、同六十九年にオックスフォードなるマクダレン大學に入り、同七
十三年に學位を得きと傳ふ、されど此の事だに多少揣摩の説たるを免れず。但し
其が『ユー・ヒー・エズ物語』の上篇を一千五百七十九年に著し、其の下篇を其の翌年

John Lyly.

に物せしこと、其のころ齡尙二十五六歳なりしこと、は、ほゞ信すべき事實なる
が如し。『ユー・ヒー・エズ』は古今有數の奇異なる著作なり。其の物語の筋は平
凡といはんよりは、むしろ平板と云ふべき、心たゆまるゝたぐひの事件より成りた
れど、其の一種異様な駢儷的文致、即ち、過巧なる對照と浮靡綺麗なる直喩とは、恰
も當代の好尚に投合して上流社會を振蕩し、僅々六年間に版を重ねること五回に
およびき。其の頃朝廷に出入せし風流男女は、此の書を知らざるを耻辱とし、又其
の名句を誦むるを譽とし、或は殊更に此の物語の過巧なる文致をまねびて談話
し、竟には、ユー・ヒー・エズ言葉といふ一種の名稱をさへに作り出だすに至りき。
按ふに、リ、の殊なる文致は當時の宮中語の反影たるに外ならざるべし、何となれ
ば華麗過巧の弊の、浮靡と矯飾とを喜べりしエリザベス朝の風流男女の舉止風采、
談話及び文章に現れしは、此書のいてし後にあらで、此の書の成りし前にあり。『ユ
ー・ヒー・エズ』物語はリ、が創意に成りきといはんよりも、むしろ當時の殿上の粹入
が理想的言文を實現せるものともいふべし。彼のスコットが小説『モナスタリ』の中
なる一人物、サア、バアシー、シャフトンの如きは頗るよく活けるユー・ヒー・エズの面影

を現はせるものなり。

此の書の上篇は“Euphues, the Anatomy of Wit”と題し下篇は“Euphues and His England”と題したり。ユーフューエズとは主人公の名なり。上篇にては、此の閑雅風流にして伶俐機慧なるアゼンスの貴公子をば、伊太利なるネーブルスに滞留せる者として叙説し、下篇にては、いかりすしそが英吉利島に渡航する道行を語りて、航海中の出来事并びに英國の風俗の叙説に及べり。要するに、此の書の名高きは、主として其の異様な文致に由るなれば、他の修身上の教誨を陳述する便宜によつて綴られたる平板單調なる筋立の如きは、こゝに取りいで言ふべき價值なし。此の作は、一面より觀れば一種の情話なるが如くなれど、他の面より觀れば一種の教訓文の集合なり。『ユーフューエズ』の文章の特質は三あり、一は過巧なる對照にて、二は繁褥なる比喩、三は頭韻法なり。左に其の文例の一斑を擧ぐべし。

“The merchant that travelleth for gain, the husbandman that toileth for increase, the lawyer that pleadeth for gold, the craftsman that seeketh to live by his labour— all these, after they have fattened themselves with sufficient, either take their ease, or

less pain than they were accustomed. Hippomans ceased to run when he had gotten the goal, Hercules to labour when he had gotten the victory; Mercury to pipe when he had cast Argus in a slumber. The ant, though she toil in summer, yet in winter she leaveth to travail. The bee, though she delight to such the fair flower, yet is she at last cloyed with honey. The spider that weaveth the finest thread ceaseth at the last when she has finisheth her web. But in the action and study of the mind (Gentlemen) it is far otherwise, for he that tasteth the sweet of his learning endureth all the sour of labour. He that seeketh the depth of knowledge, is as it were in a Labyrinth, in the which the farther he goeth, the farther he is from the end: or like the bird in the lime-bush, which, the more she striveth to get out, the faster she sticketh in. And certainly it may be said of learning as it was said of Nectar, the drink of the Gods, the which the more it was drunk, the more it would overflow the brim of the cup; neither is it far unlike the stone that groweth in the river of Caria, the which the more it is cut the more it increaseth.

所詮、ユーロホーエズ體の律調は、儼語體のやゝ自由なるものに外ならず、隨うて、其の長所と短所と將た四六體の得失によりて推測することを得べし。

『ユーロホーエズ』につぎて一世を聳動せしものを、士爵フィリップ、シドニが『アーカデヤ物語』となす。

フィリップ、シドニは、一千五百五十四年、ケント州に生れ、十三歳にしてオックスフォードの大學に入り、學生として夙に高き譽れありき。十八歳の時、大學を退きて大陸漫遊の途に上り、佛、獨、伊の諸國を遍歴し、プレトリー、アリストートルの哲學を研究し、ゼニスにて星學と幾何學とを修め、希臘の悲劇、伊太利の短歌を稽査し、さて、二十一歳にして英國に歸り來たりし時には、真に完全なる當代の理想的紳士なりき。其の身は名族の家に生まれ、容貌は閑雅、風采は俊秀、加ふるに、其の爲人、聰明廉潔、仁義を重む、禮讓に厚く、而して勇武人に勝れ、學識はた高遠なりしかば、上は女皇の殊寵を蒙り、下は萬人の愛敬を得て、聲譽一世に高く、二十二歳、公使に任せられて大陸に赴き、新教諸國同盟の大會議に幹旋し、二十九歳にして妻を娶りぬ。また同じ年士爵に叙せられたり。シドニが三十一歳の時、ポーツランド國王の嗣絶えけるが、該國

人はシドニの才徳を慕ふの餘り、之れを推して其の國君たらしめんとを乞ひぬ、されどエリザベス女皇は、當代の寶玉を失はんことを惜しみて許さざりき。其の翌年、今の和蘭地方の新教信者等、西班牙國王の舊教軍に抗して、苦戦す、シドニ傍觀するに忍びずして義軍の一將となりて赴き援ひ、一千五百八十六年十月、ゾトフュンの役重傷を蒙りて陣没す。上下おしなべて痛歎哀惜せざるはなかりき。(時に我が朝正親町天皇の天正十四年、小野通女が二十七の齡を迎へし年に當る。)

シドニが名作『アーカデヤ物語』といふは、彼れが清閑なる別墅にありて自家と其の妹とを慰めん爲めに戯に物せし小説なり。この書『The Countess of Pembroke's Arcadia』は即ちシドロク伯爵夫人と題してシドニが歿後四年にして出版せられしが、程なく八版を重ねエリザベスの御宇より次の朝へかけて沿く上下に玩讀せられき。其の脚色の大體は、當時盛に行はれたりし武俠と戀愛とを眼目とせる例の傳奇の趣向に據りたるにて、半ばは伊太利の小説に倣ひて散文と律語とを相混じたる文致に巧を弄し、なかばは西班牙ぶりの作を摸して田野、山川の景物を叙狀することを旨としたり。左に其の物語の梗概を掲ぐ。

むかし、希臘にアーカデヤといふ國あり、國風、國土の妙なること世界に比ひ無し。野には綠草滋々として數万の牛羊飼はれ、岡には喬木蔚茂して好鳥常へに春を謳ふ。この國の住民は、賤しき牧夫だにも、罪惡といふことを知らず、長き日月はた幸福の連続とぞ見えし。されば近隣の諸邦にては、其の細民は更らにもいはず、侯伯貴紳のうちにも、其の煩擾なる浮華の生涯を棄て、アーカデヤの一農夫となり、花咲く川邊に鳥の聲きく無心の樂みを得てしがなと願ふ者も尠からず。アーカデヤといふ名は無上樂土、安靜、和平などいふ意に用ひられて偏く天下に聞えたり。この國の國王バシリウス Basilius とて、仁君の聞え高く、后ギネシヤ Gynecia また貞淑をもて知られたり。さるほどに或日突然神廟より託宣あり、曰はく、二王女の婚儀より事起りて王と后との身の上ゆゑしき災厄生すべく、且つ國民は兵戰の災禍を蒙るべしと。王乃ち政を部官に授けて自らは后と二王女とを携へて山林に入り、そこに行宮をたて、しばらく謹慎の生を送る。斯くて事無くて數年を経たりけるに、或時のことなりけり。

アーカデヤの隣國の或濱邊にて、漁夫どもが網干などせる折から、思ひがけなく荒磯

に漂着せし若人あり、破船の難に遭へりと思しく、板子にすがりて漂ひ來りけるが、濱邊に助け上げられて人心地つくや、急ぎ人々に向ひ、我が友をも救ひくれよと請ふ。卑しからざる人品なり。仔細を訊すに、おのれの名はミューシドラス、今一人はヒロクリスといひ、二人とも遠國の貴公子にして、諸國を遍歴して冒險の修行をなさんど企て、本國を出でたる航海の途中、風波の爲めに船を破られ、身は一枚の板子にとりつき、難を免れたれど、斷金の友ヒロクリスが生死心もとなし、彼れを救ひたまはば身につけたる財寶こそくく興へん、といふ。漁夫ども心得て數反ばかり小舟を漕ぎ出だしける時、彼方の沖遠く、折れたる大橋にうち乗りて漂ひ來る一人の若人あり、姿の端正にして服裝の華美なるこそ海神の如し。ミューシドラス望み見て、あれこそ我が友ヒロクリスマがひなし、はや、救ひくれよと聲をかけたなり。其の途端おなと沖べに顯はれたる一船あり。異様の装ひは正しく蠻國の賊船にて、この邦の漁民を捕へ歸りて奴隸なさんが爲め折々近海を密航せるものなり。漁夫ども之れを見るや大に怖れ、ヒロクリスをばうち棄て、矢庭に舟を引きもてさりぬ。ミューシドラスはせんすべを知らず、ひたすら友の薄運をうち歎くに、漁夫どもこれ慰めて、隣國アーカデヤに行きてカラランダア Kalander といふ者に助けを請へとなしふ。

かくてカラランダアを尋ねて仔細を語る。カラランダアは親切にして俠骨あるものなれば、心よく引き受け、直ちに船をしつらひて出だしやり、且つ心を盡してミューシ

ラスをもてなす。ミーシドラスは、カラランダアの家において其の消息を待ちける間

ふさ其の一室に飾りある國王一家の肖像に目をとめ、あれはいかなる人々ぞと問ふ。カラランダア、あれは國王陛下、皇后陛下及び二王女殿下にましますとて、今は神託によりて林中に謹慎の由を語る。ミーシドラス且つ驚き且つ嘆じ、いかで一度はかゝる美王女を見てしがなと思ふ。斯くて四方八方の物語の末、主人カラランダアの子クリトフォン Clitophon の當時捕はれてさる遠國にありさきくや、ミーシドラスは心大に動きいて恢復の軍勢を催したまへ、おのれ今度の恩義の報いに身をすて、御子息をつれ歸らんといふ。

かくて評議定まりてカラランダアは軍兵數百を集めて、彼の國に押し渡り、ミーシドラスを先鋒として屢々敵勢と戦ひけるが、

こなたは小勢なるが上に土地不案内にて、動もすれば浮足となり、形勢敗北と見えければ、ミーシドラスは陣頭に躍りいで、あはれそなたの軍中にて我れと思はん勇士あらば、それがしと一騎打の決戦あれ、勝負によりてクリトフォンを申し受けん、と呼はりけるに、敵も異存なく、やがて一人の大將馬を進めて近づき来る。直ちに矛を交へ、秘術を盡して戦ふこと數十合、勝敗未だ決せず、尙も烈しく斬り結びしが、ミーシドラスは兜を打ち落され、大童になりて奮闘するうち、敵は遽かに馬より飛び下り、めづらしや兄上と劍を

棄て、ミーシドラスが前に跪く。「こは何事ぞ」とよく見ればピロクリスなりけり。修羅の戦闘はこゝに再會の縁となり、兩族は直ちに和睦し、クリトフォンは縦され、ミーシドラスはピロクリスを拉して、皆々アーカテヤに歸りぬ。

さる程に二人の公子は、カラランダアの家に止まりて、尙ほ幾日かを過しけるに、或日ピロクリスはミーシドラスへ宛て一封の書を遺して、出て行きたるまゝ歸らず。

件の書には、「おのれこのほゞより深き物思ひにかゝり、百万苦慮すれどもせんすべを知らず、姑くアーカテヤの地を去りて雲水に心を慰めんを欲すとあり。ミーシドラスは人を馳せて追跡すれども得ず。かくて或時林中を逍遙しけるに、思ひがけなくピロクリスを見かけたり。被髪肩を越え、金甲して長劍を帯びたる打扮宛然たる女丈夫なり。ミーシドラス仔細を訊せば、曰はく、我れカラランダアの家において王女フィロクリヤ Philoclea の畫像を見て戀々の情禁じがたく、遂に姿をかへ、女勇國の長の破船に遭ひて漂着せるものと稱して王の行宮を訪ひ、今やかしこに逗留中なり。苦しからずば御身も我と共に行宮に來れ」とて

ミーシドラスを伴ひて行宮に歸り、知己の一牧人なりとて、ミーシドラスを王に介したり。ミーシドラスは王に謁し、やがて王女を見けるに、其の美色想像以上なり、就中、パメラ姫 Pamela の美しさに魂を奪はれたり。

二人は折を見合せて、フィロクリヤ、パメラの二王女に己れの素性經歷を語りて切なる意

を通しけるに、二王女はやさしくも同情して末を契りしかど、今は一家謹慎中にあるが故に公けに王に請ひて婚を定むる能はず。

こゝにアーカデヤに程近くアーガスArgusといふ國あり。女王セクロピヤCeoropea攝政して國威頗る振へり。セクロピヤはアーカデヤ王の姉なるが、其の太子Amphibiusアンファイヤラスの爲めに使を送りて王女フィロクリヤを聘せんと請ふ。されども王は神託を守りてこれを許さざりしかば、女王大に憤り、密かに兵を送りてアーカデヤの深林を襲ひ二女王とピロクリスとを捕へ歸り、大湖の中央に建てたる石室の中に幽閉す。

かくて女王は日毎に石室を訪ひ、二姫に向ひて意に従はしめんとすれども肯かず。さる程にアーカデヤ王は師を出だしてアルガスを攻むること數回に及べども、克つこと能はず。希臘諸邦の勇士聞き傳へて大にアルガスの非行を憎み、アーカデヤの軍に加勢する者日夜相續ぎければ、こゝに再び大激戦となり、勝敗久しく決せざりき。この間女王は或は賺し、或は嚇し、手を盡して二姫に迫まれども、二姫竟にきかざりしかば、女王怒り、面前にて一人づゝ殘殺せんと決心す。然るに太子アンファイヤラス義心深く、女王を諫めてこれを縦さんと請ふ。女王はこれを縦さざといふ。かくて母子大に争ひ、相猜忌するに至りし結果、母は遂に城砦の高樓より身を投下て自殺し、太子も自ら劍に伏して斃れけり。かゝりしかば大亂にはかに局を結び、三人はアーカデヤの軍に迎へら

れて國に歸り、やがてミュシドラスはバメラ姫さ、ピロクリスはフィロクリヤ姫さめでた
く婚を結ぶに至る。云々。

此の書は、已に諸批判家が評したるが如く、當代の面影を映じたるものといはんよりは、むしろ作家が理想と性癖とを反射したるものといふべく、隨うて、人物も、事件も、寫實的といはんよりは、寧ろ理想的といふべきもの多し。彼れは其の『詩辯』に於て韻語をば、詩の裝飾たるに過ぎずと貶せしほどありて、自らは散文の異端に陥りたるかの觀あり。されば其の行文は頗る巧緻流麗にして、間々『ユーヒューエズ』風の濃厚浮織の弊に薰染したれど、流石に斬新なる警句と秀句とに富みて宛然一篇の散文詩をなせり、後に出でたりし、詩人等が深く此の書を受讀して、其の想像の源泉をこゝに求めたりしこと故ありといふべし。シェイクスピアの如きも、尠くも其の女性に關する想像と概念とは、或はシドニより得來たりし所尠からざりしならん、彼れは『アーカデヤ』を精讀したりし一人なりと傳へられたればなり。フィリップシドニは、韻語の詩人としても多少の譽無きにあらねど、かゝる略史の中に特書すべき程にもあらねば、今は略きて、彼れが第二の名著のことに移るべし。

著作の月旦の此の期に萌芽せしことは前にもいひたるが、**詩文の批判**といふことをはじめしものは、實にフィリップ、シドニなり。そもくエリザベス朝の第二期は清淨教徒と稱する一派の宗徒の漸く勢力を逞うせんとしたりし時なり。彼等は社會に漲れる浮靡淫逸の弊習に憤を發し、倫理、大道の廢れたるを慨するのあまり、漸く他の極端に走り、總じて虚儀逸樂を惡むこと蛇蝎の如く、殊に詞客、文人を憎みて弊害の源と做し、天下の遊民と詆り、國家の毛蟲と詈り、罵辱至らざるなし。シドニス道の爲めに黙止するを得ずして、竟に一篇の解嘲を物しき、有名なる“The Defence of Poetry”と云ふ詩論是れなり。『詩辨』若しくは『論詩辨妄』などいふ義なり。シドニが此の篇に論ずる所は詩と道義との關係なり。彼れは反覆して、想像的文學(詩歌、小説)の讀者に與ふる悅樂は、單に知識を裨益するのみにとまらで、道義の念を修練するにも大なる効用ありといふとを證せんと力めたり。こゝに其の一節を譯出して當時の論文體の片影を示さん。

夫れ詩歌は諸學藝の最古なるもの、諸學藝の祖なり、あらゆる學藝は皆詩歌を源頭とす。其の普遍なるは、學人、賢士も未だこれを棄つる能はず、野蠻蒙昧も曾てこれを缺くことなきを見て知るべし。羅馬人はこれを尊んで豫言、神託と呼び、希臘の人は更らにあが

めて創作、神技と稱せりき。按ずるに、創作、神技の名こそ頗る其の實に近けれ、何となれば他の學藝は或る事物の中に自家を定着し、事物を源として自家を生ず、然るに特り詩人に至りては、初めより自家の天地を創作するが故に、事物の爲めに思想を作らずして、思想の爲めに事物を設くる觀あり。且つや詩歌の録する所には、些の醜惡なし、其の結果はひさへに善を勸め、意を悦ばしむ。宗教上の本義によるも詩歌は人智の所作中の上乘にして、其の價值實かに歴史を凌ぐ、而して其の教化力に至りては哲學に優ること万々なり。彼の清淨なる聖典の全部は詩的描寫を以て滿されたり、救世主基督すらも詩的英華を利用し給へるにあらずや。詩歌は其の如何なる種類たるを問はず、皆尊重すべく、皆讚美すべし。由是觀之、戦功ある勇將に與ふべき名譽の桂冠は宜しくこれを殊功ある詩人にも捧ぐべきなり。これ予が斷つて誤り無しとする所。云々。

此の書に論じたる、詩の効用に關する説の當否は兎も角もあれ、此の書いで、後ユ・ヒューエズ風の過巧綺麗なる文體の次第に廢棄せらるゝに至りしとは事實なり。シドニの文體は此の書に於て一段の進境を現じ、流石にいまだ其の華麗の弊を全脱したりとはいふべからざれど、また彼の『アカデヤ』風の纖巧なる筆にあらざ、明かに前の文致の非なりしことを自認したりしに似たり。總じてシドニの文章は、國語の純正といふ點に於て、十六世紀中他の作家のに優りたり。加ふるに、詞藻豊

富にして變化多く、感興盡くるなきの概あり。たゞ時としては章句の冗長に流れたるを憾とすべきのみ。

シドニにつぎて批評を物せしはウイリヤム、ウヰップなり、其の著は『英詩論』と題したり。さてまた一千五百八十九年にはジョージ、ボッテンハム(一五三二?—一五九〇)といふ者更に一大篇を著して仔細に作詩の法を説けり、『英詩之法』と題したる、是れなり。しかれども、此等の批評は、第二期の大詩人等に直接の効用ありしものとは信ずべからず、何となれば此等批評家中に最も卓越したりしフィリップ、シドニの詩論すらも、第二期の諸傑作、就中、シェイクスピア、マロー等の傑作をば奨励、誘致すべき性質のものにはあらで、むしろ妨止すべき性質のものなればなり。例へば、シドニは彼の劇に於ける三同(三同とは作劇學上の科語、時々の説を主張し、加之、悲劇と喜劇との混淆を非としたりき。されば若し第二期の脚本家にしてシドニが詩論にしたがひしならば、彼のエリザベス劇の榮光と稱せられたるマローが『フォオスタス』も、シェイクスピアの『ハムレット』も、乃至ウエプスターが傑作『マルロの公爵夫人』も、フォオドが名作『プロクン、ハート』も、到底世に出づるに至らざりしなるべし。

大批評家の聲が眠れる詩の神を喚び醒ますと無きにしもあらぬものから、マロー、シェイクスピア等の傑作は、詩論の庇によりて生まれざりしこと志るけし。

第四章 エドマンド、スペンサー

其の出世前——『牧羊十二月記』——其の生涯——其の著作——『神女王』の特質及び寓意——スペンサーの特长——『神女王』の梗概——其の律格

第二期のエリザベス朝の詩歌はスペンサーの『牧羊十二月記』(“Shepherd's Calendar”)にはじまる由は、已に上にいへり。『牧羊十二月記』は、實にスペンサーの出世作なりと共に、所謂エリザ朝文學の發端なり。デュッフレ、チョーサー歿してよりこゝに百七十餘年、其の間幾多の詩文人、若干の新詞句を聯ねて、おのがじ、詩想を開拓せしが、其の功果未だ見るべきに至らざりしに、スペンサーが『十二月記』この際に出で、大に人意を強うしたりき。詩眼高きは、早くもこれによりて、作者が非凡なる天才を認めたりしならんが、而も僅々二十年間(十二月記出で、より作者の歿せしまでの間)に於て、天下を驚倒すべき詩界の新天地がこの作者の手に開かれんとは思ひもかけざりしならん。

エドマンド・スペンサーが實傳はたゞ微かに知られたるのみ。最近の推定を據とせんに、其の生誕は一千五百五十二年、我が後奈良天皇の朝、藤原惺窩が生誕に先つこと九年にして、舊家ながらに頗る零落せる家に生れたりき。而してそのケムブリッジなるヘムブローク院ホムブルックに給費生となりて入りしは、按ふに一千五百六十九年なりしならん、但し、其のケムブリッジ大學に在りし間の經歷は、揣摩臆斷の説の外には、知るに由なし。只其の彼處かしこにありしこと七年なりしことと、一千五百七十三年に卒業してパチェリアの學位を得更に三年を経てマスタアの學位を得しとは、蓋し、正確の事實なるべし。ケムブリッジを退きて後は北方に趣き、其の親友の間に寄居して一二年を過ごし、一佳人に懸想せし事と、此の際其の處女作『十二月記』の著作に着手せし事とは、ほゞ信ずるに足る由あり。

『十二月記』は作者が抒情の作たること勿論にして、就中、心を籠めたるは新舊兩教を比較したるあたり、并びに教師が慈悲善根を描けるあたりなるべく、而して當篇の主人公たる牧羊者コリン、クラウトは作者の影なるべく、又女主人公ロザリンドといふは明かに作者が意中の人なるべし。さて『十二月記』は著者をして立ど

ころに一世に名を成さしめければ、彼れは一千五百七十八年の末ごろ、ロンドンロンドンの都門に歸り來り、其の友ガナリエル、ハーゼーの紹介にて、シドニ並びにリースタアに面會し、一躍して直ちに最上流の文壇と政事界とに出入することを得しなるべし。『十二月記』の公にせられしは一千五百七十九年なり、E. K. と署名したる彼れが友友(本名 Edward Kirke)は之れを校訂して出版しき。ケムブリッジを去りて後の事蹟は、其のほのかなるだに、ひとり E. K. が記しおきたるに據りてのみ知るとを得。其の傑作『神女王』の考案に着手せしも、按ふに此の時の前後なるべし。

かくて後、一千五百八十年にいたりて、時の權家ウルトンのクレー卿クレイに從ひて愛蘭アイルランドに赴き、しばらくは其の秘書官たりき。爾後四五年間の履歴は頗る明確ならざるどころあり、されど、尠くとも、おひ／＼に登用せられて種々の職に就き、竟にコオク州なるキルコルマンといふ莊園を女皇エリザベスより賜はりて其の城主となりし事などは事實なるが如し。『神女王』のはじめ三卷は此の幽邃閑雅なる山光水色のうちにて物せられき、而して著者は之れを其の心友ウオルター、ローリーのすゝめにまかせて、一千五百八十九年の十二月に出版し、女皇エリザベスの覽に供へきと

い。我が朝にては豊臣秀吉。此の際スペインサアが著作せしは、尙外にも夥多ありしが、それらは概して短篇の歌なるを、一千五百九十一年、一篇に合綴して世にいだしきと聞えたれど、今は傳はらず。又一千五百九十四年には妻を迎へきと傳へたれど、其の姓名すらも定かならず、或はエリザベスと呼びきともいふ。翌年、また種々の作あり、其の多數は戀愛及び結婚に關したる歌なり、其のうち最も名高きは“Epithalamium.”と“Colin Clout's Come Home Again.”となり。同じ年『神女王』の續篇第四、第五、第六の巻を出版しき。篇中、エリザベス女皇の徳を頌したるくだり著かりければ、女皇勅して年金五十磅を賜ひきといふ、是れスペインサアが再度英國に來遊せし時の事なり。同じころ、別に數篇の短歌を物しき、ウースタア卿の女等が結婚を賀せし『プロサラミオン』并びに『戀と美との頌』などなり。件の頌のうち、二篇は壯年の作にて、他の二篇は當年の作なり、而して後者は伊のペトラルクぶりの高絶幽玄なる戀愛の旨をば歌ひたるものなり。

スペインサアの晩年はいたましましき末路の一例なり。彼れは一千五百九十八年に起こりし愛蘭の暴動の爲に其の財寶を掠奪せられ、剩へ其の愛兒の一人を其の邸宅と共に焼き失ひ、倉皇として亂を避けて英國に逃れけるが、それより不幸ひきつゞき、次第に零落して、其の翌年の一月に空しくなりけり。或は飢ゑて死にき、ともいへれど、疑ふらくは、さまでの落魄にては非ざりしならん、たゞし、薄運窮困の間に其の生を終へしとは疑ふべからず。この窮迫の末年に、彼れは散文にて“View of the Present State of Ireland”『愛蘭土の現勢』と題せる時勢觀をもつしき、愛蘭土の特質と時勢とに通ぜずして讀まんはをしきものなり」と一學者は評したり。スペインサアが遺骸は、其の遺言によりて、ウエストミンスターなるチャーサアが墓のほとりに埋葬せられて、今も尙五大詩宗の墳墓の一として崇敬せらる。

評家或はスペインサアを稱して詩人の詩人といふ、さるは管に詩人中の醇粹なるものといふ意味を含みたるのみにはあらで、其の詩人輩にもてはやさるゝことの甚深なるを稱せるなりとも見るべし。後の詩人中、ブラウンまたはフレッチャアなどは甘んじて其の末弟子と自稱し、クリーリーは幼時スペインサアの作を讀みて詩人とならざるを得ざるに至りきと語り、グレイは作詩の前必ずスペインサアを誦するを例とすといひ、ドライデンは彼れを先生と尊稱し、ミルトンは彼れを中古の賢人スコ

イタス、アキナス等にも優りたる賢者なりと稱しき。其の他、トムソン、ウオヅチオス、バイロン、シユリ、キーツなど、苟も後の名家として知られたる詩人にして多少スベソシアが詩脈を傳承せざるものなし。蓋し其の飄逸にして靈妙、豊富にして優秀なる想像が永久に詩思を鼓吹するの力を具へたればなるべし。

高遠なる想像と精巧なる詩法とを以て立地に盛名を博し得たる『十二月記』の靈妙は更らにもいはじ、『Epithalamium』の典麗なる『四の頌』の幽妙なる、いづれもスベソシアが壯時の傑作として優かに玩賞するの値あり、而もこゝに一々に之れを細説する餘地なければ、今はすべてこれを除きて、ひとり最も人口に膾炙したる(但し玩讀せらるゝこと)のいと稀なる『神女王』のみを取りいで、其のあらましの結構を語り、且つ其の特質を評するをもて足れりとすべし。彼の作は、或方面より見れば『西遊記』に酷似し、又或意味より見れば『八犬傳』にも似て、我が國の讀者にとりては一種の興味あるべしと思はるればなり。

『神女王』は所謂譬喩詩(寓意譚)にて、其の着想に表裏の二面あり。其の一面を見れば作者みづからも明言せる如く、體式をホアマ、グアナル、アリオスト、タッ

ソ、等の叙事詩に取りて、中古任侠の勳爵士が氣高く、勇ましく、且つ風流なる、伏邪挫強の功績と太古希臘の鬼神譚とを巧に混和して叙述したる、荒唐奇怪なる叙事詩たるに外ならねど、更らに他の一面を見れば、事々物々に悉く隱微なる寓意ありて、人物も、事件も、所詮は、希臘の古哲學と當時の神學の旨とを祖としたる、一種の倫理説を有形にしたるものに外ならず、具にいへば、人の醜徳と淑徳との目に見えぬ軋轢を傳奇風に寫したるものなり。即ち種々の醜徳と淑徳とに擬したる人物、禽獸、草木等が此の物語の緯となり、人間の迷妄、顛倒、正覺、成道の事蹟が、戰國武俠の目ざましき手柄話に作り做されて、一篇の經となれるなり。總體の結構は、ほと『西遊記』の趣なり。

或は曰ふ、スベソシアは當時公私の道德の甚しく頽廢せるを慨して、此の雄大なる譬喩詩を物したり、其の意古賢人の教旨を俗解し、且つ之れを有形の摸範的人物に作り做して、洽く世俗を教化せんと欲せしに在りと。げに、著者の本願の教訓誨導に在りしは明かなり、何となれば『神女王』の緒言、兼、發端とも見做すべき(其の友、ローリーへあてたる)書面の中に、著者みづからも明言して曰はく、此の書の大體の目的

は温雅貞淑の徳に訓練せる高上の人即ち士君子の風を涵養するにあり」と。又曰はく「予は未だ國王たらざりしころのアーサー公アーサーは英詩人のまばく題目とすの理想的英傑にて彼等のアーサーアを重ずるは我國の戯作者が義をもて義烈の士の本體となし、且つ彼れをアーサーを崇敬するとおなじ趣なりを代表せしめたり、蓋し此の徳は、アリストートル并びに其の他の諸家の説によるに、衆徳中の完全なるものにて、悉く他の徳を具足せるものなればなり。按ずるに、センスは、或は最大義の仁に近し、衆徳の會、人君の徳なり。スベンサーはかかるが故に、全篇の叙事中には、件の淑徳に適ふべきアーサーの事業を叙し、さて別に十二人の武俠を作りて十二の淑徳を代表せしめたり、そは物語りの筋に變化あらせんが爲なり」と。

按ふに、スベンサーが倫理、道德の旨は、重にアリストートルとアリストートルとに由りたる明なるものから、終始もつばらに彼等の説に據れるにはあらで、當時の神學の旨をも、自家が宗教上の觀念をも、ほしいまゝに加味して、一種の新倫理主義を現じたり。されば所謂十二の淑徳の一つづつを代表せる各武俠は、いづれも有漏の人間界を脱して無漏の天上界に上らんと力むる正眞の人間の當に具ふべき淑徳を、尠くとも一つほどは、十分に備へたるものから、尙ほそれのみにては幾分の闕けたる所ありと做し、孰れも他の神聖なる冥助を得たる後に初めて正覺に達し、天上に到るべき者なりと做せり。而して著者は此の冥助の大部分を與ふる者をアーサー公ア公其の人と作りなし、尙其の足らざるを補ふ者を信、望、慈といふ超自然の三姉妹なりとなせり。アーサーは著者の案に依れば、神明の靈徳を代表せる神國の女皇クローリヤナ(榮光)の配たるべき明君にて、前にも、云へる如く、人間に於ける無上の偉徳を代表せり。即ち、十二人の武俠は毎卷の主人公にて、アーサーは全篇の主人公、所謂中央主人公なり。譬へば、アーサーは『八犬傳』に於ける里見義實の如く、十二の武俠は八犬士の如し。スベンサーの作の曲亭のに似たるは此れのみにはあらず。彼れは自白してアリストートルの旨に據ると稱しながら、自家の觀念を加へては

しいまゝに十二の美德を分別したる、曲亭が孔孟を祖述せるが如く見まながら、其の實は頗る通俗なる八行の義解を根柢としたると、恰も同工なり。

スペンサーは『神女王』の全篇を十二卷に分かちて、篇毎に章を設くること十二、目ざましき勳功を叙せること都合十二回、以て十二の淑徳を彰顯せん、の心組なりけるが、纔に其のうちの六卷と斷篇二章とのみを作して逝りしゆゑ、残れる七箇の淑徳は果して何々を指したるにか、今は明かに知るに由なし。たゞし、第一卷より第六卷迄に見えたるものは、作者みづからも緒言中に説明したるとゆゑ、いと／＼明白なり。即ち、第一卷の主人公となれる赤十字の武士セント、ウォールは二心無き敬神の誠 (Holiness) を代表し、第二卷なる士爵ガイオンは過不及無き肉欲の節制即ち宜といふ徳 (Temperance) を、第三卷以下なるアットマーチス、カムベル並次にトリヤモンド、アーテガル及びカリドーアは各々清淨 (Chastity) 友誼 (Friendship) 公正 (Justice) 禮義 (Courtesy) の徳を代表せり。第七卷は只其の緒言にやと思はるゝ、變り易さを歌ひたる斷篇二章を留めたるのみなれば、本文の趣意は知る由なけれど、諸批評家の推察したる所によれば、多分貞 (Constancy) を描かんとしたるなるべし。

さて、總じて本篇にて神、仙國といひ、神、仙、女王などいへる神、仙の義は、精神又は虚靈の義にて、所謂神、仙國は天上の圓滿樂土を表し、神、女王は絶對の神徳、無等無邊の榮光を表したり。又此の神、女王に奉事せる者としたる十二人の武俠は、上にもいへる如く、此の靈境に到るに必要な諸徳にて、誠は主に人間の靈性に關したり、其の神明に對して忠實無二なる所以也。また宜の徳は主に人の肉體に關したり、其の肉體の樂慾を節制して神の道にかなふ所以なり。清淨と友誼 (或は信) とも譯すべしとの二徳は清淨潔白なる男、女間の關係を維持する所以なり。而して清淨はをさ／＼純清なる戀愛を代表し、友誼 (信) は男と男との堅固なる親睦を代表せり。又其の次なる公正とは大義公道を重ざるの徳なり。按ふに、愛の能く裁斷せざるところ公道能く之れを裁斷すべしとなせるにやあらん。清淨と友誼とは愛の變相なり。公正は、按ふに、最も廣き意に用ふる義の意に近かるべし。以上五箇の美德は人と人との交際に缺くべからざるものなり。さて、第六の禮讓は、重に外客即ち初見の人に對して懇切篤實なるを旨とする徳なるが如し、時としては、俗に謂ふ深切の義に外ならぬものと見ゆることもあり。第七の貞は、節又は操の義に通へり。

志の變滄せざるをいふ。要するに、我が曲亭の『八犬傳』に物したる八徳も非科學的分類なれど、スペインサアのも頗る粗雜なる分けかたなり、倫理を説きたるものとし、ては、二者共に精到明確とはいひがたけれど、それは固より其の作の眞價には關せざることなり、曲亭の妙も、スペインサアの妙も、寓意の外にあればなり。而してスペインサアは、寓意の周到に貫徹して、譬喩のうるさきまでに精細綿密なると、想像の飄逸なると、風調の靈妙なるとによりて、復に曲亭に勝り、曲亭は、其の敘事の結構貫透して而も複雑豊富なると、性情を描くことの巧なるとによりて、やゝスペインサアの上にいであり。但し、二家の作は其の實氷炭の如く相異なりたれば、かく比較するはなかく、に失當の沙汰なるべし。

『神女王』の第一卷第一章は、突如として赤十字の武士が馬にまたがり、佳人を従へ、冒險の旅途に上れる光景を描寫して端を發きたり。されど此の物語の發端は、別に彼のローリーへの書面中に物したり。其の概要左の如し。

神仙國にコロリヤナ(榮光)と呼ばれたまふ神仙女皇おはして、年毎に一たび、十二日間の盛大なる祝祭を執行し、諸司百官をもてなしたまふと例なりき。全國の摺紳男女、とごとく風關にまゐりあつまりて、歌舞宴遊しき。或年、祝祭の將に開かれんとするや、

いさ鄙びたる服裝せる男、憚る色もなく、突然と女皇の御前に來て、敬禮し、願はくは此たびの祝典中に要求せらるべき冒險の事業あらば、某におほせつけられたし」と乞ひけり。百官はいふも更なり、女皇も此の男の姿かたちのいと賤しげなるを見て、一たびは驚き怪しまれけれど、かゝる請願をゆるすこと此の大典の恒例なりければ、假に其が乞をうけひきて、遙かなる末座に着かしめられき。

程もなく、濃き皂色の喪服被て、乳白の驢にのれる美しき乙女、片手には鎗を提げ、片手には神明より傳はれる貴き甲冑を荷ひたる一頭の駿馬を牽ける矮軀の奴を將て、此の席に入り來りぬ。此の乙女は、或王國の公主にて、其の名を壹姫(Uta)と呼べり。(按ずるに、ユーナとは單一の義、眞を代表す、眞實は唯一にして不二なればなり)。姫が故國にはおそろしき惡龍住みて、全國を荒らし、刺へ、姫が父母なる國王と皇后とをさらへて、黃銅の塔のうちにおしこめ、加之、魔術もて繋ぎとめければ、姫は悲しき遺るかたなく、本國をぬけいで、此の災厄を救はん義烈の士には、姫と王國のなかばをさらせんといふ。父王の吩咐を齎らして、諸國をさまよひし末、今この風關に來たりしなりけり。(案ずるに、惡龍は惡魔を代表し、國王夫婦は人間の血統の祖を代表せるなり、即ち、アダムミイヴさに比したり)。

さるほどに、姫が其のこしかたを語りて、神仙女皇に哀訴せるを以前の鄙しげなる男打聞き、席を進み、願はくは某をして其の厄を救ふ大任に當たらしめたまへ」と乞ひけり。壹姫も、神女王も、あまりのこまにおぼつかながりて、頓にはえも答へず、やがて壹姫は馬

に荷はせてもて來し甲冑を示していふ、此の貴き甲冑のいとよく其の身に適はぬ人は、決して此のたびの大勳を奏し得ずとなん、御身よく此の物の具を着し得るか」と。鄙しき男おめたる色もなく立寄りて、件の甲冑を被けるに、さながら此の人の爲に製られけるよと思ふほごに適ひけり。さて裝成りて立ちたる姿を見れば、威儀凛然といかめしく、殆ど別人を見るが如くなりき。されば神女王は即座に士の爵を賜ひぬ。此の武士は其が胸甲と銀の楯とに赤き十字の紋章を着けたりければ、赤十字の武士、さこそは呼ばれけれ、セント、ジョール、ジサイ、いふ尊き武士は是れなり。

と。これ『神女王』全傳の發端なり。案ずるに、赤十字の武士に、上にいへる如く、誠心といふ徳を代表させて、眞(壹姬)に事ふる者としたるは根本の趣向なれど、此の『神女王』の寓意はひとり此の根本の譬喩にのみとまらで、往々二重にも三重にもなりたれば、毎に他の寓意あるを忘るべからず。そもくセント、ジョール、ジサイといふは英吉利國の守護尊者なり、かるが故に彼れはスペインサアの時代に於ける英國の國教信徒(新教)をも代表せり。此の方面より觀れば、壹姬もまた眞を代表すると同時に眞正の宗教を代表せり。要するに『神女王』の根本の結構は(就中、第一卷の脚色は)迷悟の大争闘を有形にしたる精神的譬喩詩たるに外ならぬものから、其の寓意は

動もすれば複雑多様になりて、多少狹義に謂ふ嘲世諷俗の旨味をも帶び、當時現存の人物をも捉らへ來て篇中の人物に擬したる處もあり、又は宗旨上、政治上の事件を取りて隱顯の間にそをほのめかしたる處もあり。即ち、比喩は往々二重、三重となれることあり、個人的、政治兼、宗、旨、的、倫、理、的、是れなり。個人的とは、神仙女王クロリヤナを時の英國女皇エリザベスに比したるが如き、使魔道人を西班牙王フィリッポ二世に比したるが如き、傲慢を法皇の暴力に比したるが如き、公の徳の武士アーテガルを著者が恩人グレー卿に比したるが如き、又は貳姬(妖婦)を蘇國女皇メリに比したるがごときをいひ、政治兼、宗、旨、的、とは赤十字の武士の行爲をもて暗に英國教會の經歷を叙したるが如きをいひ、倫理的とは根本の哲理的結構をいふ。作者が此の雜駁錯交せる譬喩を如意周細に料理したる技倆は眞に駭くに堪へたりといへども、其の譬喩の彌が上に重疊して讀者をして取舍分別に困せしめたるは、諸家の已に難じたるが如く、なかくに厭ふべきなり。加ふるに、此の牽強なる譬喩の爲に、物語の筋は動もすれば離れくになり、中央主人公たるアーサアの事蹟は殆ど忘れんばかりになりて、各卷の聯絡いとくおぼつかなきのみにあらず、女丈

夫アリトマーチスのいづるに及びては、多少の波瀾はありながら尙全體の上よりいへば、恰も『西遊記』を讀める時にひとしく、妖怪、魔術家、魑魅、魍魎、戰闘、殺傷、怪異、靈驗、冒險、災厄などの同じやうなる筋のみ重なりて、心おのづからたゆまるゝに、最後には主人公が必ず勝つと定まりたる、『西遊記』『八犬傳』の例におなじければ、ひとへに筋を主として讀む者にだにをかしからず。かるが故に事件を主眼としたる叙事詩としては、上乘の作と稱すべからざること、勿論なり、脈絡貫透といふ點よりいふも、此の書『八犬傳』などに劣るべし。而もなほホーアをして、スベンサアが作にはよく少年を誘ふ偉力あると共にまた老人を誘ふ魔力ありといはしめ、且つアーノルドをして、一たび此の書を手にするれば、巻を終るまで捨つる能はずといはしめしものは何ぞや。換言すれば、スベンサアの**特長**は那邊に在るぞ。

按ふに、『神女王』の價值は、事件の結構にもあらず、教訓の趣向にもあらず、人物の性情を剖析して徹に入り眞に逼れるところにもあらず、はた其の譬喩の渾然として周到なるところにもあざざるべし。それらは、寧ろ一步を誤らば、無味乾燥なる寓意譚を作り、若しくは荒唐奇怪なる傳奇類を作るの緣たらん。スベンサアの卓然と

凡詩人の上に傑出する所以は、其の悠然として俗に超絶し、其の物語の皮膚の上こそ間々當世の人物と事件とを諷刺したれ、一たび其の靈機の熟し、神興の來たるや、飄然として幽玄なる理想を父母とし、實を脱し、虚に遊び、無を有とし、幽を明とし、宛然として出世間の妙境に達したる處にある也。彼れは語をもて、かたがひの抽象を畫くに妙を得たり、古人が彼れを評して、詩人中のルーベンスといへるは、適評なり。グッアン氏論じて曰はく、スベンサアが教訓を旨としながら尙ほよく好詩篇を成すを得たりしは、彼れが天才に二特質あるに因る。曰はく、無形の美を享樂するの力、曰はく、可憐高雅なる女性の美を悦ぶの心と。げにや、スベンサアにして此の二特質なく、ひとへに教訓を重ずること古今の俗作家の如くなりせば、『神女王』は一種の勸懲譚たるにとゞまり、詩としては殆ど見るに足るの價值なきものとなりしならん、彼れが嚴格に過ぎたる道念は美感を滅却して餘あるべければなり。然るに、スベンサアの熱愛せし善は、アレトイぶりなるアイデア理想界の善にして、本來美と同體のものなりしが故に、その教訓の行趣もおのづから乾燥ならざるを得たり。約言すれば、彼れはアレトイのアイデア靈想を默會して、それを具象的に書きいだしきとも評すべし。

所詮、スペインサアは、高遠なる夢を語る者なり、彼れは自家の理想を父母として一の夢幻國を生みいだしき。彼れの想像力の幽にして玄なるや、日進月化して膨脹擴充せるエリザベス英國の目ざましき現象にすらもあきたる能はで、別に理想の新天地を製り、飄逸として夢幻の境に遊びたりき。若し専ら理想の世界に逍遙するを詩人の本領とせば、スペインサアの如きは或は詩人の表極に近き者ならん。クレイク嘗てスペインサアを評して曰はく

「よし彼れを稱して詩人の最大なるものといはざるも、吾人は尙彼れの作を稱して諸の詩歌中の最も詩歌的なるものといふを得べし。他の詩人は、總べて詩人たるの資格の外に他の性格をも兼ね具へて、或は考察し、或は推論し、或は諷刺を事とし、或は頓才を弄するこそ、殆ど其が本領たる想像力の正産物を物するの度に相ひとし。ひまり『神女王』に於けるスペインサアの曲調のみは、詩歌なり、悉く詩歌なり、曲として詩歌ならざるはなし。彼れの作は變化窮極無き音樂の妙音につれて綿々と開展せられ來たるまぼろしの連環なり」

と。又曰はく

「一方に於ては、其の妙想を創起し又は受胎することに於ける工夫と意匠と、他方に於ては、いみづく美妙を感覺して、活ける如く、且つ音樂の如くに、諸の言葉を表白する自在の

技倆、是れ實にスペインサアの詩の他の諸作に異なる大なる特質なり」。

と。げにや、スペインサアの詩の如きは、譯すれば、其の靈妙を毀損するを定則とせる東西古今の詩歌中に於て、最も譯すべからざるものなるべし、彼れの作の靈妙はをさく詞調の間に存すればなり。但し、スペインサアが詞致はエリザベス朝に於てだに已に古雅を以て聞えたるほどなれば、今日之れを玩味せんとすれば、殆どチーサアの作を読むときと同等の困難を感ずべし。彼れの詞の古雅なるは、一は其の主題の古史譚なるが爲なりと雖も、一は其の理想及び好尙の兎角に保守的なりし爲也。彼れは後のウルトア、スコットにひとしく過去を追慕するの情の深かりし人なり、其の平常の生活も、思想も、むしろ中古的、貴族的にして、政治上、文學上に於ける意見も、總じて保守的なりしこと明かなり。スペインサアはエリザベス文學の前驅にして、其の全盛の太氣は其の呼吸する能はざりし所なり。彼のベーコンの論文は『神女王』第六篇の發兌と同年にいでたり、シェイクスピアの傑作の如きはスペインサアの見るに及ばざりしものなり。要するに、理想及び好尙の上よりいへば、スペインサアは王政期の詩人にして、種々の要點に於て、後の平民期、即ち十九世紀の詩人

とは甚しく致を殊にせる者なり。

『神女王』の第一巻を開きて、こゝにその物語の大要と譬喩のあらましとを説かんに、

赤十字の武士セント、ジョールジが壺姫と矮奴とをぬて冒険の旅路にたちいでけるはト
めは、行手の道々に、清き小川流れ、美しき花ども咲き満ちて、樂しきこと限なしと見えけ
れば、我れも、人も、天が下は到る處皆此のごとく常にうつくしかるべし、と思ひけり。さ
るほどに、天氣いつしか冥驟と黒雲だちて、花どもは俄にうなだれ、風はおそろしく吹き
すさみ、姫も、武士も、行き懼みつゝ、ゆくりなき暴風雨を避けんとて、とある森のうちに潜
みけり。此の森のうちの景色、得もいはずめでたく、蒼々と繁れる木々、滋々と生へる艸
ども、樂しげに囀る鳥、面白く蛛手なせる小徑、物として行人の心を牽かざるはなかりけ
れば、人々そぞろに深入りして、八重濤のやうなる林間の路に迷ひ、進退きはまるにおよ
びてやうく心附き、元來しかたへ戻らまくすれど、ゆけどく深入りするばかりにて、元の
みちすぢにいづること叶はず。

此の怪しの森の迷路は、明かに人生の行路難に擬したり。林樹は悉く種々の人間
生活を代表せり、老櫛を國王に擬し、月桂樹を勝利并びに詩人に擬し、垂縦垂柳を愁
に沈める情人に擬したるなど、管々しきままでに周細なり。

其のうち、來るともなしに、晝だに小昏き森陸の洞(迷妄の洞)の前に來にけり。さてセ
ント、ジョールジは勇を鼓して件の洞のうちに進み入りけるに、四下暗うして文目を分き
がたし。されど其が被たる胃の光にて向かひを見れば、女の面したるおそろしき妖怪
其の奥に臥して居り、今ジョールジが來たれるを見て猛然とかけいで、只一くちにくはん
としつ。はトめは武士が身危うげに見えけり。

此の怪物は迷妄の洞の精にておそろしき毒蛇なり。ジョールジの被れる甲冑は義
若しくは正を代表す。即ち、人の誠心を守る物の具なり。

“God helpe the man so wrapt in Errors endless traine!”

壺姫かたはらより聲をかけ、いでや、今まことのますらなとなりたまへ、勇氣に添ふるに
信仰をもとして、勇ましく戦ひたまへ。御身毒蛇をえ殺さずば、毒蛇つひに御身を殺さ
ん」と呼びひける。武士此の言葉に力を得て奮闘し、辛うじて怪物を斃しけり。

案ずるに、此の段は發心の第一着として迷妄の障碍を除かざるを得ざる由を諷し
たり、又顯然たる謬妄の認め易く、また滅し易きを諷したり。以下くさくさの厄難
は一層陰險なる諸の煩惱と至誠との争闘なり。

かくて迷、惑の森を逃れいで、再び旅路に上るほどに、いつしか日は全く暮れたり。折
から隱者の姿したる尊げなる翁、いづこよりさもなく來て、宿をかささん、といひて、人々を

そが谷かげの庵に誘ひゆきぬ。此の翁、外面はいさ殊勝げに見えけれど、まことは正を忌み邪をよるこべる卑怯陋劣なる魔術家にて、其の名を使魔道人アキマツト(偽善者)といふものなりけり。彼れは日ごろ壹姫の無邪純正なるを憎み嫌へりしかば、まづ其の守護者たる赤十字の武士を除きて、彼の姫に憂き目を見せんと欲し、其の夜ジョールがよく眠れりし時、睡魔を使ひて怪しの夢を見させ、彼れが心を惑はせ、竟に壹姫にみだらなる行あるやうに疑はせければ、武士は淺はかにも耻ぢ怒りて、其のあした、急に矮奴をぬて、例のあら馬の走るにまかせて、姫をふりすて、去りけり。壹姫かくと知りて打なげき、其の後をなしたひて魔術家の宿をいでけれど、荒れたる馬のあがき早くて、其の主の影なきへに追はんに由なし。

此の段、偽善のおそるべきを諷せり、誠も之れが爲にはくらまされ、眞も之れが爲には惑はさるゝことを示す。矮奴は人の肉體を代表し、又時としては常識を代表し、又本篇の寓意が政治的となれる時には、下等社會の民衆を代表せることあり。乗馬は動もすれば理性の制御を蔑如せんとする煩惱(邪慾)を代表す。こゝの壹姫は偽に對する眞とも見るべく、邪教異端に對する眞正の宗教とも見るべし。

さるほどに赤十字の武士は、姫に分かれゆく途にて、端無くも一個のサラセンの武士と一人の佳人とにいであひぬ。武士は其の名を無信(不信者)といひ、女はフィアッサ(眞實)と呼

べり。ジョール(誠心)はサンフォイ(無信)と格闘して難なく彼れを斃しけれど、フィアッサ(眞實)の名のめでたきと其の面の菩薩のやうなるとにあざむかれて、得も殺さず、刺へ、彼れが語る個の履歴をまことと思ひて介抱し、このいちには我れ將てゆかん、といひければ、フィアッサはひたすら媚を献じ、ジョールが心をさらかさんまつさめけり。

誠の眞に離るゝや、邪見と偽と忽ち來たり襲ふ。フィアッサは假名なり、實名をヂュエッサといふ。ヂュエッサは貳の義、唯一不二なる眞に對する偽を代表す、又羅馬舊教を代表す。而してサンフォイは邪見を代表す。誠は邪見を破る力あれども、偽を退くる明無し、眞に離れたれば也。されば此の段は、一方よりいへば、英國々人が眞正の教を抛擲して、しばらく不信邪見におちいりしを諷せり。

さてもジョールはフィアッサを伴ひて往くうちに、眞晝の暑さ堪へ難かりければ、或大樹の下に休らひて陸を求め、フィアッサの爲に其の木の一枝を手折りて、臺をつくらんとしけるに、怪しや折れたる木口より鮮血流れいで、怪しき聲を發し、「疾くこゝを逃れ去りれ」と叫びけり。ジョールの驚き怪むを、怪樹はおしなだめて、おのが不幸のこしかたを語るらく、「我れ元はフラジュビオ(懷疑)といふ者にて、フレイリッサといふ美人を妻さしたりしが、或時ヂュエッサといふ一人の美しき妖婦にあうてより、はげめの程こそはフレイリッサと彼れとの間に美醜の優劣を定めかれつれ、遂には妖婦の魔術にあざむかれて、フレイリッサを見すて、ひたすら件の妖婦にのみしたしみぬ。しかるに、其の後ゆくりなくも、醜く又お

そろしき妖魔の正體を垣間見てければ、我れいたく悔い悲しみ、いかで彼れに離別せんすべもがなと念するうち、彼れ斯くぞ知りて太く怒り我れと我が元の妻をば妖術もて淺ましき木と化せしめにき。御身もようせずは同十妖魔の禍にかゝるべきぞといふ。

案ずるにフレイリッサ女は主にブレトリーの哲理を代表せるならん、即ち、懷疑が偽基督教(チエッサ)と純良なる異端(ブレトリーの哲理)との間に取捨を決しかねたるを表したり。此の時ショールツが「汝等を元の身に復する法無きか」といへるに答へて「活泉に浴するにあらざれば能はず」といへるは、ブレトリーの哲理の、もはや基督教の旨と合體して新活力を得來たらざる限は、世道人心に効能無きを諷したるにや。

されどもショールツは、フラスビエオの所謂妖婦をば、我が伴へるフィテッサとは夢にだに知らざれば、彼れが偽りて隠絶したるをさまざまにいたはり、其が胸にのらせて、又もそこを立出でけり。それはさておき、壹姫はショールツに見すてられても怨める色もなく、いかに今一たびめぐりあはせやと、あちこち尋ねめぐり、さまざまひあるき、其の二日目には、心も身もつかれて、或森のうちにいこひたる、其の姿いみじうけだかし。

“Her dainty limbs did lay

In secret shadow, far from all men's sight;

From her fayre head her fillet she undight,

And layd her stole aside. Her angel's face,

As the great eye of heaven, shyned bright,

And made a sunshine in the shady place;

Did never mortal eye behold such heavenly grace.”

折から一頭の猛獅あり、突然と姫をかまんとてとびかゝりけるが、姫の清淨無垢なる貴さと美しさに撲たれて、忽然とおさなしくなりて、さながら飼犬のやうに、この時より念々姫が身邊に陪從して、其の非常の謙遜とぞなりける。

猛獅は人間の理性を代表せり、即ち、下に叙する所は、一面に於ては宗教革新以前の英國教會史をほのめかしたり。理性が眞正の教旨に一味して、無知、謬妄を破らんと試みたる趣なり。

壹姫が獅子を將て立寄りし賤が家に母と女と住めりけり、母は盲にて、其の名をコオシラと呼び、子をアベッサ女と呼べり。

コオシラは盲信を代表し、アベッサは無知を代表すると同時に、中古の墮落僧院を表したり。英語、女僧をアベッサと云ふ。

アベッサは、壹姫に物いひかけられても、聞くことも言ふことも得せざれど、獅子のすさまじき姿を認めれば、おそろしがりて家の中に逃げ入る。母もまた驚きうろたへけるを、壹姫やうくささしなだめて、その夜はそこに宿りけり。あかるに小夜中になりて、寺院堂宇に入りて寶物を盗むことをなりはひさせ、カルクラピンといふ悪漢入り來て、盗み物の寶ども取りいで、アベッサに與へ、ふきりに其の心を取る。

カルクは會堂の義、ラピンは剝奪強掠の義、即ち貪婪なる墮落僧を代表す。

猛獅(理性)は此の賊漢を見るや、大にたけりて飛びかゝり、只一かみにくひ殺しぬ。

此のあたり、寓意こみ入りたれど、一面には、人間の理性の殘賊の所業を惡むことをあらはし、一面には、ヘンリ八世が諸寺院の財産を沒收せし事を諷せるならんといふ説あり。後の寓意は、俗にいふ、バウケなれば、後世の讀者には興無し。さて、スベッサーが倫理説によれば、人間の道を成ずるは理性の力のみにはよらで、むしろ神明の冥助によれり、かるが故に、著者は第三章の末にいたりて、獅子(理性)の落命を描けり、左の如し。

壹姫の盲女の家をたちいで、尙もショールツを尋れめぐらうちに、圖らずも其の人の彼方より來るにあひければ、よろこぶこゝ限無し。こはまことの赤十字の武士にはあらで、前に見えたる使魔道人の、巧に假裝したるなれど、姫は未だ心附かず。さる程に、さ

きに眞の赤十字の武士に殺されしサンフォイ(無信)の弟サンロイ(無法)といふ者、兄の敵を討たんとて、處々を經めぐり、今しもアーキマゴが胸甲と楯に赤十字の紋章を着けたるを認めて走り近づき、戦を挑みけり。アーキマゴは卑怯の本性なれば、大におそれ惑ひけれど、今更逃れんすべなくて戦ひけれど、立ちどころに痛手を負はされて倒れき。サンロイが立ちかゝり息の根をさめんとするとき、假裝のはがれ落ちたるによりて、其の人たがへなりしを知り、姫も今まであざむかれたりしを覺り、驚くこと甚し。サンロイは姫の美しきを見て、ひきたて行かまくす。獅子(理性)はかく見て大にたけり、躍りかゝりてサンロイをかまんとしけれど、彼れが暴勇に敵し得ずして、却りて其の命をおとしけり。

此の段、偽善の眞を保護するが如く見えて、竟に保護する能はざるを諷し、且つ道理(理性)もまた無法には敵し得ざるを諷す。

あはれ、姫はサンロイ(無法)にさらへられて、深林のうちに伴はれ、辱をも受けなるとしたる時しも、姫が哭き叫ぶ聲を聞きつけて、四方の林、山、河等より怪しの精ども群りつゝ、かけ來て、まづサンロイをおひのけて姫を救ひ、やがてそが賤しき宿に伴ひゆきて、いたはりかしくことれんごろなり。姫はあばしそこに足をとめて、此のむくつけきやらに、くさくさの雅びたる手わざを教へ、彼等がいやしき風俗を化せんと力めき。

山精、林精のむくつけきは、蒙昧野蠻の民を表せり。此の段は人の固有の性の眞教

の美を認識するも、其の美なる所以を覺悟する能はざるを示せるならん。

“During which tyme her gentle wit she plyes

To teach them truth, which worship her in vaine,

And made her th' Image of Idolotryes.”

之れより先き、まことの赤十字の武士セント、ジョールジはファイデッサの妖術にまよはされて、ゆく／＼邪道に陥入り、竟に彼れがすゝめに任せて、崩れ易き沙丘のほそりに建てられたる、いさきら／＼しき宮殿に立寄りける。此の宮殿は邪神女ルシフェラといふが、みづからほしいまゝに女皇と稱して、もろ／＼の悪しき神どもを従はせ、驕奢暴慢に耽りて、年／＼ろすまへる館なりき。ジョールジとファイデッサとが此の宮殿に宿れる間に、サンロイの三人兄弟の一人なるサンザイ(無悅)といふ者、こゝに來たり、赤十字の紋章によりて兄の敵を知り、決闘せんさ迫り、竟にジョールジとサンザイとめざましき格闘をす。ジョールジは此の戦にて重傷を負ひけるが、奮戦して敵手をも倒し、殆ど彼れを殺さんとしけるに、妖婦雲を起こしてサンザイをかくしければ、果さゞりき。其のうちに、矮奴(常體)が其の本能の力にて其の主の身の危きを窺ひ知り、とく此のところを落ちたまへ」とすゝめければ、ジョールジもやうやく心附き、手疵の痛を忍びて驕奢の館を逃れいでき。されどファイデッサが早くもかくと知りてしたひ來たり、またも巧言令色をもてジョールジか心をさらかしければ、武士は身も心もやう／＼、たゆみ、現世に在る限り、決して脱すべからざる正

義の甲冑をもぬぎすて、或木の下に休らひける。此の油断の折しも、オルゴリオ(傲慢)といふ巨人進み近づき、只一撃にジョールジをうち倒し、妖婦のすゝめにまかせて、或土牢のうちに押しこめけり。かゝりしかば、愚直なる矮奴はジョールジがぬぎ棄ておきし甲冑を荷ひて、ひとりまことの姫を尋ね、あちこちさまよひぬ。此の時しも、壹姫は精等が宿をたちいで、またも赤十字の武士を尋ねめぐりつゝありければ、竟に端なくも矮奴にいであひけり。

矮奴は赤十字の武士が災厄を語り、姫と共に不幸薄命を打歎きけるが、たま／＼大英傑アーサーが靈夢に感じて神女皇にあひ見んと志して、神仙國にゆかんとて、このあたりをよぎれるに遭ひて、一伍一什のこしかたを語り、其の宏大なる助力を得んことを乞ふ。これより、アーサーが其の請を納れて巨人が居を襲ひ、難戦して竟に巨人とチェエッサが騎りたる神變不思議なる怪物とを殺し、赤十字の武士を救ふこと、チェエッサが竟に醜惡なる本相をあらはすこと、壹姫の言葉にしたがひて彼れを放免すること、それより赤十字の武士が大に懺愧し、やがて自暴自棄の病におちいらんとせしを、壹姫が深切なる介抱と意見とによりて蘇生し、さて懺悔の功德にて前日の重傷を療治すること、並びに信望、慈といふ三姉妹が事、ジョールジが更に勇を鼓

して壹姬の故國に趣き、數日の間毒龍と苦闘して、竟に神明の加護によりて彼れ(悪魔王)を滅する事及び眞と誠とのめでたき結婚に至るまでを第一卷のあらましの筋とす。

第二卷にはガイオン(宜)の徳といふ武士が神女王の命をうけて懶惰湖の一島に棲へる魔女を退治することを叙し、

第三卷にはウエールス國の女王フリトマーチス(淨の徳)といふ女丈夫が、未來の所天を尋ねて、諸國を武者修行し、遂にアーテガル(公正)の徳、第五卷の主人公にめぐりあふことを述べ、

さて第四、第五、第六の卷にては、フリトマーチス、アーテガルの傳を續ぎて友誼公正、禮讓などいふ諸徳を稱揚せり。

『神女王』は各卷十二章より成り、各章平均五六十解を有し、一解は九句より成れり、かるが故に全篇を通計すれば無慮四萬句に及ぶ。作者は初めの三卷に十年の口子を費し、終りの三卷に六年を費しきと傳へたれば、豫定の通り十二卷を終へんには、尙ほ十年以上の日月を要すべく、隨うて、絢爛を極めたる詞句と複雑を盡したる

結構とは到底末までも持續せんことかたかりしなるべし。そは兎も角も、現存七篇について見れば、第一卷最もめてたく、第二卷これに次ぎ、第三卷以下はやゝ前の二卷に劣りたるは争ふべからず。然れども、一節々々には遺却すべからざる巧妙なる佳什も乏しからずとす。例へば、第四卷なるギーナスの殿堂并びにテムズ河の結婚に百川の集へるを歌ひたる節、又は第六篇なる牧羊者とカレドンとの上を叙したる節、及び女神の踏舞并びに變り易さを歌へるうちの第二章に見えたる四季の行列の如き是れなり。而して叙景の妙と律調の美とに至りては、各卷いづれも優劣なし。

『神女王』に用ひたる律格は、彼のボカチオの創めきといふ *Ottava rima* (昂起五歩格)の八行體より脱化せる九行體(所謂スペインシリヤン)にして、後のトムソン、シエリー、テニソン等が物語歌の律格の上に抄からざる影響を與へたるものなり。

第五章 スペンサーと同代の詩人及び散文家

エリザベス時代の詩歌——第一小期(戀愛の詩)——ソネット體及びソング體——第二小期(愛國及び國史の詩)——諷刺詩——第三小期(哲學的詩歌)——散文家——フッカー及びローリー

英文學史 第二篇 第五章 スペンサーと同代の詩人及び散文家

エドマンド、スペンサーが諸作は頗るよく英國に於ける學藝復興期の傳奇的精神を反映したれども、未だ以て當代の全相を現じたりといふべからず。エリザベス時代の英國生活の全相は、他の諸家の作を通覽し、さて後にはじめて窺ふを得べきなり。姑く劇詩(即ち脚本)を除きて、尋常の詩歌のみを検するも、一千五百八十年以後の詩歌は、おのづから四種に分かれて、明かに國民生活の進化變遷を代表せり。假に此の四段の進化を個人の一生に譬ふれば、第一は年少血氣の期にして、戀歌、傳奇の歌、空想の歌などの最も盛に行はれたりし時なり、第二は國民がやう／＼大人びたりし時、即ち放縱なりし情熱が次第に冷却し、定まれる目的もなくして實行又は思索に狂奔したりし意氣の漸く沈み、一意國家を重んじ、國家の爲に行爲し、國家の爲に思索し、國家の爲に謳歌せんとする愛國心を抱くに至りし時、すなはち彼の史劇家の輩出し、愛國の詩歌の行はれたりし時なり。さて其の次なる第三期は、眞に老成時代と名くべき時なり、國民の熱心と才力とが、もはや事物の外相の上に向かはずして深く諸相の内面に入れりし時、即ち國民の心や、眞摯慎嚴となり、其の分別思量する所もまた頗る深刻となりし時なり。これ詩歌の方面に於ては、頻に哲

學的著作のいてたりし時にて、シェイクスピアが最傑作と稱せられたる悲劇は總じて此の際に物せられき。さて第四期はや／＼上の三時期とは趣を異にせり。上の三期は、之れを青年、壯年、強年に喩へ、若しくは春期、夏期、秋期に喩ふるも不可無きものなれど、第四期に至りては、之れを老年若しくは冬期に喩へんことや、穩當ならぬ所あり。蓋し、此の第四期は、前に擧げたる三期の正當なる引續きたるよりは、むしろ宗旨上、に關する軋轢といふ一新原素を加へたる新變遷の端緒なれば、こはエリザベス時代の末年といはんよりは、むしろ次なる内亂時代の發端といはんかた穩なるものなり、換言すれば、舊信仰と新信仰との軋轢がまさに關ならんとせし時なり。かの宗旨に關したる詩歌の多く出でたりしは此の際なり。此の略史に於ては、以上四期中に出でたりし夥多の作家を悉く紹介する能はざるが故に、其のうち最も有名なるもののみ若干を取りいで、略叙し、マロー、シェイクスピア、ベンチオンンなどは別に章を改めて説き、所謂第四期の諸作家の如きは次の内亂時代の篇に於て語るべし。

第一小期の歌即ち戀愛歌の秀逸なるものは、バルクレレーが編集せる『黄金

『^{トレンナー}庫』の第一巻中にあり、よりて此の種の一斑を窺ふことを得べし。其の主題の大
概は青年の戀愛若しくは空想に關す、而して其の體式はあしなべて抒情歌の簡短
なるもの、即ちソングの體、ソネットの體なり。ソネット即ち十四行體は一千
五百八十年より一千六百年に至るまでを極盛なりし期とす、詩集の刊行せられし
こと十數篇、皆後世に傳はれり。作者はシェイクスピアを第一とし、スペンサアを第
二とし、シドニを第三とし、これに次ぐものを下の諸家となす。

フルク、グレギル Fulke Greville. (一五五四—一六二八)は後年アルック卿となりし人、
ソネット集一卷を著しき、"Ceilia"と題せり。トマス、ウァトソン Thomas Watson. (一
五五七—一五九二)はロンドンに生れ、オックスフォードにて教育を受けたりし人、
詩オシドニに次ぐ詩集 "Heatompathia" (又の名 "Passionate Century") "Tears of Fancy"
等を著しぬ。ヘンリ、コンスタブル Henry Constable. (一五五五—一六一五?)はシド
ニの親友、詩風また相似たり。"Diana" は其の傑作なり。其他、ミックケール、ドレ
イトン (一五六三—一六三一)は短歌集 "Flea" を著し、サミュエル、ダンネル (一五六二—

一六一九)は詩集 "Delia" を公にし、グリフィン Griffin. (一六〇二)は "Fidessa" を
リンチ Lynch. (一六一一?)は "Diella" を、スミス Smith. (一五四六?—一六一八?)は
"Chloris" を、刊行しき。

以上の諸作は、いづれも當代には相應に名ありし作なれども、其の價值に至りては
一々論ずべき程にあらず。まして、こゝに掲げざる歌人の作に至りては、更らに平
凡なりしこと推して知るべし。蓋し、當代の状態たる衣食足りて浮きたる快樂多
く、世俗の欲望も、青年詩人の感興も、往々にして戀愛の一邊にのみ集らんとせし有
様なりき。而して作者の大概はスペンサア、シドニ等の淺露なる摸倣者たるに過
ぎざりしなり。

ソング體の價值もまたソネットと大差なし。詩集に "English Garner," "Elizabethan
Lyrics," 等あり。詩人にショール、マヒール、エドワード、ダイヤア、ウオルター、ロバ、リ、
などあれど、今は總べて評するに及ばず。

第二小期の歌、即ち愛國の歌は、概して英國の史乘に關したるものなり。か
の『治者の鏡』の如きは此の種の詩の萌芽なりきといふべく、シェイクスピアの史劇の

如きは其の成熟せる果實とも稱すべし。所詮愛國の詩歌は國家昌盛の餘光にして、俗にいふ國自慢の意氣、感情が煥發して一風の詩歌となれるなり。按ふに、此の氣脈を代表したる者は(前にも見えたる)サミュエル、ダン、エル、並びにミッケル、ドレイ、トン、ウイリヤム、ウアーナアの三人なるべし。其の中最も傑出したるをミッケル、ドレイトンとす。其の作に長篇の史詩二あり、一を『エドワード二世と諸侯伯との軋轢』と題し、一を『England's Heroical Epistles』と題す。なほ別に『Polyolbion』と題せる長篇の作あり、こは韻語もて英國の名勝、舊跡を叙狀し、兼ねて種々の奇話、逸事を語りたるものにて、卷の數三十、韻語の行數無慮十萬なりといふ。短篇にては『The Baron's War』、『The Miseries of Queen Margaret』、『Four Legend's』など、すづれも名高し。ウイリヤム、ウアーナア(一五五八—一六〇九)の作には史詩『Albion's England』あり。當時の批評家はホーマーの作に比して稱美せしほどなりき。さてまたサミュエル、ダン、エルの作には『The Complaint of Rosamond』、『Cleopatra』、『The History of the Civil Wars』、『Hymen's Triumph』などあり。以上皆史詩としてとりくくの長所あれど、詩題に入るべからざる史蹟までも強ひて取り入れて吟詠せんと試しは

其の通弊なり。

戀愛詩、史詩の期を貫透し、兼ねて次の哲學的詩歌の期にまでも亘りて行はれたるは諷刺體の詩なり。或は以て戀愛歌、愛國歌の反面を窺ふの料ともなすべし。作者の重なるものは『A Fig for the World』を作せしトマス、ロヂ、Thomas Lodge。(一六二一—一六二五)、『Anatomy of the World』を作せしジョン、ドゥー、John Donne。(一五七三—一六三二)、『Virgideniarum』を作せしジョセフ、ホール、Joseph Hall。(一六五八)、『Pigmalion's Image』、『The Scourge of Villany』を作せしジョン、マー、John Marston。(一六三四)、『Skialetheia』を作せしエドワード、ギルピン、Edward Gilpin。(一六三四)、『Transformed Metamorphosis』を作せしシリル、トゥールナア、Cyril Tournour。(一六三四)など。按ずるに、詩歌に諷刺の脈の入りはむめたるは、遠くスケルトンが勸誨の作を試し頃にありしかど、正當に諷刺詩とも稱すべきものゝ世に行はるゝに至りしは、彼のショール、マ、ガスコインが作『スチールグラス』に始まりきといはざるべからず。而して『スチールグラス』の世に出でしは、ホールが作『Virgideniarum』に先つこと僅かに二十年に過ぎざれば、諷刺詩は其の發生と發達とを殆ど同時にしきともいふべき

なり。さるは時勢の然らしめし所なるべし。

第三小期の歌即ち哲學的詩歌の興りしは、國家の隆運の漸く窮極せんとして所謂企業的热心の鎮定したるに職由す。すなはち、一方より觀れば、民衆の心に静坐し思索する餘裕を生ぜしに因る。されど、また一方より觀れば、當時の國民が漸く人生の大謎語に衝突し、沈思尋究の必要を感じたるに基くなり。さて此の種の詩脈を代表するものはジョン・デーギーズ(一五六九?—一六二六)とフルク、グレギル(一五五四—一六二八)との二家なりとす。

デーギーズが壯時の作“Orchestra.”は全世界を一舞踏と解釋せるものなるが、其の晩年の作に至りては理窟又は概念に流るゝことますます甚しく、詩趣に遠かることいよゝ甚し。『自己を知れ』といふを其の長篇の表題としたるを見ても、其の詩の如何なるかを察するに足りぬべし。シェイクスピアの如きも、多少此の氣脈に感染したりし證據、其の喜劇より悲劇に移る過渡に、ほの見えたり、すなはち一千六百〇一年の作是れなり。さてフルク、グレギルは上に挙げたる“Ophelia”の作者にして“Poems of Monachy.”“Treatise on Religion.”等の諸作あり。詩人と

John Davies.

Fulke Greville.

しては或はデーギーズの上にあるべし。

要するに、民心上に於ける此の哲學的傾向は、後に空想を擺脫するに及びて、ホツプズ、ペーリントン、ロックなどいふ純平たる大思索家を出だす前兆なりき。

リ、シドニ等が華文につぎてエリザベス朝に於ける散文の名家として傳ふべきは、宗教文學にてはリチャード・フッカー、史家にてはウォルター・ローリー、哲學上の論說にてはフランシス・ベーコン、此の三家とす。フッカーとローリーとは第二期のエリザベス文學中に攝すべきものたるよりはむしろ第一期中に屬せしむべきものなれど、便宜の爲にこゝに附叙す。

リチャード・フッカーは温厚篤實なる神學家にして、實際家即ち活動の人としては大に傳ふべきもの鮮なけれども、文壇の俊豪としての聲譽は長く、其の名著“Treatise on the Laws of Ecclesiastical Polity.”と共に傳はりたり。一千五百五十三年に生まれしが、家甚だ貧なりしかば、オックスフォードなるコオバス、クリスチ、コレッチといふ大學の筆生となりて苦學すること十五年あまり、遂に校友に擧げられ、ついに講師となりぬ。かくて千五百八十四年、同州の教會長となり、説教に従事すること

Richard Hooker.

と七年にして、退きてウルトシヤ及びケントに閑居し、“Ecclesiastical Policy.” 八巻を著し、が、一千六百年にみまかりき。此の書の初四巻は一千五百九十四年に、第五巻は同九十七年に印行せられ、六、七、八の三巻は其の没後に出版せられき。此の著の當面の目的は教會員に對する英國基督教會の權理の基礎を考定し、該教會の根本大法を講明し、且つ各會員が常に教會に對して遵守せざるべからざる義務の本領等を論定するにありき。たゞし、そはたゞ直接の文義にして、更に深く含味するときは、フッカーの所論は其の關係する所頗る深遠なり、此の書は常に英國教會の權理義務を論定して羅馬教徒并びにカルピン教徒の妄を破せんと試みたるものといはんよりは、寧ろ一切の政治及び宗教上に於ける法規、權利、義務等を講明せんと試みたるものともいふべし。其の文辭は明暢雄勁にして、そのころ神學上の著述の常弊たりし虚飾術學の失に陥りたる點いと尠し、而もそのづから修辭の則に合ひて典雅醇正なる好辭妙文に乏しからず。たゞ多く羅句語格を應用せんと力めたる折ふしには、強ひて英語を曲折せしめたる嫌ひもあれど、全軀の上よりいへば、辭意双つながら此の著の如きはいと稀なり。其の爲人本來忍容の雅量に富めり

しが故に、其の論旨もまた頗る中正にして穩當なり。

ウオルター・ローリー(一五五二—一六一八)は當代第一流の俊傑なり。壯にして秀才の譽高く、文武の功績尠からざりしかば、女皇エリザベスの殊寵を蒙り、遠く亞米利加の新土に航してヴァジョニヤの植民及びギヤナの攻略によりて更に盛名を博し、且つはじめて馬鈴薯と煙草とを英國に輸入せり。身を終ふるまでに、政治、航海、金鑛等に関する著述凡そ三拾餘種に及びきといふ。後世には、重に歴史家として知られたれど、其の世にありしや、廷臣としても、武將としても、航海家としても、政治家としても、はた詩人兼散文家としても、錚々の譽高かりき。エリザベス崩じ、ジェームス一世皇位を繼ぐに及びて、ローリーは故無くして王の忌諱に觸れ、罪ならぬ事犯の罪を得て、獄に繋がるゝこと十餘年なりしが、新に王家の爲に南米に渡航せんことを獻議して一旦其の罪を赦されしかど、企業其の功を奏せざりしかば、又もや王の不興を醸し、一千六百十八年更に前罪によりて死刑に處せられき。之れより先き、十二年間獄に在りし折から、をさゞ理學、文學などの研究に従へりしが、幸ひに博學多識なる友人等の助ありしかば、竟に獄中にて、彼の有名なる『世界史』を卒